松江市文化財調査報告書　第107集

二反田遺跡発掘調査報告書

2006年８月

松　江　市　教　育　委　員　会

財団法人松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書　第107集

二反田遺跡発掘調査報告書

2006年８月

松　江　市　教　育　委　員　会

財団法人松江市教育文化振興事業団

例　　言

1．本書は、㈲不動産ラインズの依頼を受けて、松江市教育委員会と財団法人松江市教育文化振興事業団が平成17年度に実施した民間宅地造成に伴う二反田遺跡の発掘調査報告書である。
2．本書に掲載した遺跡の所在地は、島根県松江市春日町59、60ほかである。
3．Ａ～Ｅ区は平成17年７月１日～８月31日、Ｆ区は平成18年１月10日～２月27日の期間に調査を行った。
5．本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。また、レベル値は海抜標高を表す。
6．本書に掲載した地図は、国土地理院発行1／25,000と、松江圏都市計画図1／2,500をそれぞれ縮小・拡大して使用した。
7．本発掘調査で使用した基準点は、開発業者から提供されたものである。
8．発掘調査時に作成した図面、写真および出土遺物は松江市教育委員会が保管している。
9．本書に掲載した写真は、調査員および補助員が撮影した。
10．本書の執筆は、飯塚、廣濱、三木、瀬古が行い、文責は目次に記した。
11．現地調査および報告書の作成にあたっては下記の方々より多大なご指導、ご教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。（敬省略、順不同）

原田　敏照、柳浦　俊一、稲田　陽介（島根県埋蔵文化財センター）

凡　　例

1．本書で使用した遺構番号は以下のとおりである。
　Ｐ…ピット　ＳＩ…竪穴住居　ＳＫ…土壙　ＳＤ…溝
2．発掘調査時に作成した図面・写真等の記録類、現場で採取した遺物の注記には調査時の地区名・層位名・遺構名を記載している。
3．本書掲載の遺構図、遺物実測図の縮尺は図中に表示した。
4．本文、挿図および写真図版の遺物番号は一致する。
5．遺物番号には次の略号を付し、遺物の種別ごとに番号を通した。なお須恵器は断面を黒塗り、それ以外は白抜きとした。
　番号のみ：土器、土製品　Ｓ：石器
7．遺物観察表は、原則として遺物実測図の下に付した。なお、表中法量の（　）は復元値もしくは残存値を示す。
8．遺物年代決定に参考にした文献は、文末に記した。

目　　次

例言・凡例
目　　次
挿図目次
図版目次

第1章　調査に至る経緯
第1節　調査の経緯……（飯塚康行）1
第2節　調査体制……2

第2章　位置と歴史的環境……（廣濱貴子）3

第3章　A～E区の調査
第1節　調査の概要……（三木雅子）6
第2節　調査の経過……（　〃　）10
第3節　検出した遺構と遺物……（　〃　）10
第4節　包含層の調査と出土遺物……（　〃　）19
第5節　小　　結……（　〃　）35

第4章　F区の調査
第1節　調査の方法……36
第2節　調査の概要……（瀬古諒子）36
第3節　小　　結……（　〃　）47

第5章　総　　括……（　〃　）48

挿　図　目　次

第１図　調査地区配置図…… 1
第２図　松江市位置図…… 5
第３図　周辺の遺跡…… 5
第４図　Ａ～Ｅ区地区配置図…… 6
第５図　Ａ～Ｅ区遺構配置図…… 7･8
第６図　Ｃ・Ｄ区西壁面土層断面図…… 9
第７図　SK01平面図・断面図
　　および出土遺物……10
第８図　SK02平面図・断面図
　　および出土遺物……11
第９図　SD01平面図・断面図
　　および出土遺物……12
第10図　SD01出土遺物……13
第11図　SD02～SD04
　　平面図・断面図……15
第12図　SD02･04出土遺物……16
第13図　Ｄ区ピット配置図……18
第14図　ピット平面図・断面図
　　および出土遺物……19
第15図　７層出土遺物 ……20
第16図　10層出土遺物(1)……21
第17図　10層出土遺物(2)……22
第18図　10層出土遺物(3)……23
第19図　10層出土遺物(4)……24
第20図　10層出土遺物(5)……25
第21図　10層出土遺物(6)……26
第22図　12・13層出土遺物(1)……27
第23図　12・13層出土遺物(2)……28
第24図　12・13層出土遺物(3)……29
第25図　12・13層出土遺物(4)……30
第26図　12・13層出土遺物(5)……31
第27図　12・13層出土遺物(6)……32
第28図　12・13層出土遺物(7)……33
第29図　遺構外出土遺物……34
第30図　Ｆ区地形測量図……36
第31図　Ｆ区遺構配置図……37
第32図　Ｆ区北壁土層断面図……38
第33図　Ｆ区ＳＩ01実測図……39
第34図　Ｆ区ＳＩ01出土遺物実測図(1)……39
第35図　Ｆ区ＳＩ01出土遺物実測図(2)……39
第36図　Ｆ区ＳＩ02･03実測図……41
第37図　Ｆ区ＳＩ02･03遺物出土状況……42
第38図　Ｆ区ＳＩ02･03出土遺物実測図……43
第39図　Ｆ区SD01･02実測図・
　　出土遺物実測図……44
第40図　Ｆ区遺構外出土遺物実測図……46

図　版　目　次

図版１　１．Ａ～Ｄ区調査前全景（南東から）
　　２．Ａ～Ｄ区完掘全景（南東から）
図版２　１．Ａ～Ｄ区完掘全景（南から）
　　２．Ｅ区完掘全景（南から）
図版３　１．SK01土層断面（南から）
　　２．SK01完掘状況（南から）
　　３．SK01出土遺物
　　４．SK02土層断面（北から）
　　５．SK02完掘状況（南東から）
　　６．SK02出土遺物
　　７．SD01出土遺物
　　８．SD02･04出土遺物
図版４　１．SD01～SD08
　　完掘状況（東から）
　　２．SD01～SD08
　　完掘状況（西から）
　　３．SD01A－A'
　　土層断面（西から）
図版５　１．SD01　Ｄ区西壁面土層断面
　　（北東から）
　　２．SD02完掘状況（南東から）
　　３．SD02土層断面（南西から）
　　４．SD03･04完掘状況（西から）
図版６　１．Ｄ区ピット完掘状況（北西から）
　　２．Ｐ10土層断面（南から）
　　３．Ｐ13土層断面（南から）
　　４．ピット出土遺物
　　５．７層出土遺物
図版７　１．10層出土遺物(1)
　　２．10層出土遺物(2)
図版８　１．10層出土遺物(3)
　　２．10層出土遺物(4)
図版９　１．12･13層出土遺物(1)
　　２．12･13層出土遺物(2)
図版10　１．遺構外出土遺物
　　２．Ａ～Ｅ区出土石器
図版11　１．Ｆ区調査前近景（南西から）
　　２．Ｆ区南西側調査後（南西から）
図版12　１．Ｆ区東側調査後（南西から）
　　２．Ｆ区ＳＩ02･03完掘状況
図版13　１．Ｆ区ＳＩ01検出状況
　　２．Ｆ区ＳＩ01土層堆積状況
　　３．Ｆ区ＳＩ01遺物出土状況
図版14　１．Ｆ区ＳＩ01完掘状況(南西から)
　　２．Ｆ区ＳＩ02完掘状況(南から)
　　３．Ｆ区ＳＩ02遺構・遺物検出状況
図版15　１．Ｆ区ＳＩ02中央ピット土層断面
　　２．Ｆ区ＳＩ02壺・高杯出土状況
　　３．Ｆ区ＳＩ02鼓形器台出土状況
図版16　１．Ｆ区ＳＩ03完掘状況（西から）
　　２．Ｆ区ＳＩ03遺構・遺物出土状況
　　３．Ｆ区ＳＩ03鼓形器台出土状況
図版17　１．Ｆ区ＳＩ03高杯（脚部）出土状況
　　２．Ｆ区SD01･02完掘状況（南から）
　　３．Ｆ区発掘作業風景
図版18　Ｆ区ＳＩ01･02出土遺物
図版19　Ｆ区ＳＩ03出土遺物
図版20　Ｆ区遺構外出土遺物

第１章　調査に至る経緯

第１節　調査の経緯

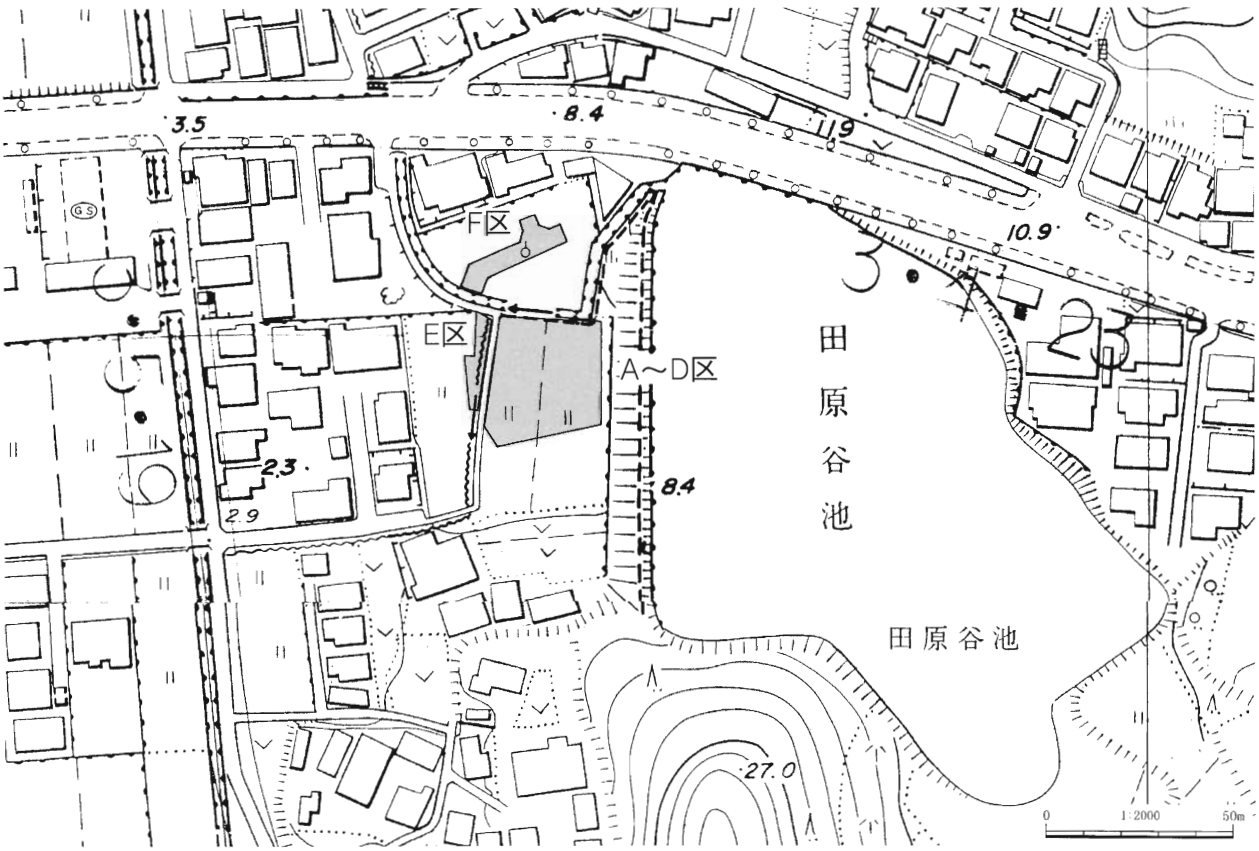
二反田遺跡は、松江市の市街地から北方へ約２㎞の春日町59番地ほかに位置する。現況は水田である。

有限会社不動産ラインズでは、春日町地内の水田約2,500㎡を対象として宅地開発を計画し、平成17年４月28日付けで松江市教育委員会あてに埋蔵文化財分布調査依頼書が提出された。

これを受けて同年５月６日にトレンチ５箇所による試掘調査を実施した結果、古墳時代の須恵器や土師器のほか、旧河道が発見されたことから、遺跡の存在が確認され、字名より「二反田遺跡」と命名された。

この遺跡の取り扱いについては、工事計画の変更が困難であることから、事業区域内の本発掘調査を実施することとなり、平成17年７月１日から平成17年８月31日の合計30日をかけてこれを実施した。調査面積は884㎡である。（Ａ～Ｅ区）

その後、二反田遺跡の北側に隣接する南向きの斜面部約1,150㎡を対象として２期工事が計画され、遺跡の存在する可能性が考えられた事から、同年９月20日にトレンチ３箇所による試掘調査を実施したところ、古墳時代初頭の竪穴住居跡の存在が確認され、二反田遺跡の広がりとして把握された。２期工事にかかる遺跡の取り扱いについては、市道が設置される部分だけを本調査の対象とし、宅地部分は盛土施工により遺跡の地下保存を図ることとなった。本調査の期間は平成18年１月10日から平成18年２月27日の合計24日である。調査面積は180㎡である。（Ｆ区）　　（飯塚康行）



第１図　調査地区配置図

第2節　調 査 体 制

依 頼 者　㈲不動産ラインズ

主 体 者　松江市教育委員会

事 務 局　松江市教育委員会　教　　育　　長　福島　律子

参事(兼文化財課長)　岡崎雄二郎

文化財課調査係長　飯塚　康行

実 施 者　財団法人松江市教育文化振興事業団

理 事 長　松浦　正敬

専務理事　長野　正夫

事務局長　松浦　克司

調査係長　瀬古　諒子

(A～E区)　調 査 員　落合　昭久

補 助 員　廣濱　貴子、金坂　有史、三木　雅子

(F区)　調 査 員　江川　幸子

補 助 員　野津　哲志

本書に掲載した遺物の実測およびトレース、遺構のトレースは主として下記の者が行った。

遺物(実　　測)：北島和子、善家幸子、高尾万里子、時安順子、野津哲志、野津里佳
秦愛子、廣濱貴子、三木雅子

(トレース)：北島和子、野津哲志、秦愛子、三木雅子

遺構(トレース)：飯野正子、野津哲志、三木雅子

発掘調査時には下記の方々に作業員として従事してもらった。(50音順)

今岡靖夫、岩成博美、角田ミヤ子、景山紀和、加藤恵治、木村俊弘、小松原茂、瀬利　貢、高橋　積、田中和美、土江直紀、時安順子、秦岡富士子、細田信子、細田勇治、三島昌美、吉岡永子、吉川　毅、渡部孝次

第２章　位置と歴史的環境

二反田遺跡（１）は松江市街地の北側、春日町二反田に位置する。島根半島の北山山系からつらなる比津丘陵、現在の淞北台団地から東奥谷町一帯にかけて丘陵が形成され、丘陵の南側には市街地を形成する平野部が広がっている。現在、調査区の北側には城北通りが通っているが、以前は小高い丘陵と丘陵間の谷底平野のようなところであったと考えられる。東側には農業用のため池（田原谷池）があり、調査前は水田と果樹園であった。

本遺跡周辺から旧石器時代の遺跡はまだ発見されていない。後期旧石器時代の安山岩製の尖頭器が大門遺跡(30)から、玉髄製の掻器が白鹿谷遺跡(12)から発見されている。

縄文時代の遺跡としては法吉遺跡があり、縄文土器やドングリの集積跡が検出された。

弥生中期の遺跡としては石田遺跡(48)があり、中期後葉の竪穴住居跡や加工段が検出され、弥生土器や石器、板状鉄斧が出土している。弥生後期の遺跡としては田中谷遺跡(28)や下がり松遺跡(26)が調査されている。竪穴住居跡や掘立柱建物跡、旧河道跡などの遺構が検出され、多数の弥生土器や石製品、木製品などが出土している。

古墳時代の遺跡は本遺跡周辺に多く存在している。古墳は北山山系から派生する丘陵尾根上や端部に多い。前期末の築造になると考えられている石田遺跡の石田古墳からは内行花文鏡やヒスイ製の勾玉が出土している。月廻古墳群(31)や折廻古墳群(17)は前期から中期の古墳群である。月廻古墳群は箱式石棺や礫床を伴う木棺が検出され、出土遺物から５世紀中葉を中心に比較的短期間に形成された古墳群である。塚山古墳(27)は１辺33mの造り出し付き方墳で、主体部には礫床の上に舟形と思われる刳り抜きの木棺を置く構造である。古墳時代中期のものとしては大きい方で、法吉周辺を拠点とした首長墓と考えられている。後期古墳としては伝宇牟加比売命御陵古墳(23)、岡田薬師古墳(10)が調査されている。伝宇牟加比売命御陵古墳は１辺16mの造り出し付き方墳で、主体部は石囲を伴う木棺であったと考えられる。岡田薬師古墳は横穴式石室ををもつ方墳で、墳丘の盛土途上において何らかの祭祀がおこなわれていた。他にも松ヶ峠古墳（９）や新宮古墳(24)、久米古墳群(32)、唐梅古墳群(34)などが存在する。６世紀後半以降になると多くの横穴墓が造られている。20基の横穴簿が確認され、人骨、須恵器、大刀などが出土した、ひのさん山横穴墓群（４）、後背墳丘をもつ横穴墓が確認された菅田横穴墓群（７）、比津ヶ崎横穴墓群(39)、ひゃくだ横穴墓(40)などである。古墳時代の集落跡の様相は余りよくわかっていなかったが、田中谷遺跡から掘立柱建物跡や加工段が検出され、少しずつ明らかにされてきた。また、長谷窯跡推定地(14)では６世紀後半の熔着した須恵器片が多く採集されており、須恵器窯があったと考えられている。

奈良、平安時代の遺跡としては集落遺跡の調査例が多い。田中谷遺跡のＶ－Ｗ区から出土した遺物の中には石帯や墨書土器などもみられ、この地に官人が存在したことを窺わせる。白鹿谷遺跡からも石帯が出土した他、８～９世紀代の須恵器が出土している。須恵器の中には灰かぶりや熔着したものも多く、須恵器窯が営まれていたと考えられる。下がり松遺跡や久米遺跡からは掘立柱建物跡が検出されている。

中世以降の遺構では、二反田古墓(11)や下がり松遺跡の古墓、コゴメダカ山遺跡(15)などが確認されている。二反田古墓は室町時代から安土・桃山時代の古墓で、石敷基壇や宝篋印塔、火葬壙が

検出された。下がり松遺跡から出土した古墓は長方形の石積基壇で、基壇上面の撹乱壙から火葬骨、五輪塔、瓦が出土し、五輪塔から室町時代後半と考えられている。コゴメダカ遺跡では宋銭・明銭と脇差１が出土し古墓と思われる。

戦国時代には白鹿山を中心に白鹿山城砦跡群(13)が築かれた。白鹿山城砦群は宍道湖、大橋川、島根半島の水運を把握する拠点として尼子氏に重視された所で、急峻な地形を利用して防御施設が造られている。尼子氏に属した松田氏の居城である。

近世には松江城(50)が築かれた。堀尾吉晴が出雲・隠岐二十四万石の太守に封じられて、広瀬町の富田城に入ったのち、この地に移り築いた城である。（廣濱）

＜参考文献＞

前島　己基　「月廻古墳群」『日本考古学年報』25　1972年版

島根県教育委員会1986　『岡田薬師古墳』

島根県教育委員会2002　『田中谷遺跡　塚山古墳　下がり松遺跡　角谷遺跡』

島根県教育委員会1998　『出雲・隠岐の城館跡』

松江市教育委員会1987　『二反田古墓』

松江市教育委員会2000　『久米遺跡群発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書第82集

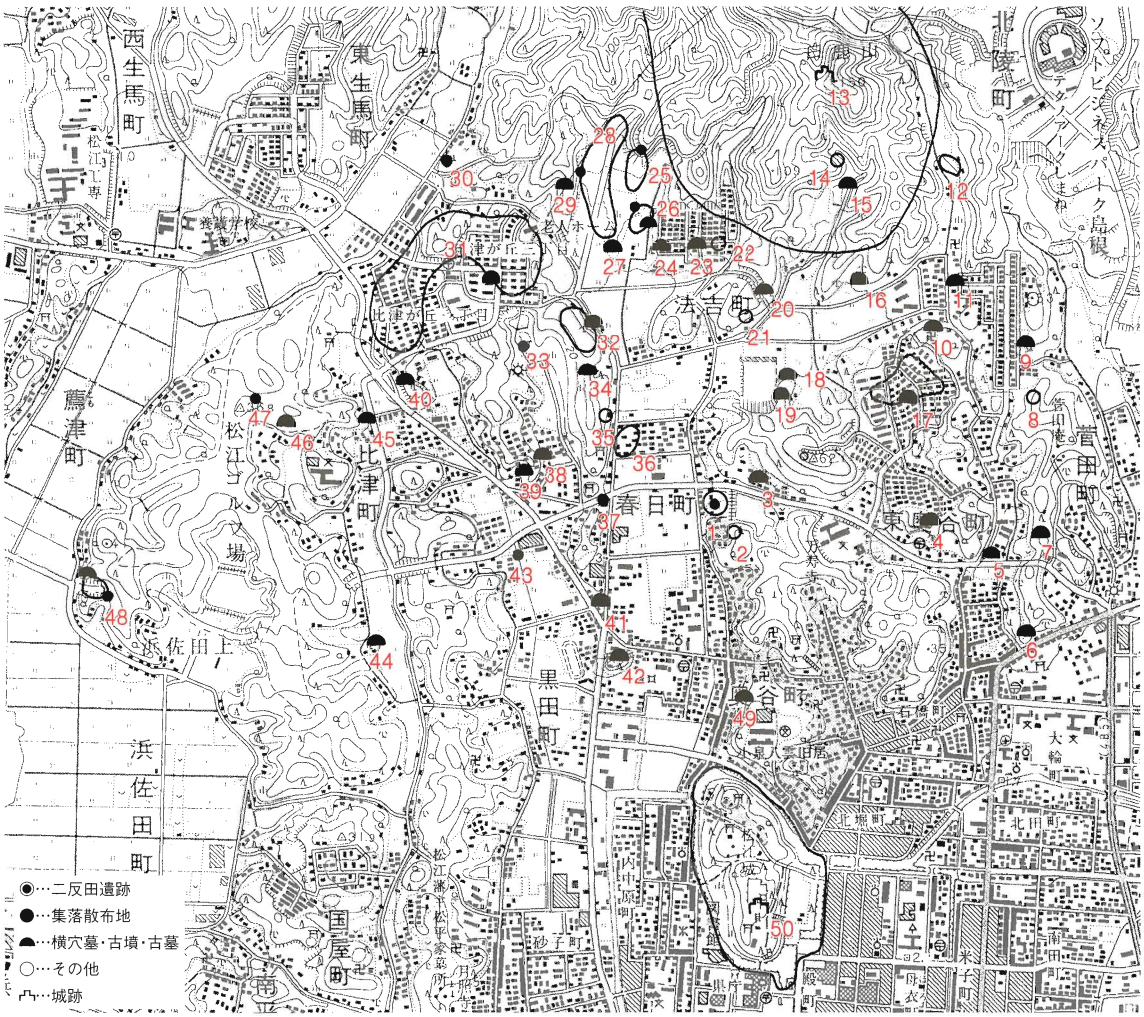
岡崎雄二郎1989　「松江市法吉・長谷窯跡推定地について」『松江考古』第７号

岡崎雄二郎・坪倉武久2001「松江市・白鹿遺跡について（２）」『松江考古』第９号

周辺遺跡一覧表

				25	角谷遺跡	38	久米横穴墓群
1	二反田遺跡	13	白鹿山城砦跡群	26	下がり松遺跡	39	比津が崎横穴墓群
2	田原社跡推定地	14	長谷窯跡推定地	27	塚山古墳	40	ひゃくだ横穴墓
3	煙硝倉古墳	15	コゴメダカ山遺跡	28	田中谷遺跡	41	法吉小学校裏山横穴墓群
4	ひのさん山横穴墓群	16	棗谷荒神古墳	29	田中谷古墳	42	摩利支天山横穴墓群
5	桜崎横穴墓	17	折廻古墳群	30	大門遺跡	43	春日遺跡
6	赤崎・切通横穴墓群	18	栗元古墳	31	月廻古墳群	44	小丸山古墳
7	菅田横穴墓群	19	栗元横穴墓	32	久米古墳群	45	水酌崎横穴墓群
8	薦沢砦跡	20	山槇古墳群	33	久米遺跡	46	ゴルフ場内横穴墓群
9	松ヶ峠古墳	21	山槇経塚群	34	唐梅古墳群	47	ゴルフ場内古墳群
10	岡田薬師古墳	22	鶯谷遺跡	35	石在経塚	48	石田遺跡
11	二反田古墓	23	伝宇牟加比売命御陵古墳	36	法吉遺跡	49	赤山横穴墓群
12	白鹿谷遺跡	24	新宮古墳	37	中代遺跡	50	松江城

第2図　松江市位置図



第3図　周 辺 の 遺 跡

第３章　Ａ～Ｅ区の調査

第１節　調査の概要

本調査地は、春日町地内の通称「城北（じょうほく）通り」と呼ばれる道路の南側、標高４ｍ前後に位置する低地である。東側には農業用水として長年使われてきた田原谷池が隣接し、発掘調査実施以前は水田として使用されていた。北側には緩やかな丘陵が広がり、調査地はその裾部の平坦地にあたる。

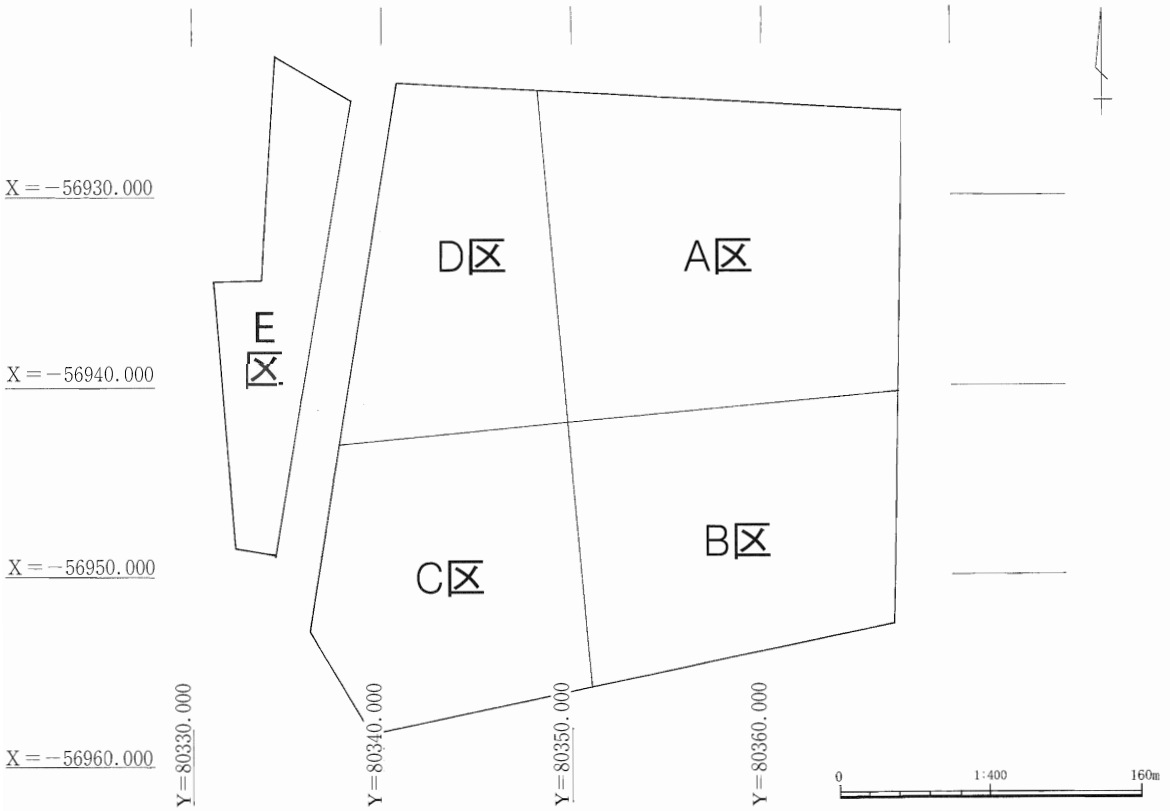
調査の便宜上、調査地内を南北に走る農業用水路をはさみ東側をＡ～Ｄ区、西側をＥ区とした。Ａ～Ｄ区は、調査地を東西に走るＳＤ０１の北端と東西のほぼ中央を軸に、北東のブロックから時計回りにＡ～Ｄ区の呼称をつけた。

なお遺構名は、調査時と本書では呼称変更しているので、新旧遺構対照表を下記に記す。

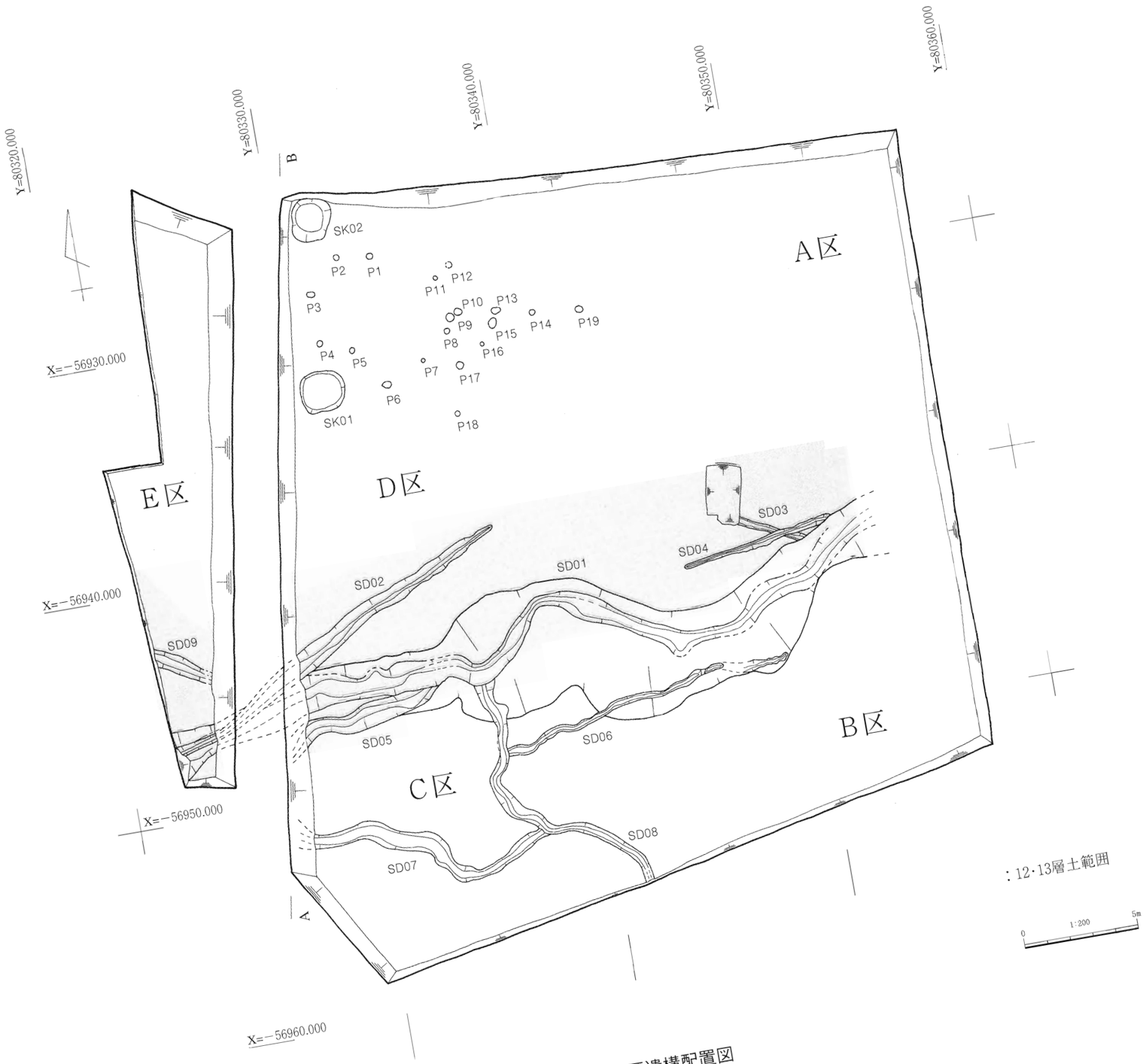
報告書掲載遺構名	調査時遺構名
ＳＫ０１	円形土壙２
ＳＫ０２	円形土壙１
ＳＤ０１	ＳＤ０４
ＳＤ０２	ＳＤ０１
ＳＤ０３	ＳＤ０６
ＳＤ０４	ＳＤ０５
ＳＤ０５	ＳＤ０２
ＳＤ０６	ＳＤ０３
ＳＤ０７	ＳＤ０７
ＳＤ０８	ＳＤ０７

報告書掲載遺構名	調査時遺構名
ＳＤ０９	ＳＤ０９
Ｐ１	Ｐ12
Ｐ２	Ｐ13
Ｐ３	Ｐ16
Ｐ４	Ｐ１
Ｐ５	Ｐ２
Ｐ６	Ｐ18
Ｐ７	Ｐ４
Ｐ８	Ｐ８
Ｐ９	Ｐ７

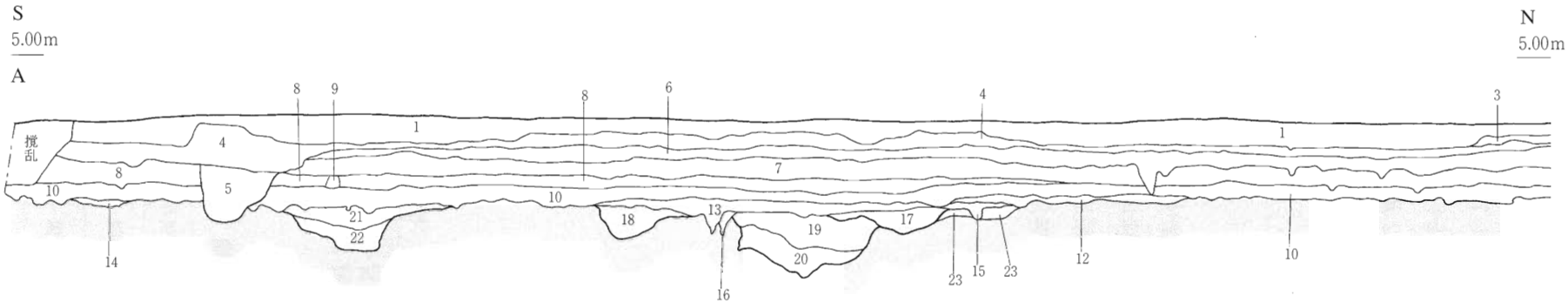
報告書掲載遺構名	調査時遺構名
Ｐ10	Ｐ６
Ｐ11	Ｐ19
Ｐ12	Ｐ17
Ｐ13	Ｐ20
Ｐ14	Ｐ24
Ｐ15	Ｐ21
Ｐ16	Ｐ22
Ｐ17	Ｐ15
Ｐ18	Ｐ10
Ｐ19	Ｐ23

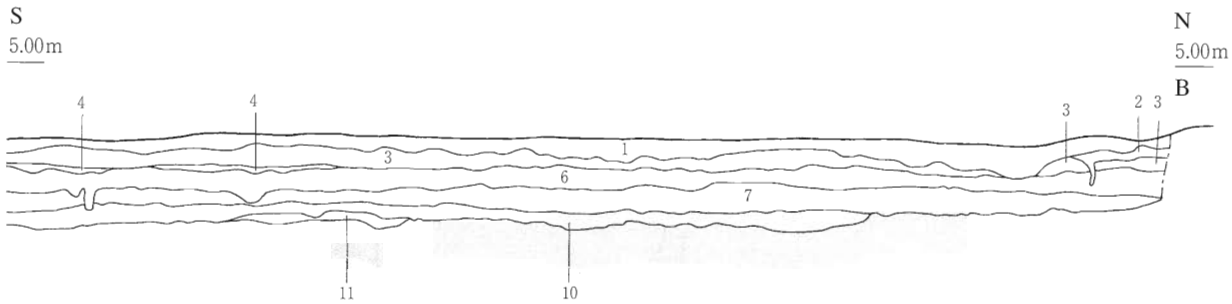


第4図　Ａ～Ｅ区地区配置図



第5図　A～E区遺構配置図





1. 暗褐色土(旧耕土)
2. 灰褐色土(橙色地山ブロック微量混、旧耕土)
3. 暗灰褐色土(橙色地山ブロック多量・礫混)
4. 灰色土(橙色地山ブロック多量混)
5. 暗灰色土
6. 灰色土(やや粘性、橙色地山ブロック混)
7. 灰色粘質土(橙色地山粒多量混)
8. 灰色粘質土・橙色土混合土
9. 青灰色土
10. 灰色粘質土～砂質土(橙色地山粒混)
11. 淡灰色砂質土
12. 灰色砂質土・黒褐色土混合土
13. 灰色砂質土・橙褐色土混合土
14. 淡灰色砂質土
15. 灰色粘質土(橙色地山粒混)
16. 灰白色砂質土(橙色地山粒混)
17. 橙褐色土(灰色砂質土混、SD02埋土)
18. 淡灰色砂質土(橙色地山粒多量混、SD05埋土)
19. 橙色砂質土・淡灰色砂質土混合土(SD01埋土)
20. 灰色砂質土
(黒灰色粘質土・橙色地山粒混、SD01埋土)
21. 黄橙色粘質土(淡灰色粘質土混、SD07埋土)
22. 淡灰色粘質土(黄橙色粘質土混、SD07埋土)
23. 明橙茶色粘質土

0 1:80 2m

第6図　C・D区西壁面土層断面図

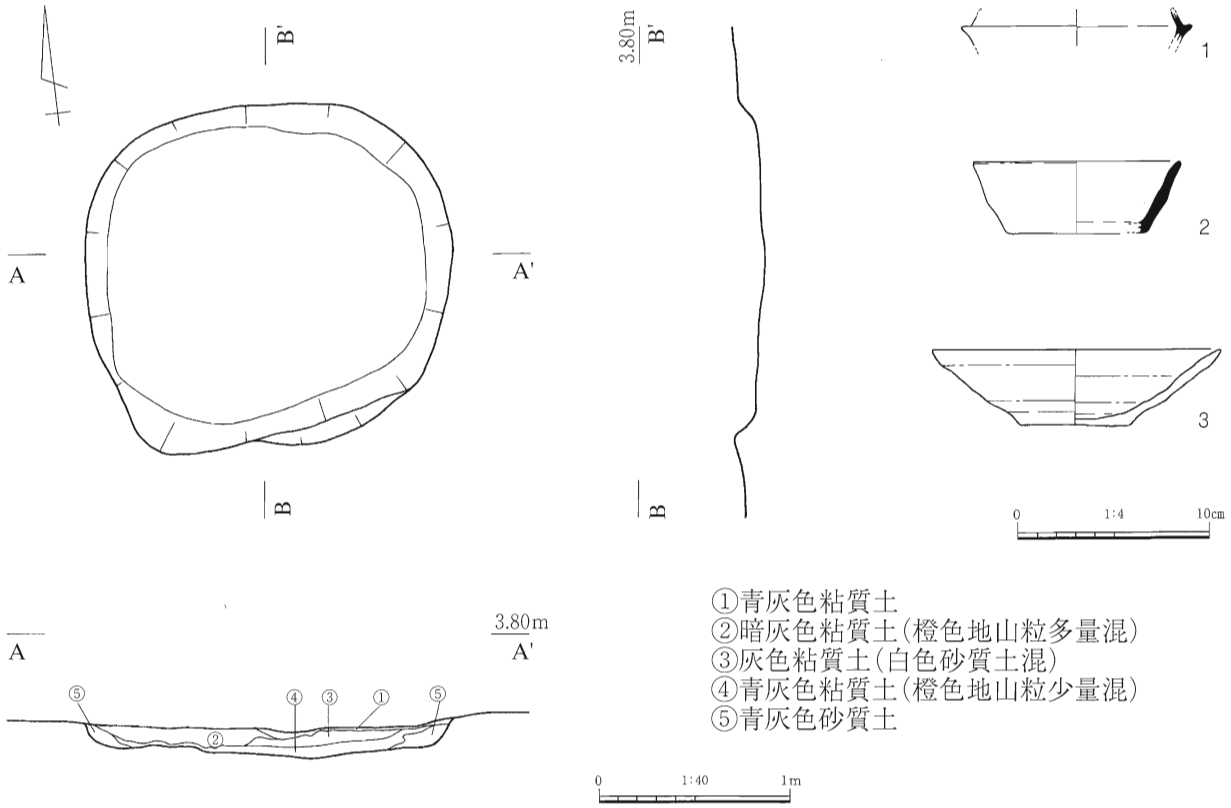
第２節　調査の経過

調査はまず、重機を使用し、旧耕土を掘削した。表土下約50cmで遺物が多く含まれる灰色粘質土（７層）を検出したので、以下は人力での掘削を行った。遺物包含層である７層を除去した後、８層直上で遺構検出を行ったが、遺構が検出できなかったため、さらに掘削を行った。下層の遺物包含層である10層を除去した後、再度、遺構検出を行った。その結果、土壙２基、溝９条、ピット19基を検出した。

第３節　検出した遺構と遺物

ＳＫ01（第７図、図版３）

Ｄ区西端において検出した、長径1.94ｍ、短径1.8ｍの平面不整円形を呈する土壙である。検出面からの深さは22cmを測る。上部は削平を受けていると考えられ、本来は検出レベルよりも高いところから掘り込まれていたと想定される。遺物は埋土下層の④・⑤層から須恵器坏片が２点、土師器坏片が１点出土している。２・３は平安時代の遺物であることから、７層以上から掘り込まれていた可能性が高い。出土遺物から、平安時代の遺構と考えられる。



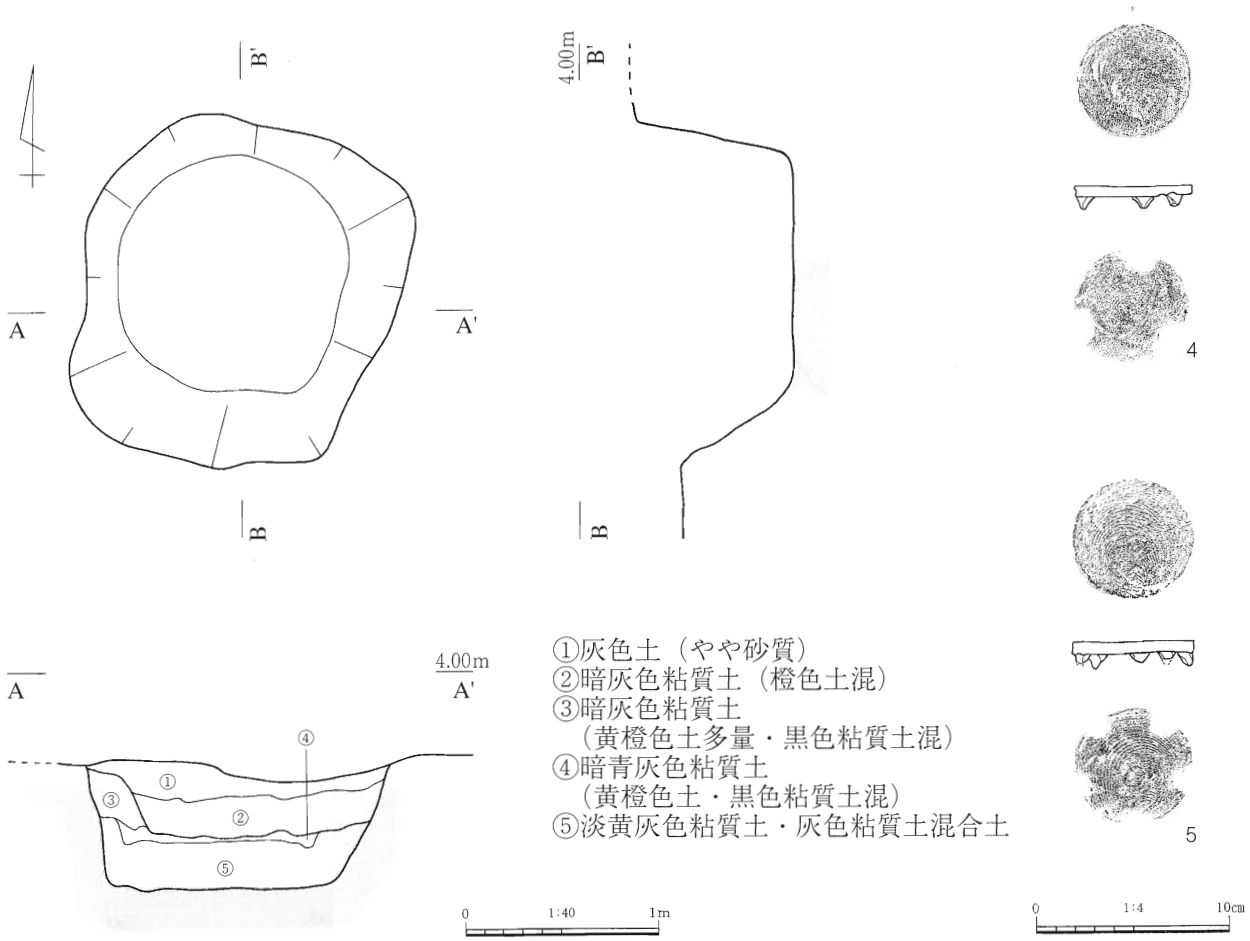
第7図　SK01平面図・断面図および出土遺物

No	図版	層位･地区	器種	法量（cm）			色調	調整		残存部位	残存率	備考
				口径	底径	器高		内面	外面			
1	3	Ｄ区 SK01 ④層	須恵器 坏	(10.0)	－	(2.0)	灰色	ナデ	ナデ	口縁～受部	1/10	
2	3	Ｄ区 SK01 ⑤層	須恵器 坏	(10.6)	(7.0)	3.8	外:淡灰色 内:灰色	ナデ	ナデ	口縁～底部	1/8	
3	3	Ｄ区 SK01 ④層	土師器 坏	15.0	5.8	4.0	にぶい黄橙色	不明	不明	口縁～底部	1/2	

ＳＫ02（第８図、図版３）

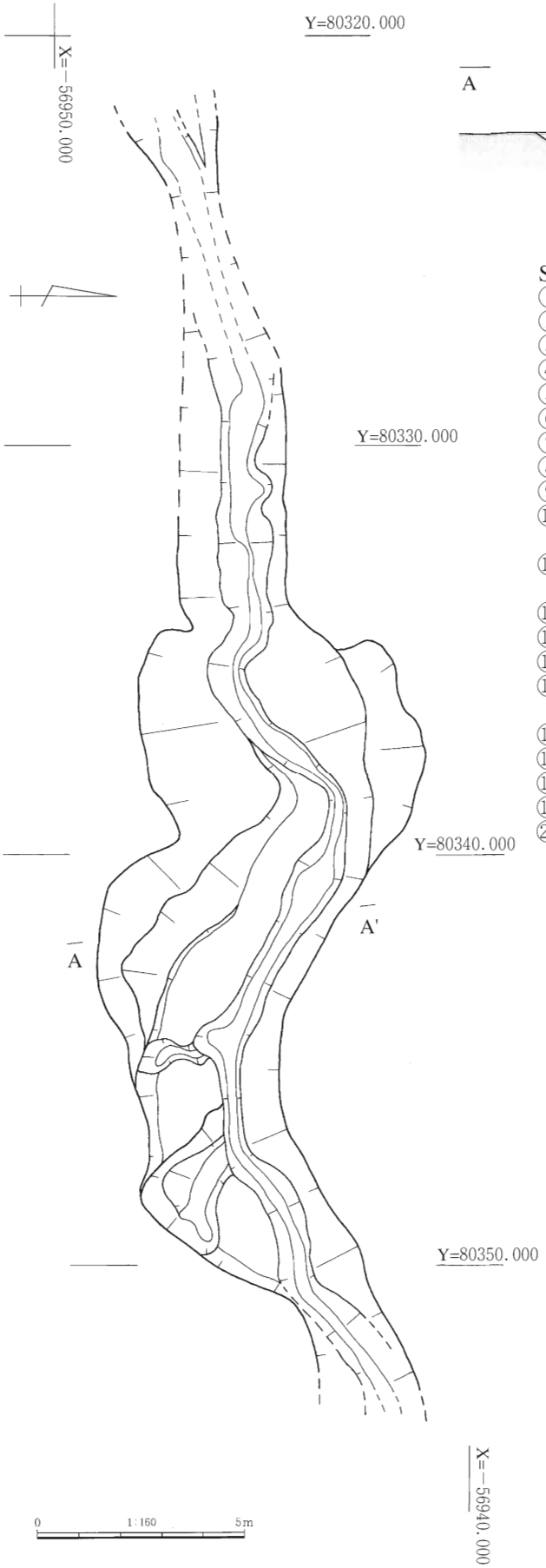
Ｄ区北西隅において検出した、長径1.8m、短径1.62mの平面不整円形を呈する土壙である。検出面からの深さは68cmを測る。断面の観察から、少なくとも３度は掘り返されていると考えられる。最初に⑤層埋土部(Ａ)が掘られ、これが埋まった後③・④層埋土部(Ｂ)が再度掘られ、最終的に①・②層埋土部(Ｃ)が掘られたようである。遺物はＣの埋土である②層からのみ出土している。下層からの出土遺物は小片のみで図化できず、時期も不明である。よって、Ａ・Ｂが掘削された時期は不明である。

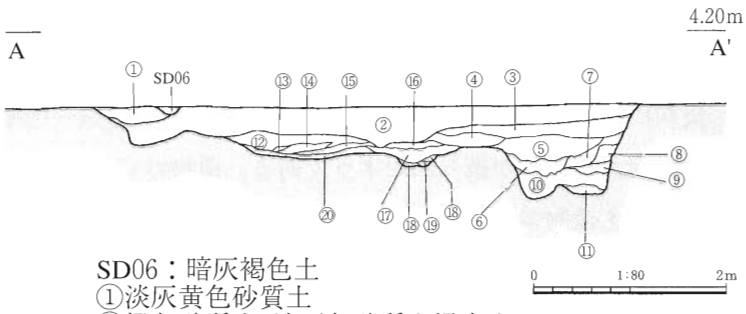
４・５は陶器製の窯道具で、足付ハマと呼ばれるものである。上面下面糸切りで切り離した褐色の円盤状の台に、３つもしくは５つの橙色の円錐状の足を付けたものである。陶器の碗や皿を重ね焼きする際に使用されるもので、一般的に使用されるようになるのは、19世紀に入ってからである。このことから最終的に掘られたＣの部分は、19世紀末以降の、近世の遺構と考えられる



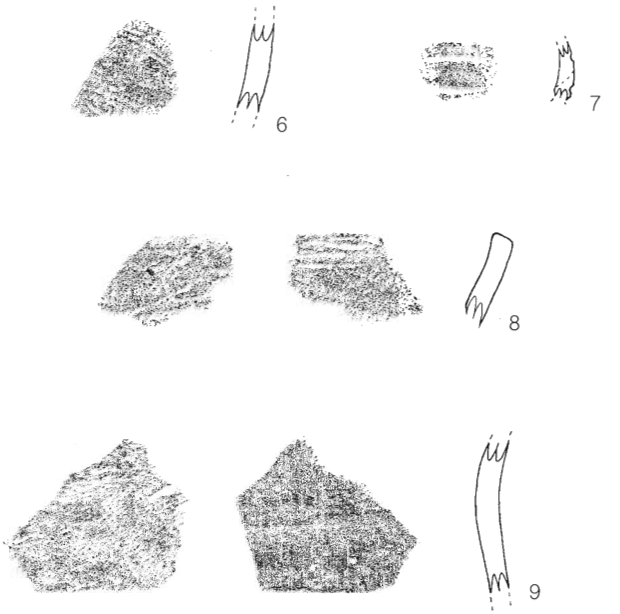
第8図　SK02平面図・断面図および出土遺物

No	図版	層位･地区	器　種	法　量（cm）			色　調	調　整		残存部位	残存率	備　考
				口径	底径	器高		内　面	外　面			
4	3	Ｄ区 SK02 ②層	陶器 窯道具	－	6.5	1.4	台:にぶい赤橙色 脚:浅黄橙色	上面糸切	下面糸切 錐状三足貼付		完存	三足ハマ
5	3	Ｄ区 SK02 ②層	陶器 窯道具	－	6.5	1.6	台:褐色 脚:浅黄橙色	上面糸切	下面糸切 錐状五足貼付		完存	五足ハマ

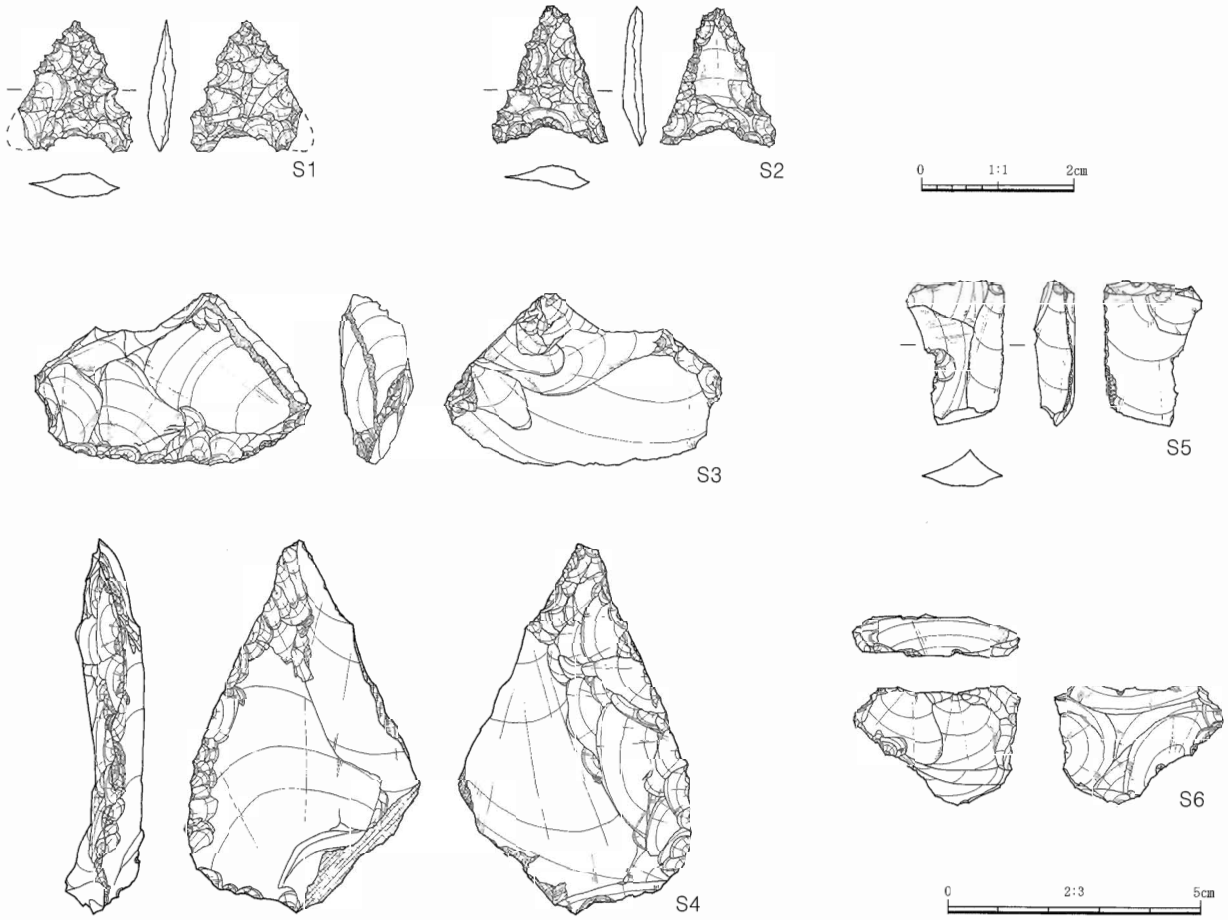




SD06：暗灰褐色土
①淡灰黄色砂質土
②橙色砂質土・淡灰色砂質土混合土
③橙灰色粘質土
④灰色土（橙色土混）
⑤灰色粘質土
⑥灰色土（⑤よりやや明、砂質土・自然炭化物混）
⑦淡灰色土（砂質土・自然炭化物混）
⑧暗灰色粘質土
⑨灰色土（砂質土・自然炭化物少量混）
⑩灰色土・淡灰色土・灰白色砂ラミナ状堆積層
（自然炭化物混）
⑪灰色粘質土・灰色土・淡灰色土・灰白色砂ラミナ状堆積層
（自然炭化物混）
⑫灰白色砂質土（淡灰色土・自然炭化物混）
⑬灰色土（砂質土・自然炭化物混）
⑭灰色土・灰白色砂質土混合土（自然炭化物多量混）
⑮灰色粘質土
（灰褐色砂質土・黄色土ブロック・自然炭化物混）
⑯淡灰色粘質土（自然炭化物混）
⑰灰色砂質土・灰白色砂質土混合土（自然炭化物混）
⑱灰色粘質土（暗灰黄色粘土ブロック混）
⑲灰白色砂質土（灰色粘質土混）
⑳灰色砂質土・灰白色砂質土・暗灰色粘質土混合土
（⑰層土に近似。自然炭化物混）



第9図　SD01平面図・断面図および出土遺物



第10図　SD01出土遺物

No	図版	層位・地区	器　種	法　量（cm）			色　調	調　整		残存部位	残存率	備　考
				口径	底径	器高		内　面	外　面			
6	3	B・C区 SD01 ⑩・⑪層	縄文土器 甕?	—	—		外:灰褐色 内:褐色	二枚貝条痕	ナデ？	2mm以下の砂粒多量含む	小片	前期前半甕？
7	3	B・C区 SD01 ⑩・⑪層	縄文土器 深鉢?	—	—	(2.3)	にぶい黄褐色	擬似縄文？ 平行する非常に深い沈線	不明	2mm以下の砂粒(石英)含む	小片	元住吉Ⅰ(権現山)後期中葉末～後葉
8	3	B・C区 SD01 ⑩・⑪層	縄文土器 無文深鉢?	—	—		外:暗褐色 内:褐色	二枚貝条痕 ナデ	不明	2mm以下の砂粒・黒雲母少量含む	小片	晩期前半？
9	3	B・C区 SD01 ⑩・⑪層	縄文土器 無文深鉢?	—	—		外:暗褐色 内:暗褐～黒色	二枚貝条痕 ナデ	ケズリ様の調整	1mm以下の砂粒多く含む 黒雲母含む	小片	深鉢頸部か 7と同一個？

No	図版	層位・地区	種　別	法　量（cm）				材　質	備　考
				最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)		
S1	10	B・C区 SD01①層	石鏃	1.7	1.4	0.3	0.55	黒曜石	基部欠損
S2	10	B・C区 SD01②層	石鏃	1.8	1.5	0.3	0.46	黒曜石	
S3	10	B・C区 SD01⑩・⑪層	スクレイパー	3.4	5.4	1.3	19.92	黒曜石	
S4	10	B・C区 SD01⑩・⑪層	スクレイパー	7.0	4.3	1.1	28.64	黒曜石	
S5	10	B・C区 SD01東端⑧層	使用痕のある剥片	2.9	1.9	0.7	3.27	黒曜石	
S6	10	B・C区 SD01⑩・⑪層	石核	2.3	3.3	0.8	5.17	黒曜石	

ＳＤ01（第９・10図、図版３～５）

Ａ～Ｄ区のほぼ中央とＥ区の南端に検出した。幅1.6～5.5m、検出面からの深さ0.8m前後を測る、南北に小さく蛇行しながら東西に流れる自然流路である。底面レベルは西端と東端の差が約30cmあり、緩やかに東から西に下がってる。このことから、東から西への水の動きがあったであろうことが推測できる。また、流水によって大きく抉られている箇所もあることから、一時的な大きな流れもあったことが考えられる。上層からは弥生土器片、下層の⑩・⑪層からは縄文土器が数点出土しており、少なくとも縄文時代から弥生時代にかけて、溝として機能していたことが推測できる。また、⑩層はラミナ状堆積を呈しており、出土した遺物が摩滅していることからも、北側の最深部分はある程度の速さをもった流れがあり、調査区の東側から流されてきたと考えられる。また調査区内からは、同時期に位置づけられ遺構が他には検出されていないことからも、調査区の東側に縄文時代の遺跡の存在が考えられるであろう。

出土遺物は図化したものの他に、土器小片が少量、多量の黒曜石剥片等が出土している。石器類で非掲載のものの総点数は、黒曜石のものは、加工痕のある剥片１点、使用痕のある剥片４点、剥片115点、石核４点。安山岩のものは剥片１点である。ほとんどは下層部分からの出土である。

６～９は縄文土器である。６は全体的に摩滅が激しいものの、外面に二枚貝条痕がみられる。７は深鉢の口縁部と思われる破片で、外面には平行する深い沈線が施され、上方の沈線の上に擬似縄文と思われる痕跡がかすかにみられる。縄文時代後期中葉末～後葉のものと考えられる。８は口縁部で、内面口唇部付近に二枚貝条痕がみられる。９は外面に上方に二枚貝条痕、内面上方にケズリ様の調整がされている。８・９は胎土・色調が同様な事から同一個体のものと思われ、縄文時代晩期前半の無文深鉢の破片と考えられる。

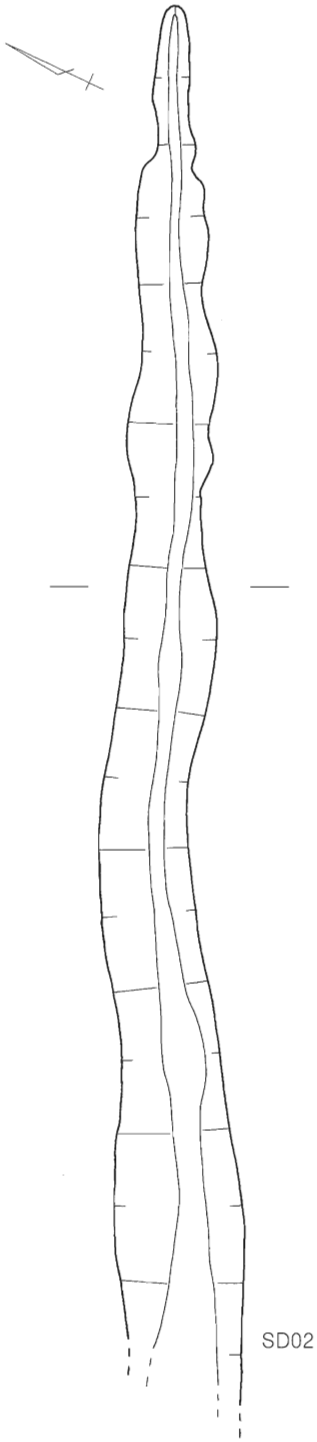
Ｓ１・Ｓ２は石鏃であるが、共に上層からの出土である。Ｓ１は抉りの浅い凹基式のもので、基端は丸みを帯びている。Ｓ２はやや鏃身が長く、浅い抉りの入る凹基式のものである。片面には大きな主要剥離面を残す。Ｓ３・Ｓ４はスクレイパーで、共に側面に原礫面を残す。Ｓ５は側面に使用痕が認められる剥片である。Ｓ６は石核で、数方向からの打痕がみられる。

ＳＤ02（第11・12図、図版３～５）

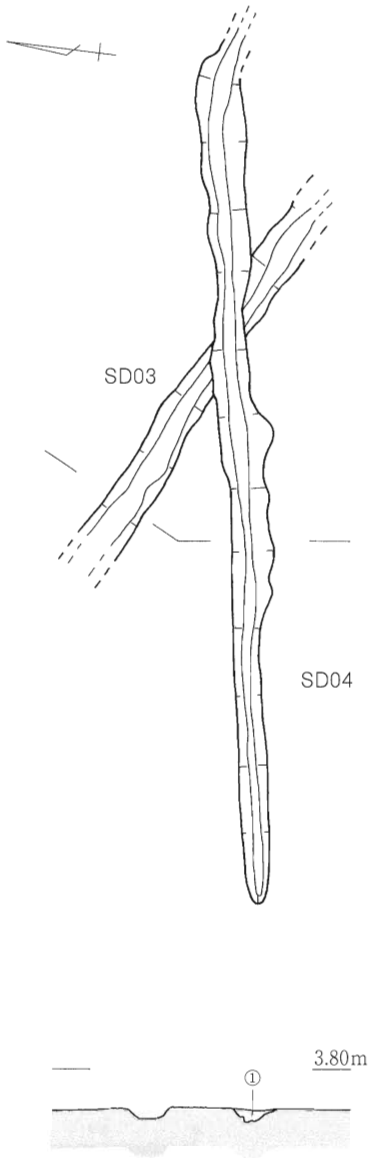
Ｄ区南西からＥ区南端にかけて検出した、幅120～60cm、検出面からの深さ約20cmを測る、北東から南西に伸びる自然流路と考えられる溝である。ＳＤ０１を切って交差して検出しており、北東部は終息している。底面レベルは南西部にむかって下がっていることから、北東から南西に向かっての水の動きがあったと考えられる。

出土遺物は図化したものの他に土器小片、黒曜石剥片３点、瑪瑙石核１点・剥片１点、が出土している。

10は弥生土器で、松本編年Ｖ－１様式に相当するものである。口縁端部は上に引き出され、２条の凹線が施されている。Ｓ７は鏃身の長い、抉りの浅い凹基式の石鏃であるが、欠損した基部をさらに加工した痕跡が見られる。Ｓ８は安山岩製の打製石斧である。表面は風化が激しく、片面は剥離している。検出状況と調査区壁面の断面と出土遺物から、ＳＤ０１埋没後～弥生時代後期前葉の遺構と考えられる。



①暗橙褐色土(淡灰色土混)



①淡灰色砂質土

0　1:60　2m

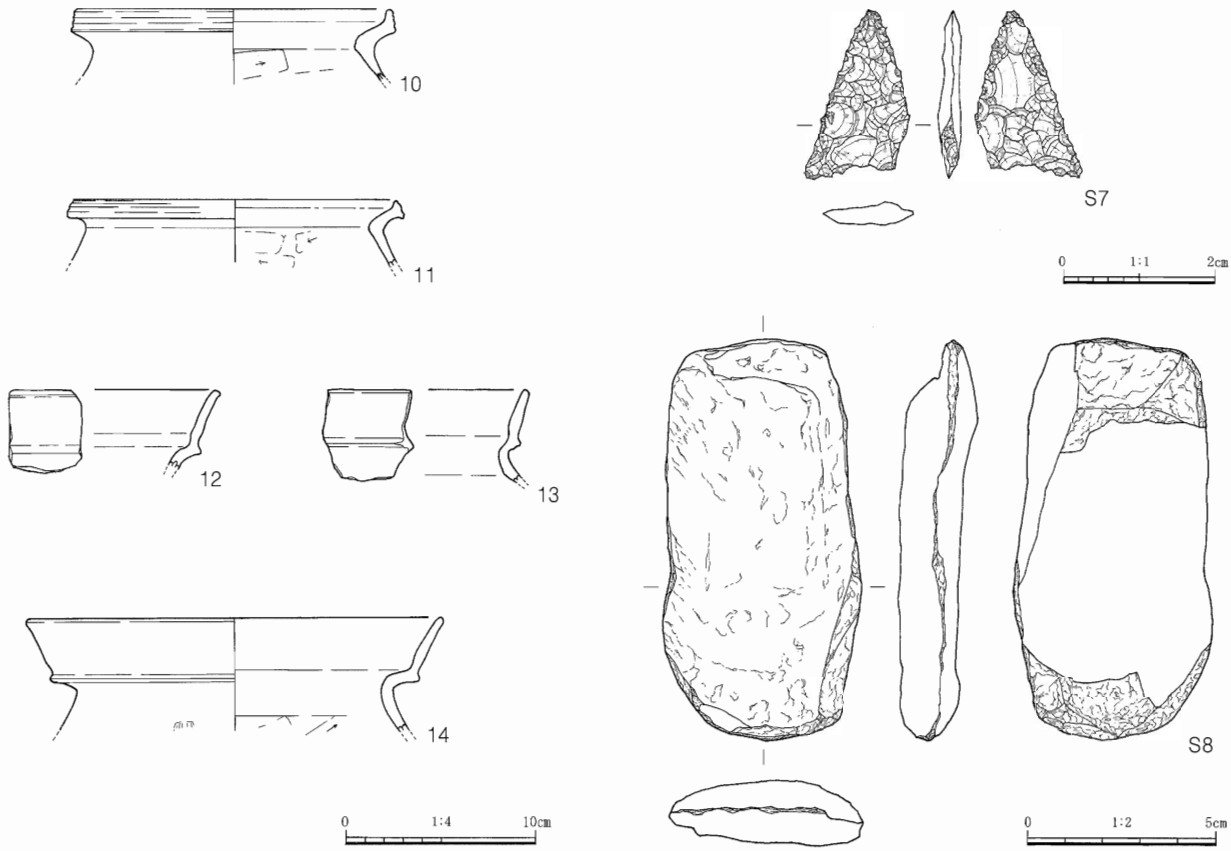
第11図　SD02～SD04平面図・断面図

ＳＤ03・ＳＤ04（第11・12図、図版３～５）

Ａ区南端に検出した、幅40～24cm、検出面からの深さ15cm前後を測る、ほぼ東西に伸びる自然流路と考えられる浅い溝である。12・13層上面で検出しており、本来はさらに東に伸びていたと考えられる。ＳＤ０４がＳＤ０３を切っているが、埋土がほぼ同様な色の砂質土を呈していることから、大きな時期差はないと考えられる。

図化した遺物はＳＤ０４のものだけである。図化していないものには、ＳＤ０３から出土している黒曜石剥片２点が、ＳＤ０４のものにはが黒曜石剥片３点、安山岩剥片１点がある。

11は弥生土器で、口縁端部は上下に拡張され、凹線文が施されている。松本編年Ｖ－１様式に相



第12図　SD02・04出土遺物

No	図版	層位・地区	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	色調	調整 内面	外面	残存部位	残存率	備考
10	3	C区 SD02①層	弥生土器 甕	(16.3)	－	(4.0)	外:褐～暗褐色 内:褐色	口：ナデ 体：ケズリ	口：2条凹線 体：ナデ	口縁～体部	1/8	
11	3	B区 SD04①層	弥生土器 甕	(16.9)	－	(3.6)	外:灰褐色 内:黄褐色	口：ナデ 体：ケズリ	口：2条凹線 体：ナデ	口縁～体部	1/8	
12	3	B区 SD04①層	土師器 甕	－	－	(4.0)	灰黄色	ナデ	ナデ	口縁	小片	
13	3	B区 SD04①層	土師器 甕	－	－	(4.7)	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄橙色	口：ナデ 体：ケズリ	ナデ	口縁～体部	小片	外面煤付着
14	3	B区 SD04①層	土師器 甕	(22.0)	－	(6.0)	にぶい黄橙色	口：ナデ 体：ケズリ	口：2条凹線 体：ハケ	口縁～体部	1/8	

No	図版	層位・地区	種別	法量（cm） 最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)	材質	備考
S7	10	C区 SD02 ①層	石鏃	2.2	1.4	0.3	0.70	黒曜石	基部再加工
S8	10	C区 SD02 ①層	打製石斧	10.6	5.1	1.8	139.32	安山岩	

当するものであろう。12～14は複合口縁の甕である。12は口縁端部に平坦面が見られ、外面の稜はやや下垂している。13も口縁端部に平坦面がみられるものである。14は口縁端部が丸くおさめられている。それぞれ草田編年６～７期に相当するものであろう。

検出状況と出土した遺物から、ＳＤ０４は古墳時代前期の遺構だと考えられ、ＳＤ０３もそれに近い時期の遺構だと考えられる。

ＳＤ05（第５図、図版４）

Ｃ区北西、ＳＤ０１の上面で検出した。幅68～100cm、検出面からの深さ11～30cmを測る、東西に伸びる自然流路と考えられる浅い溝である。本来はＳＤ０１の上面を、さらに東に伸びていたと考えられ、西は調査区外へと伸びている。

遺物は黒曜石剥片が１点出土しているのみで、遺物からは明確な時期は判断できないが、Ｃ・Ｄ区西壁面の断面から、12・13層以下の遺構であると判断できるため、ＳＤ０１埋没後～弥生時代末期・古墳時代初頭の範疇におさまる遺構だと考えられる。

ＳＤ06～ＳＤ08（第５図、図版４）

Ｃ区で検出された、幅38～78cm、検出面からの深さは18～52cmを測る、自然流路だと考えられる溝である。ＳＤ０７・０８はさらに調査区外へと伸びている。方向には統一性が見られないが、平面形は蛇行し、壁面は大きく抉られている箇所が多く見られる。埋土の色調はほぼ同じで、灰色系の砂質土の単層である。これらの形態が類似していることから、大きな時期差はない、一過性のものであると考えている。

出土遺物は、ＳＤ０８から黒曜石剥片が１点出土しているのみで、遺物からは明確な時期は判断できないが、Ｃ・Ｄ区西壁面の断面で、ＳＤ０７が10層以下の遺構であると判断でき、ＳＤ０６はＳＤ０１のＡ－Ａ´セクションでＳＤ０１を切っていることから、ＳＤ０１埋没後～弥生時代末期・古墳時代初頭の遺構だと考えられる

ＳＤ09（第５図）

Ｅ区南で検出された、幅70～75cm、検出面からの深さは８～14cmを測る、ほぼ東西の方向に伸びる自然流路と考えられる浅い溝であるが、Ｃ区ではその続きを検出することができなかった。

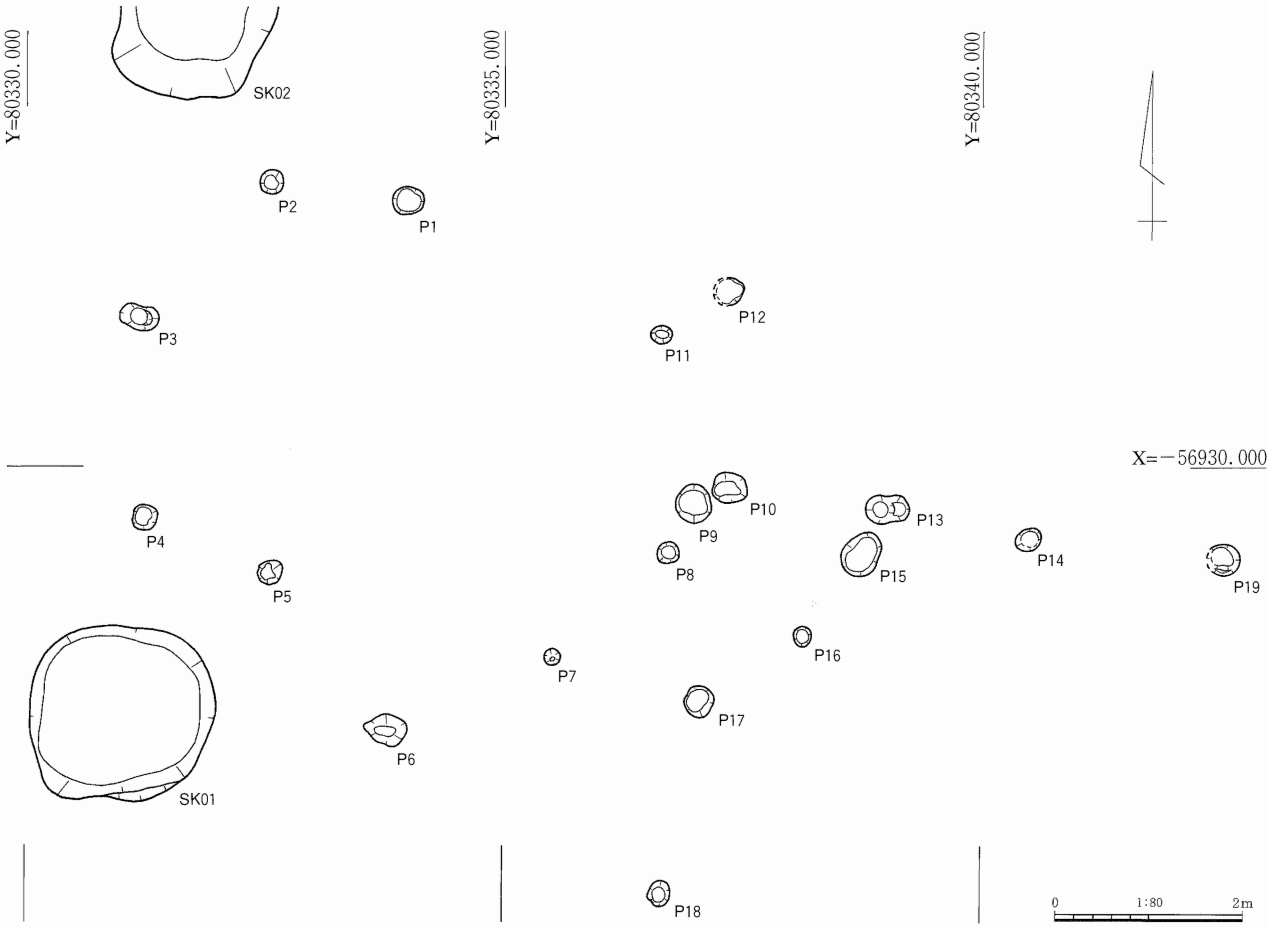
遺物は出土していないが、埋土が灰色砂質土を呈することから、ＳＤ０２～ＳＤ０８と同様な性格、時期の遺構だと考えられる。

ピット（第13・14図、図版６）

調査区北西部のＤ区のみで、ピットを19基検出した。ピットの深さは、10～20cm程度の浅いものがほとんどで、本来は検出面よりも上層から掘り込まれていた可能性が高い。ほとんどのピットは単層であったが、いくつかのピットでは、柱痕もしくは抜取痕が見られた。しかし、これらのピットからは、建物跡を想定できるような配列や規則性がみられないことから、これらのもつ性格は明確にできなかった。

また、ピットの埋土は、大きく褐色系と灰色系の２種類に分けることができるため、これらのピットは少なくとも２時期に分けて構成されていたと考えられる。褐色系のものは７層以上からの掘り込み、灰色系のものは、前述のいくつかの自然流路と埋土が類似していることから、ＳＤ０１埋没後～７層土堆積までの２時期に、大きく分けることができるのではないかと考えられる。

ピット内からは土器小片や黒曜石剥片が出土しているものがあるが、図化できたものは、２点のみである。黒曜石の剥片はＰ２とＰ７から１点ずつ出土しているが、遺構に伴うものではないと考



第13図　Ｄ区ピット配置図

Ｄ区ピット計測表

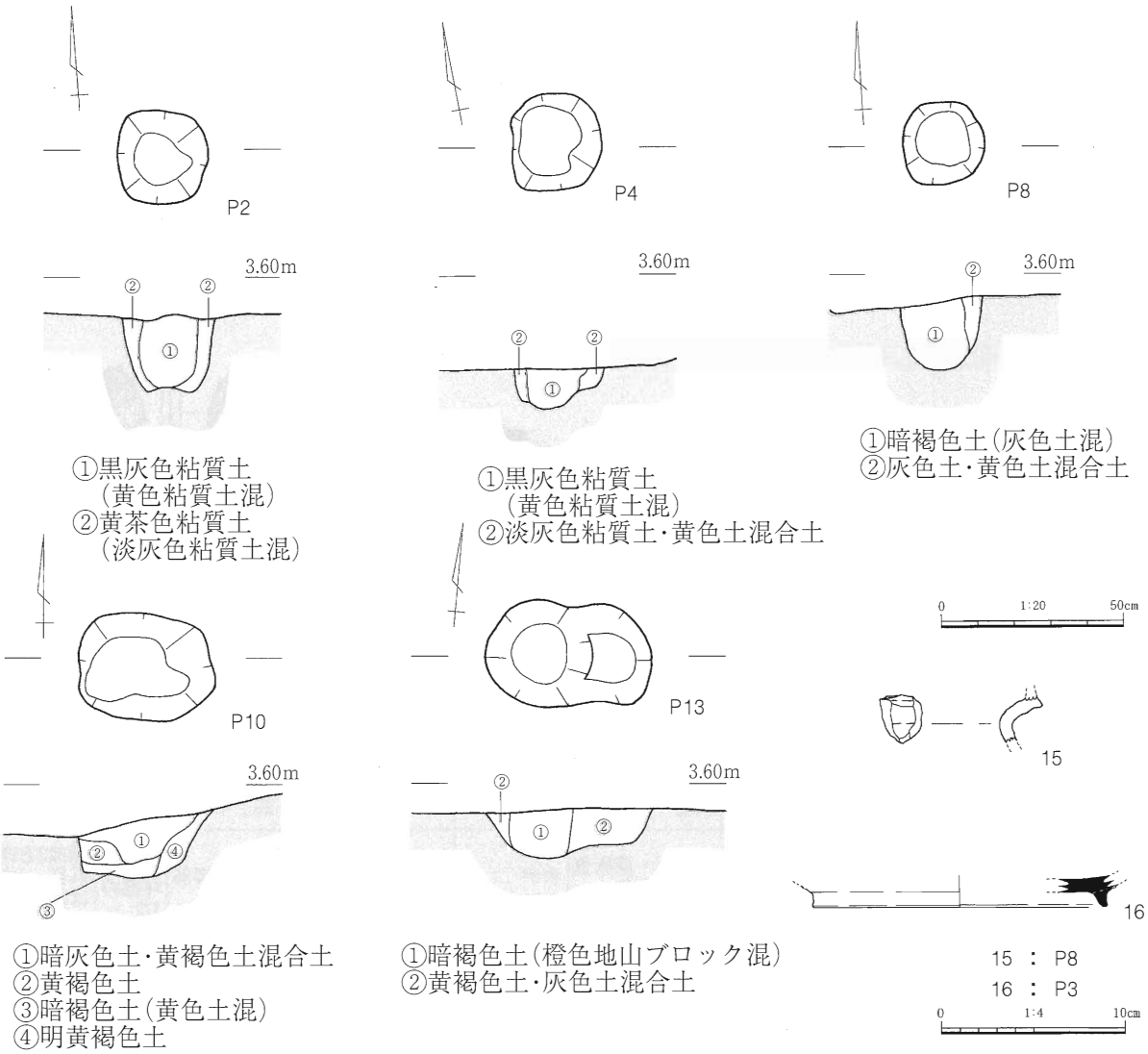
PNo	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面レベル(m)	主　要　土　色
P1	31	30	10.6	3.442	暗褐色粘質土･黄褐色土混合土
P2	26	25	19.2	3.304	黄茶色粘質土(淡灰色粘質土含む)
P3	42	23	19.9	3.146	灰色粘質土
P4	26	24	15.5	3.191	淡灰粘質土･黄色土混合土
P5	27	25	10.7	3.297	暗灰色土･黄褐色土混合土
P6	46	31	11.6	3.340	暗褐色土(黄褐色土、灰色土含む)
P7	18	18	9.6	3.428	灰色土･黄褐色土混合土
P8	22	22	19.6	3.340	灰色土･黄色土混合土
P9	39	37	12.1	3.394	暗灰色土･黄褐色土混合土
P10	36	29	33.8	3.200	暗灰色土･黄褐色土混合土
P11	23	20	21.9	3.195	灰色粘質土･黄褐色土混合土
P12	30	(20)	17.3	3.487	黄褐色土(灰色土含む)
P13	46	30	14.3	3.387	灰色土･黄褐色土混合土
P14	27	23	6.5	3.449	灰色土･黄色土混合土
P15	48	39	14.7	3.384	暗褐色土(橙色地山ブロック混)
P16	20	18	13.2	3.389	暗褐色土(橙色地山ブロック混)
P17	33	31	20.5	3.332	灰色粘質土･暗黄褐色土混合土
P18	27	24	22.0	3.245	赤褐色土(灰色土含む)
P19	36	34	17.0	3.394	暗褐色土

えられる。

15はＰ８から出土している、弥生土器の甕の口縁である。口縁端部の上半は欠損しているが、下半は下に拡張され、凹線の痕跡がみられる。松本編年Ｖ－１様式に相当するものであろう。16はＰ３から出土している須恵器の高台付坏の底部である。８世紀頃のものと考えられるので、Ｐ３は少なくとも、包含層である７層もしくはそれ以上からの掘り込みである事が考えられる。

第４節　包含層の調査と出土遺物

調査区内において、７層、10層、12・13層の包含層を確認した。12・13層は土質にほとんど違いが見られなく、ＳＤ０１がほぼ埋没した後の浅いくぼみに一括で流入した土と考えられるので、同層として捉えている。以下に各層についての概要と出土遺物について述べる。



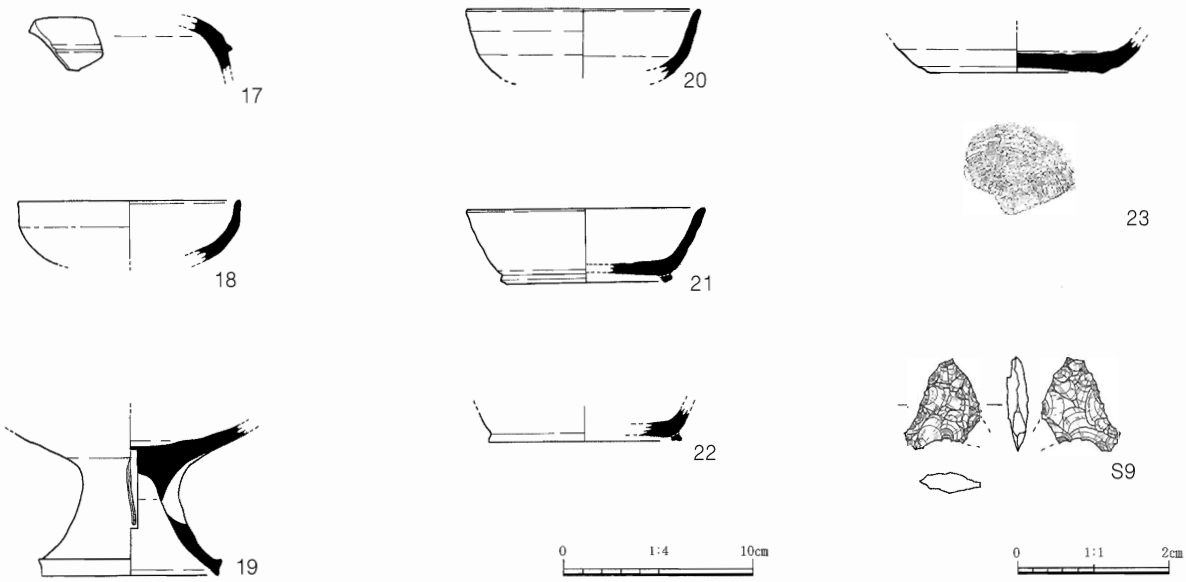
第14図　ピット平面図・断面図および出土遺物

No	図版	層位・地区	器　種	法　量（cm）			色　調	調　整		残存部位	残存率	備　考
				口径	底径	器高		内　面	外　面			
15	6	Ｄ区 Ｐ８	弥生土器 甕	－	－	(2.6)	外：明黄白色 内：明黄色	ナデ	口：凹線 体：ナデ	口縁	小片	
16	6	Ｄ区 Ｐ３	須恵器 坏？	－	(16.0)	(1.8)	灰色	ナデ	ナデ 底：糸切	底部	1/8	貼付高台

７層出土遺物（第15図、図版６）

７層は、表土下約50cm、標高3.7～3.8mのレベルで上面を検出した。灰色粘質土を呈し、調査区全体に20cm程度の厚さで堆積している。遺物は須恵器・土師器・黒曜石の石器や剥片などが出土しているが、図化できたものは少ない。

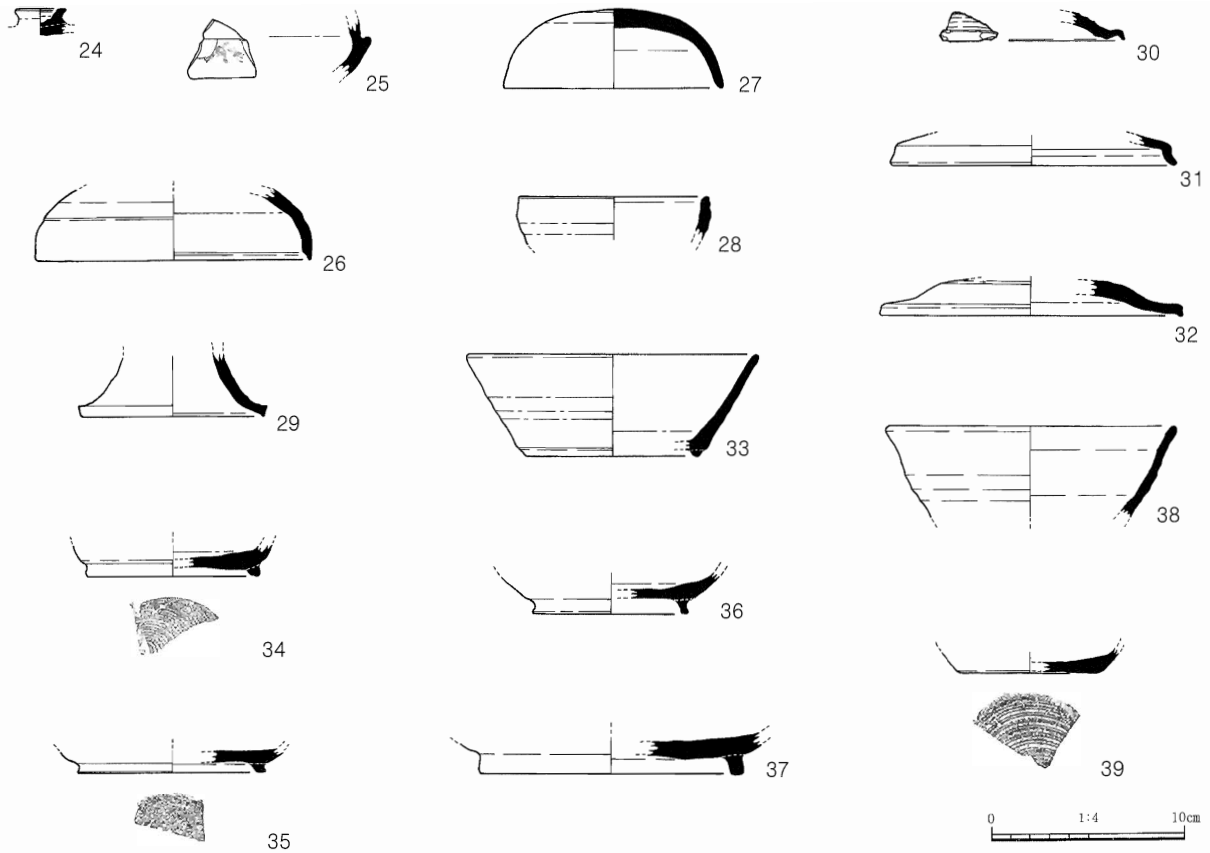
17は坏蓋である。小片ではあるが、外面肩部には小さく引き出された鋭い稜をもつ。18は下部の破面がやや肥厚気味な事から、無蓋高杯の坏部と考えられる。口縁部はやや内傾している。19は低脚の高坏脚部で、脚柱部の透かしは２方向の切れ目で、１方向は未貫通である。脚端部はほぼ直立するしっかりとした面をもつ。18・19は古墳時代終末～奈良時代のものと考えられる。20は坏の口縁部で、口縁端部はやや外反気味である。21・22は坏で、共に底面回転糸切り後、高台が貼り付け



第15図　7層出土遺物

No.	図版	層位・地区	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	色調	調整 内面	外面	残存部位	残存率	備考
17	6	D区 7層	須恵器 坏蓋	－	－	(3.0)	灰白色	ナデ	ナデ	体部	小片	
18	6	D区 7層	須恵器 坏	(11.7)	－	(3.2)	灰色	ナデ	ナデ	坏部上半	1/8	高坏か？
19	6	B区 7層	須恵器 高坏	－	(9.3)	(7.9)	外：灰～淡灰色 内：淡灰色	ナデ	ナデ	坏下部～脚部	脚部の4/5 坏部の1/2	脚部2方向切れ目、1方向は未貫通
20	6	B区 7層	須恵器 坏	(12.2)	－	(3.6)	外：暗灰色 内：灰色	ナデ	ナデ	坏部上半	1/8	
21	6	C区 7層	須恵器 坏	(12.6)	(9.0)	(3.8)	外：暗灰～灰色 内：灰色	ナデ	ナデ 底：糸切	口縁～底部	1/4	貼付高台
22	6	D区 7層	須恵器 坏	－	(10.2)	(1.8)	灰色	ナデ	ナデ 底：糸切→ナデ	底部	1/12	貼付高台
23	6	D区 7層	須恵器 底部	－	(9.4)	(2.9)	灰色	ナデ	ナデ 底：糸切	底部	1/4	

No.	図版	層位・地区	種別	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)	材質	備考
S9	10	D区 7層	石鏃	1.2	1.0	0.3	0.23	黒曜石	基部欠損



第16図　10層出土遺物（1）

No	図版	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		残存部位	残存率	備考
				口径	底径	器高		内面	外面			
24	7	D区 10層	須恵器 坏　蓋	2.7	—	—	灰色	ナデ	ナデ	つまみ部	図示の 1/1	
25	7	D区 10層	須恵器 高坏or壺	—	—	(3.0)	灰色	ナデ	ナデ 受部直下に 波状文	受部	小片	
26	7	B区 10層	須恵器 坏　蓋	(14.3)	—	(3.7)	灰白色	ナデ	天:ヘラケズリ 口:ナデ	口縁～体部	1/10	
27	7	E区 10層	須恵器 坏　蓋	11.2	—	4.1	灰白色	ナデ	天:ヘラ切→ナデ 口:ナデ	口縁～体部	1/2	
28	—	D区 10層	須恵器 坏	(9.9)	—	(2.4)	暗灰色	ナデ	ナデ	口縁	1/6	
29	7	D区 10層	須恵器 高坏	—	(9.4)	(3.5)	暗灰色	ナデ	ナデ	脚部	1/4	
30	7	D区 10層	須恵器 坏　蓋	—	—	(1.5)	淡灰色 端部:黒灰色	ナデ	ナデ	口縁	小片	重焼痕有
31	7	D区 10層	須恵器 坏　蓋	(15.0)	—	(1.6)	外:暗灰色 内:灰色	ナデ	ナデ	口縁	1/8	
32	7	D区 10層	須恵器 坏　蓋	(15.7)	—	(1.9)	灰色	ナデ	天:ヘラケズリ 口:ナデ	口縁～体部	1/8	
33	7	D区 10層	須恵器 坏	(15.2)	(9.0)	(5.3)	淡灰色	ナデ	ナデ	口縁～底部	1/10	貼付高台
34	7	D区 10層	須恵器 坏	—	(8.9)	(1.6)	暗灰色	ナデ	ナデ 底:糸切	底部	1/4	貼付高台
35	7	D区 10層	須恵器 坏	—	(9.8)	(1.2)	外:灰色 内:淡灰色	ナデ	ナデ 底:糸切	底部	1/6	貼付高台
36	7	D区 10層	須恵器 坏	—	(8.0)	(2.2)	外:灰～暗灰色 内:灰色	ナデ	ナデ 底:糸切→ナデ	底部	1/5	貼付高台
37	7	D区 10層	須恵器 皿	—	(13.6)	(2.1)	暗灰～褐色	ナデ	ナデ 底:糸切→ナデ	底部	1/4	貼付高台 坏部焼成 不良
38	—	D区 10層	須恵器 坏	(15.0)	—	(4.8)	灰白色	ナデ	ナデ	口縁	1/10	
39	7	D区 10層	須恵器 坏	—	(6.8)	(1.4)	灰色	ナデ	ナデ 底:糸切	底部	1/3	

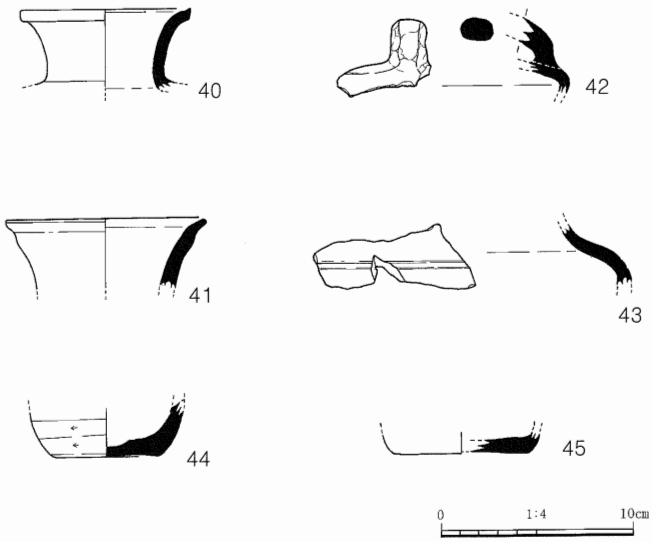
られている。奈良～平安時代のものであろう。23は、回転糸切り痕の残る底部であるが、器種は不明である。

Ｓ９は凹基式の石鏃である。基部の抉りこみは浅く、小型品である。7層出土石器で図化していないものの総数は、黒曜石の使用痕のある剥片３点、剥片７点である。

10層出土遺物（第16～21図、図版７・８・10）

10層は、表土下約80cm、標高3.4～3.5mのレベルで上面を検出した。灰色粘質土～砂質土を呈し、調査区全体に10～20cm程度の厚さで堆積している。遺物は弥生土器・須恵器・土師器・土製品・黒曜石の石器などが多量に出土しており、摩滅しているものが多く見られる。

24は坏蓋のつまみ部で、中央は大きくくぼんでいる。25は有蓋高坏もしくは壺の受部と思われる。受部直下にかすかに波状文が残る。26は口径が大きな坏蓋で、27は口径の縮小が進んだもので、極小型する直前のものである。26は古墳時代後期後葉のもの、27は古墳時代終末のものである。28は坏の口縁部で、奈良時代のものと思われる。29は高坏の脚部で、端部は外傾する面をもち、上下にかすかにひき出される。古墳時代後期後葉のものであろう。30～32は坏蓋で、30は口縁に平坦面をもち、端部は下にひき出されている。31は、輪状のつまみが付くタイプと考えられる。口縁は直立して立ち上がり、端部は外反している。32も坏蓋で、器高が低く宝珠状のつまみが付くタイプである。口縁端部は平坦面を作り出しているが、立ち上がりは短い。31は奈良時代のもの、30・32は平安時代のものであろう。33～35は高台付坏で、33は高台部から直線的に開くもので、34・35は底面に回転糸切り痕が残るものである。奈良～平安時代のものと考えられる。36も高台付坏であるが、前者よりはやや古く、奈良時代のものであろう。37は高台付の皿と思われるもので、底面には静止糸切り痕がみられる。奈良時代前半のものであろう。38・39は坏で、39の底部には回転糸切り痕が残る。奈良時代後葉～平安時代初頭のものと考えられる。

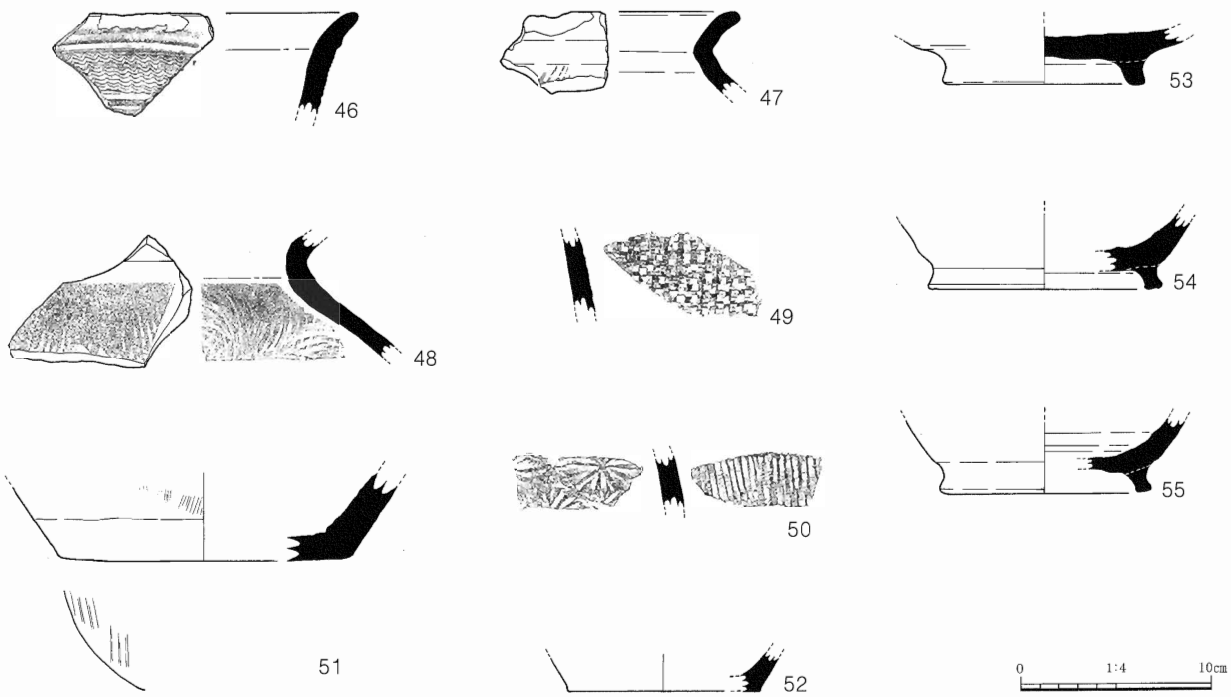


第17図　10層出土遺物（2）

No	図版	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		残存部位	残存率	備考
				口径	底径	器高		内面	外面			
40	7	D区 10層	須恵器 壺or瓶	(8.8)	－	(4.3)	暗灰色	ナデ	ナデ	口縁部	1/2	
41	7	D区 10層	須恵器 壺or瓶	(10.2)	－	(3.6)	暗灰色	ナデ	ナデ	口縁部	小片	
42	7	D区 10層	須恵器 把手	－	－	(4.1)	外：灰白～灰色 内：灰白色	ナデ	ナデ	把手部	図示の 1/1	平瓶か
43	7	D区 10層	須恵器 壺	－	－	(3.3)	外：暗灰色 内：灰色	ナデ	ナデ	頸部 ～体部	小片	
44	7	D区 10層	須恵器 甕?	－	(5.4)	(2.8)	灰色	ナデ	ヘラケズリ 底：糸切	底部	1/4	
45	7	D区 10層	須恵器 坏?	－	(7.0)	(1.1)	淡灰～灰色	ナデ	ナデ 底：糸切→ナデ	底部	1/4	瓶or甕か

40・41は壺か瓶の口縁と考えられる。40は口縁端部に平坦面をもつもので、41は口縁が短く外反している。42は平瓶の把手部だと考えられるもので、把手と体部はしっかりと接合されている。43は壺であろうか、肩部直下に2条の沈線が回っている。44は甕の底部かと思われる。底面には静止糸切り痕が残る。45は器種不明の底部であるが、底面には回転糸切り痕が残る。

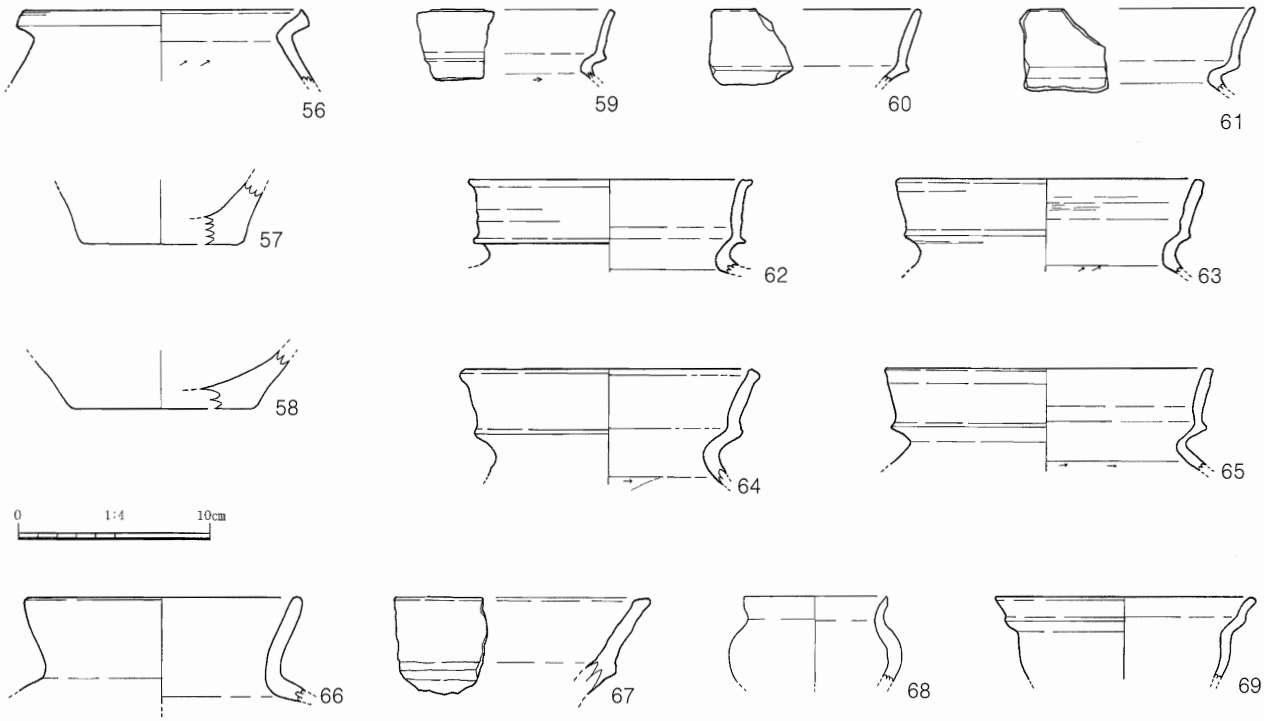
46は甕の口縁部で端部は短く外反している。端部下にはゆるい突帯をめぐらし、櫛描き波状文が施されている。47は短頸の壺である。48～50は甕の体部で、内外面に当て具痕が残る。51・52は平底の底部である。49～51は平安時代のものであろう。53～55は貼付高台をもつ底部であるが、53は坏のもの、54・55は長頸壺のものと考えられる。古墳時代終末～奈良時代のものであろう。



第18図　10層出土遺物（3）

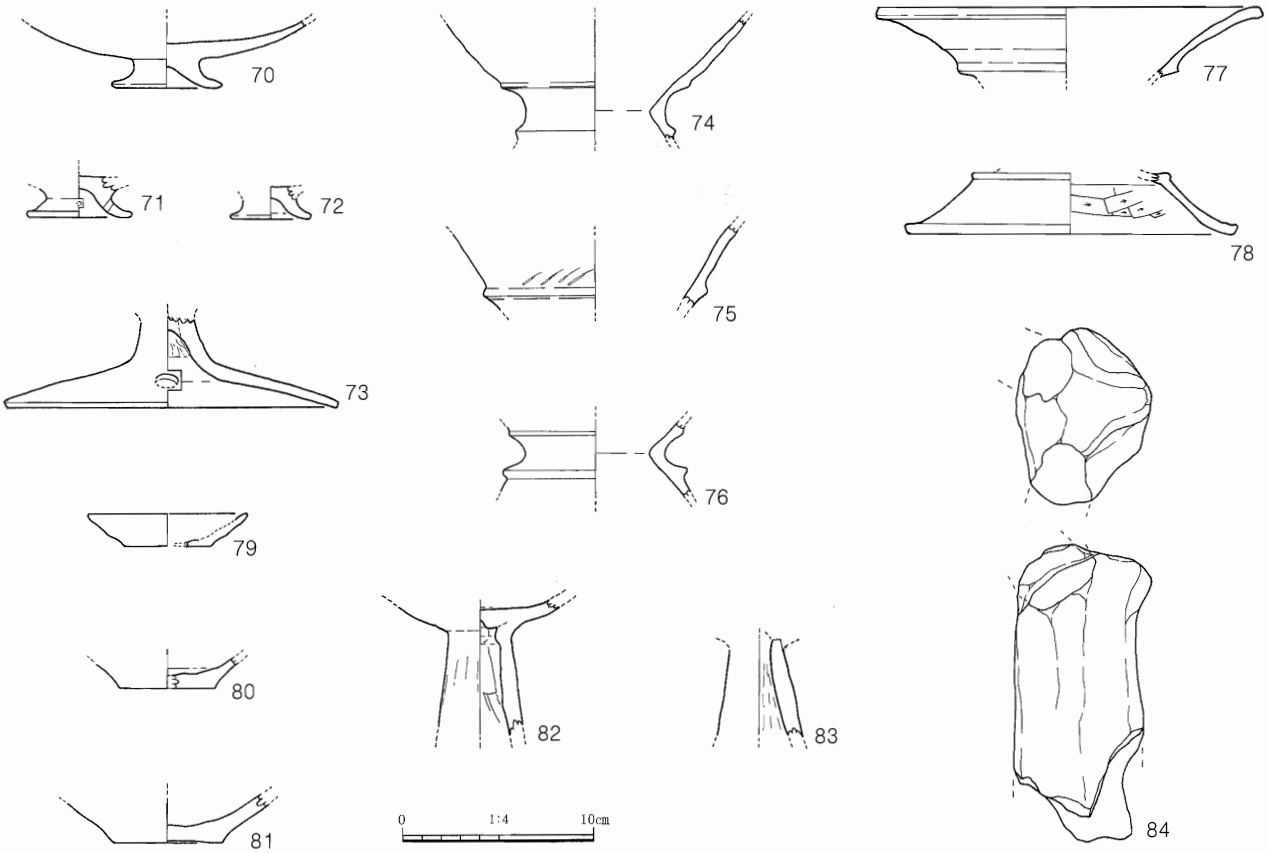
No.	図版	層位・地区	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	色調	調整 内面	外面	残存部位	残存率	備考
46	7	D区 10層	須恵器 甕	—	—	(5.3)	灰色	ナデ	ナデ 口頸:波状文	口縁	小片	
47	7	D区 10層	須恵器 甕	—	—	(4.3)	外:灰色 内:灰～暗灰色	ナデ	口:ナデ 体:平行タタキ	口縁～頸部	1/8	
48	7	D区 10層	須恵器 甕	—	—	(6.4)	淡灰色	口:ナデ 体:同心円タタキ	口:ナデ 体:平行タタキ	頸部～体部	小片	外面自然釉付着
49	7	D区 10層	須恵器 甕	—	—	(3.8)	外:淡黄灰色 内:灰白色	ナデ	格子目タタキ	体部	小片	
50	7	D区 10層	須恵器 甕	—	—	(2.7)	灰色	放射状タタキ	平行タタキ	体部	小片	
51	7	D区 10層	須恵器 底部	—	(15.2)	(4.7)	灰～淡灰色	ナデ	タタキ、ナデ 底:ヘラ切後一部タタキ	底部	1/8	
52	7	D区 10層	須恵器 底部	—	(10.1)	(2.1)	灰色	ナデ	ナデ 底:ヘラ切？	底部	1/7	
53	7	D区 10層	須恵器 底部	—	(10.6)	(2.9)	外:灰～暗灰色 内:灰色	ナデ	ナデ 底:ヘラ切→ナデ	底部	3/4	貼付高台
54	7	E区 10層	須恵器 壺	—	(12.4)	(4.0)	灰色	ナデ 底:未調整	ナデ 底:ヘラ切→ナデ	底部	1/8	貼付高台
55	7	E区 10層	須恵器 壺？	—	(11.2)	(3.9)	外:灰～暗灰色 内:暗灰色	ナデ	ナデ 底:ヘラ切?→ナデ	底部	1/2	貼付高台

56～58は弥生土器で、56は甕の口縁で、端部の平坦面は内傾し、上方にわずかにつまみ出されている。松本編年Ｖ－１様式のものであろう。59～65は複合口縁の甕である。59・63は口縁端部に狭



第19図　10層出土遺物（4）

No	図版	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		残存部位	残存率	備考
				口径	底径	器高		内面	外面			
56	8	Ｂ区 10層	弥生土器 甕	(14.4)	－	(3.8)	外:にぶい赤褐～褐灰色 内:黄褐～灰黄橙色	口:ナデ 体:ヘラケズリ	口:1条以上凹線・不明 体:不明	口縁～体部	1/8	
57	8	Ｂ区 10層	弥生土器 底部	－	(8.0)	(3.4)	浅黄橙色	不明	不明	底部	1/6	
58	－	Ｂ区 10層	弥生土器 底部	－	(9.2)	(3.1)	外:にぶい黄橙～褐灰色 内:褐灰色	不明	不明	底部	1/4	
59	8	Ｂ区 10層	土師器 甕	－	－	(3.7)	にぶい黄褐色	口:ナデ 体:ヘラケズリ	ナデ	口縁～頸部	小片	外面煤付着
60	－	Ｄ区 10層	土師器 甕	－	－	(3.8)	外:明黄褐～にぶい黄橙色 内:にぶい黄色	ナデ	ナデ	口縁	小片	
61	8	Ｂ区 10層	土師器 甕	－	－	(4.5)	外:にぶい黄橙色 内:浅黄褐色	口:ナデ 体:ヘラケズリ	不明	口縁～頸部	小片	
62	8	Ｂ区 10層	土師器 甕	(14.8)	－	(4.9)	浅黄色	口:ナデ 体:ヘラケズリ	ナデ	口縁～頸部	1/8	外面煤付着
63	8	Ｂ区 10層	土師器 甕	(16.1)	－	(4.8)	外:灰白色 内:淡灰黄色	口:ハケ→ナデ 体:ヘラケズリ	ナデ	口縁～頸部	1/8	外面煤付着
64	8	Ｂ区 10層	土師器 甕	(14.6)	－	(5.6)	浅黄色	口:ナデ 体:ヘラケズリ	ナデ	口縁～頸部	1/12	
65	8	Ｂ区 10層	土師器 甕	(17.2)	－	(5.6)	外:浅黄橙色 内:浅黄色	口:ナデ 体:ヘラケズリ	ナデ	口縁～頸部	1/8	外面煤付着
66	8	Ｃ区 10層	土師器 甕	(14.4)	－	(5.4)	外:浅黄橙色 内:浅黄色	不明	不明	口縁	1/4	
67	8	Ｂ区 10層	土師器 壺？	－	－	(5.1)	外:にぶい黄橙～褐色 内:暗褐色	ナデ	ナデ	口縁	小片	
68	8	Ｃ区 10層	土師器 壺	(7.4)	－	(4.5)	外:橙灰色 内:明橙色	不明	不明	口縁～体部	1/8	



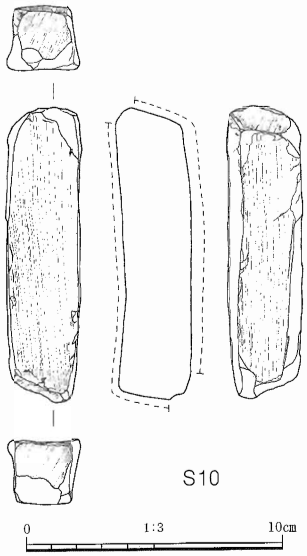
第20図　10層出土遺物（5）

No	図版	層位・地区	器　種	法　量（cm）			色　調	調　整		残存部位	残存率	備　考
				口径	底径	器高		内　面	外　面			
70	8	B区 10層	土師器 低脚坏	－	(5.8)	(3.5)	浅黄色	ナデ	ナデ	坏部 ～脚部	1/3	
71	8	C区 10層	土師器 低脚坏	－	(5.5)	(2.2)	浅黄橙色	ナデ	不明	脚部	1/4	脚部に円孔
72	8	D区 10層	土師器 低脚坏	－	4.2	(1.7)	外:橙～にぶい橙色 内:にぶい橙色	不明	不明	脚部	図示の 1/1	
73	8	B区 10層	土師器 低脚坏	－	(17.0)	(4.6)	浅黄橙～橙色	不明	不明	脚部	1/3	
74	8	D区 10層	土師器 鼓形器台	－	－	(6.4)	外:明橙～淡橙色 内:灰橙～淡橙色	不明	ナデ	受下 ～脚上	1/8	
75	8	B区 10層	土師器 鼓形器台	－	－	(4.4)	にぶい黄橙色	不明	ナデ ヘラ状工具による斜行文	受部下	1/6	
76	8	C区 10層	土師器 鼓形器台	－	－	(4.0)	淡黄褐色	不明	不明	受下 ～脚上	1/4	
77	8	B区 10層	土師器 鼓形器台	(20.0)	－	(3.7)	浅黄橙色	不明	不明	受部	1/8	
78	8	B区 10層	土師器 鼓形器台	－	(17.0)	(3.3)	外:浅黄橙色 内:浅黄色	ケズリ→ナデ	ナデ	脚部	1/5	
79	8	D区 10層	土師器 皿	(8.4)	(4.5)	(1.7)	外:橙色 内:にぶい橙色	不明	不明	口縁 ～底部	2/3	
80	8	D区 10層	土師器 坏	－	(5.0)	(1.6)	外:浅黄色 内:浅黄橙色	ナデ	ナデ 底：糸切	底部	1/2	
81	8	D区 10層	土師器 坏	－	5.7	(2.4)	外:浅黄橙色 内:浅黄橙～橙色	ナデ	ナデ 底：糸切	底部	図示の 1/1	
82	8	A区 10層	土師器 高坏	－	－	(7.1)	橙色	シボリ	不明	坏部～ 脚筒部	図示の 1/1	坏底面に脚接合時の刺突痕あり
83	8	B区 10層	土師器 高坏	－	－	(5.0)	橙色	シボリ	不明	脚筒部	図示の 1/1	脚部を坏に差し込むタイプ

No	図版	地区・層位	種　別	法　量（cm）				調　整	胎　土	色　調	備　考
				最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)				
84	8	D区 10層	支脚	(15.7)	9.0	7.2	840.0	ナデ	1mm以下の砂粒多く含	橙色	

No	図版	層位・地区	種別	法量(cm)				材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)		
S10	10	D区 10層	砥石	11.5	2.9	2.2	178.56	頁岩	

い平坦面をつくっており、60・61は薄く引き出して丸くおさめている。62・64・65は口縁端部が外方へ折り曲げられており、62は口縁下端部の稜が鋭い。これらは弥生時代終末～古墳時代初頭のものである。66は単純口縁の甕で、器壁はやや厚みがあり、比較的高い口縁部で、口縁端部は丸くおさめられている。古墳時代中期の所産であろう。67は複合口縁の壺で、口縁端部は平坦面がつくられ、外方へ折り曲げられている。68は小型丸底壺で、丸い体部に短い口縁をもつ。69は鉢で、口縁は屈曲して外方へ開いている。67・69は古墳時代前期、68は古墳時代中期のものと思われる。



第21図 10層出土遺物（6）

70～72は低脚坏である。70は平らな坏底部からゆるやかなカーブで立ち上がる坏部をもつもので、脚端部はハの字状に開く。71・72も脚端部はハの字状に開いており、72は比較的小ぶりなものである。71の脚には少なくとも１円孔が穿孔されている。73は大きく開く低い高坏の脚部で、少なくとも１方向の円形の透かし穴がある。74～78は鼓形器台で、いずれも筒部が縮約したものである。74は筒部内面が稜線となっている。75は受部下半外面にヘラ状の工具でつけたと思われる斜行文が施されている。77・78は端部が外に大きく広がり、筒部の縮約がより進んだものである。70～78は弥生時代終末～古墳時代前半のものである。79は皿、80・81は坏の底部である。摩滅が激しいものの、80・81の底面には不明瞭だが、回転糸切り痕がみられる。これらは中世のものであろう。82・83は高坏で、82は円盤充填するもので、接合時の刺突痕が、坏底面に残っている。83は底のある坏部と脚部を別々につくるタイプのものである。82は古墳時代前期、83は古墳時代中期のものである。84は三又突起タイプの土製支脚である。突起部と脚端部は欠損している。背面の突起部は前面のものよりも小さい。

Ｓ10は砥石で、各面ともよく磨られ使い込まれている。10層出土石器で図化していないものの総数は、黒曜石のものが、石鏃未製品１点、楔形石器１点、使用痕の剥片４点、石核３点、剥片44点である。その他の石材は、安山岩剥片３点、瑪瑙剥片２点である。

12・13層出土遺物（第22～28図、図版９・10）

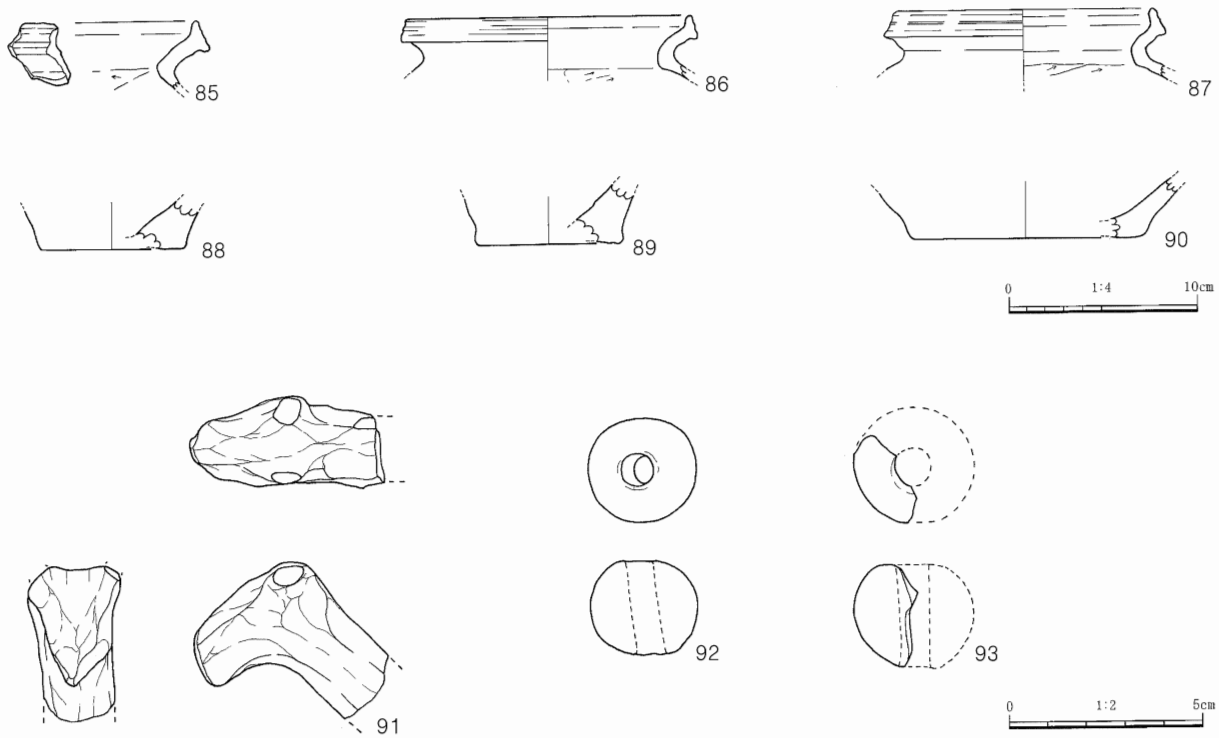
12・13層は、表土下約90cm、標高3.1～3.3mのレベルで上面を検出した。灰色砂質土をベースとした土が、ＳＤ０１の上面を覆うように5～10cm程度の厚さで堆積している。遺物は弥生土器・土師器・土製品・黒曜石の石器や剥片などが多量に出土おり、そのほとんどは摩滅が激しい。

85～87は弥生土器の甕口縁である。口縁端部は上下に拡張され、平坦面は内傾し、凹線が施されている。松本編年Ｖ－１様式のものである。88～90は底部で、弥生土器のものであろう。91は動物の頭の部分と思われる土製品である。土馬かとも思われるが、耳の辺りがさらに延びそうな様相を呈しているので、鼠などのほかの動物を模ったものとも考えられる。92・93は土玉で、93は３分の

1が残るのみである。

94～107は複合口縁の甕である。口縁端部は94・101・107のように薄く引き出されたもの、95～97・103のように丸くおさめられているもの、98・104～106のように狭い平坦面をつくるもの、99・100・102のように外方へ折り曲げられているものがある。口縁下端部の稜は水平に突出し、鈍いものが多い。弥生時代終末～古墳時代前期におさまるものである。

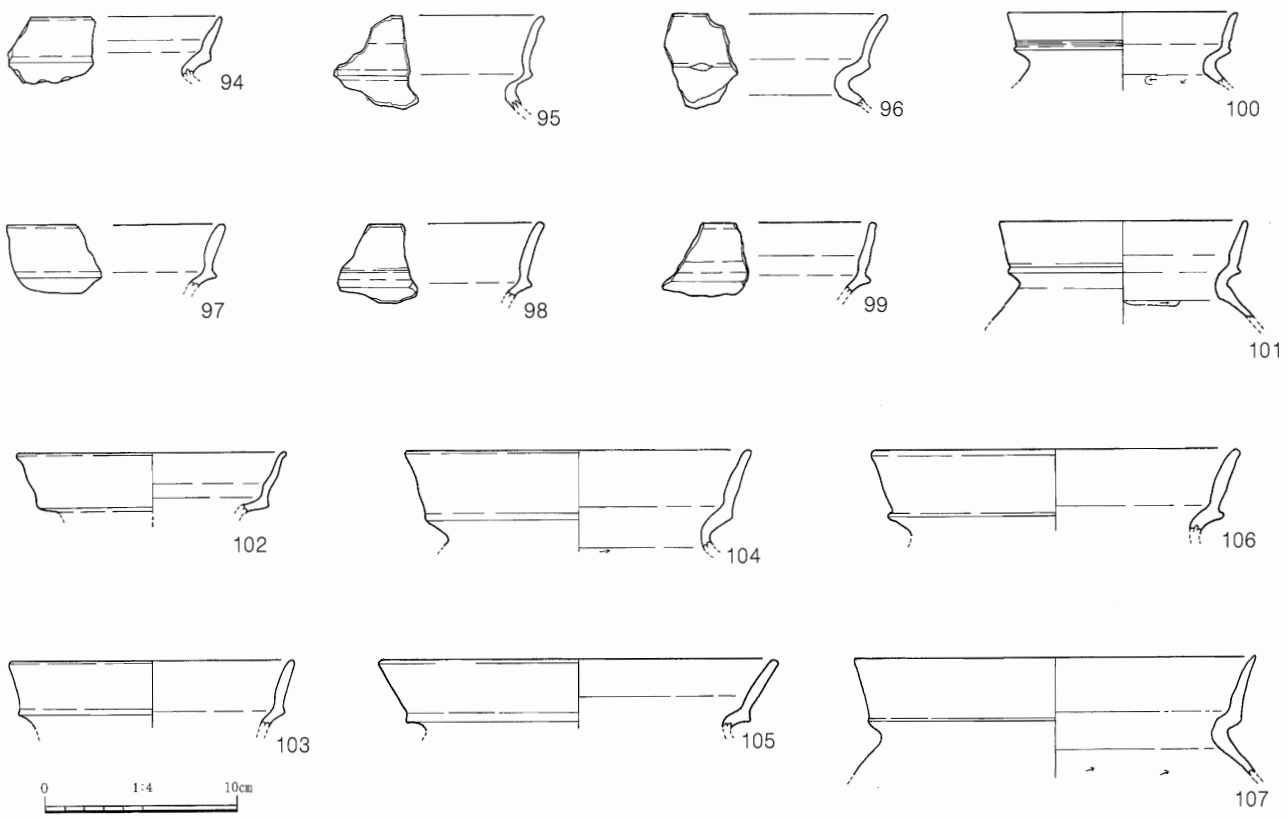
108～112は単純口縁の甕である。108は口縁の中央あたりがやや肥厚し、端部には平坦面がつくられている。109～112は口縁端部が丸くおさめられており、110は厚手である。これらは古墳時代



第22図　12・13層出土遺物（1）

No	図版	地区・層位	種別	法量（cm）				調整	胎土	色調	備考
				最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)				
91	9	A区 12・13層	獣頭？	4.1	5.1	2.4	28.64	不明	1mm以下の砂粒多く含	橙褐色～淡褐色	十馬か？
92	9	B区 12・13層	土玉	2.5	2.8	3.7	17.44	ナデ	1mm以下の砂粒少含	灰黄色	1/3残
93	9	B区 12・13層	土玉	2.7	(3.2)	－	6.32	ナデ	1mm以下の砂粒少含	灰黄色	ほぼ完存

No	図版	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		残存部位	残存率	備考
				口径	底径	器高		内面	外面			
85	－	B区 12・13層	弥生土器 甕	－	－	(3.6)	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄橙色	口：ナデ 体：ケズリ	口：2条凹線 体：ナデ	口縁～体部	小片	
86	9	B区 12・13層	弥生土器 甕	(14.8)	－	(3.4)	外:浅黄橙～にぶい灰褐色 内:にぶい黄橙～灰白色	口：ナデ 体：ケズリ	口：2条凹線 体：ナデ	口縁～体部	1/8	外面煤付着
87	9	B区 12・13層	弥生土器 甕	(13.4)	－	(3.7)	外:褐灰色 内:灰白～灰褐色	口：ナデ 体：ケズリ	口：2条凹線 体：ナデ	口縁～体部	1/8	
88	9	B区 12・13層	弥生土器 底部	－	(7.6)	(2.5)	外:浅黄～灰黄橙色 内:浅黄色	不明	不明	底部	1/4	
89	－	B区 12・13層	弥生土器 底部	－	(7.4)	(3.0)	外:明褐色 内:浅黄橙色	不明	不明	底部	1/4	
90	9	C区 12・13層	弥生土器 底部	－	(12.6)	(3.0)	外:明黄褐～黄灰色 内:浅黄色	不明	不明	底部	1/6	

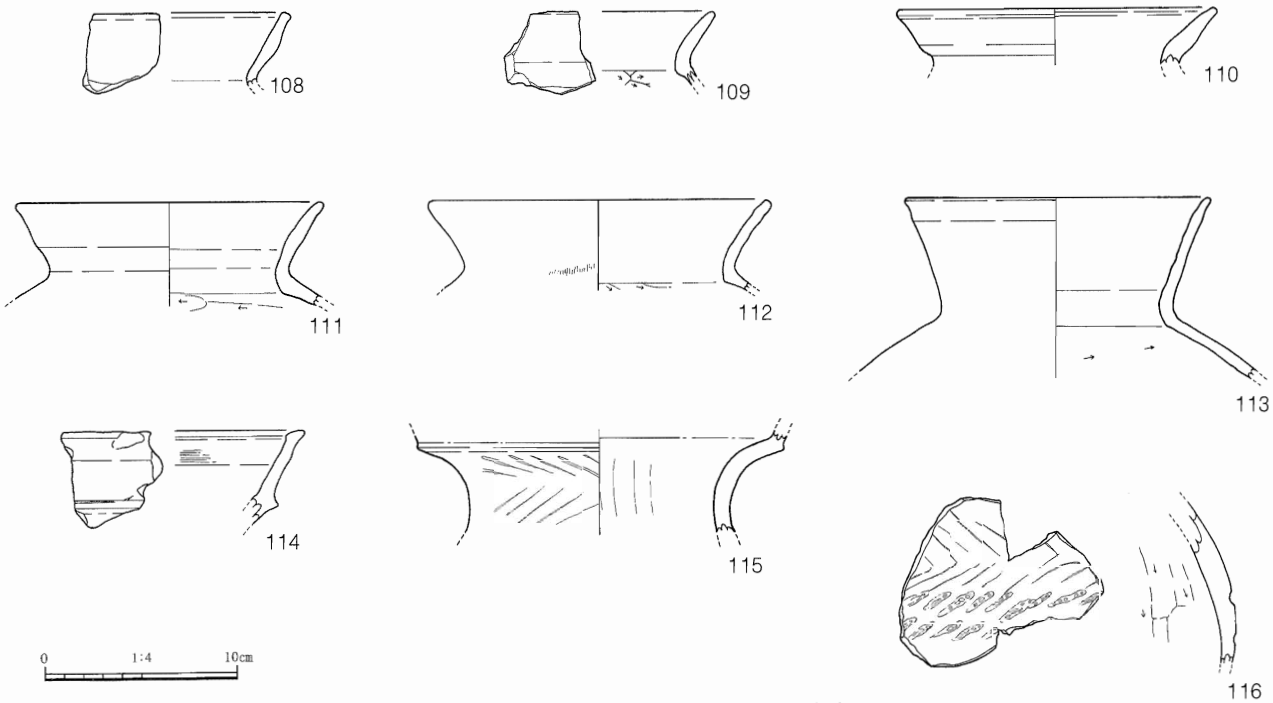


第23図　12・13層出土遺物（2）

No	図版	層位・地区	器　種	法　量（cm）			色　調	調　整		残存部位	残存率	備　考
				口径	底径	器高		内　面	外　面			
94	—	B区 12・13層	土師器 甕	—	—	(3.2)	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	口縁	小片	
95	—	B区 12・13層	土師器 甕	—	—	(5.0)	にぶい黄橙色	口:ナデ 体:ケズリ？	ナデ	口縁～体部	小片	
96	9	B区 12・13層	土師器 甕	—	—	(5.0)	外:灰黄色 内:浅黄色	口:ナデ 体:ケズリ	ナデ	口縁～体部	小片	
97	9	B区 12・13層	土師器 甕	—	—	(3.3)	淡黄色	ナデ	ナデ	口縁	小片	
98	9	B区 12・13層	土師器 甕	—	—	(4.0)	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	口縁	小片	外面煤付着
99	9	B区 12・13層	土師器 甕	—	—	(3.8)	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	口縁	小片	外面煤付着
100	9	B区 12・13層	土師器 甕	(12.0)	—	(3.8)	浅黄橙色	口:ナデ 体:ケズリ	ナデ	口縁～体部	1/7	外面煤付着
101	9	B区 12・13層	土師器 甕	(13.0)	—	(5.2)	外:灰黄～にぶい橙色 内:浅黄～浅黄橙色	口:ナデ 体:ケズリ	ナデ	口縁～体部	1/8	
102	—	B区 12・13層	土師器 甕	(14.0)	—	(3.2)	にぶい黄橙色	不明	不明	口縁	1/8	
103	—	B区 12・13層	土師器 甕	(15.0)	—	(3.6)	外:灰白～黄灰色 内:灰白色	不明	不明	口縁	1/9	
104	9	B区 12・13層	土師器 甕	(18.0)	—	(5.3)	外:褐灰色 内:浅黄橙～褐灰色	口:ナデ 体:ケズリ	ナデ	口縁～体部	1/6	
105	—	B区 12・13層	土師器 甕	(20.7)	—	(3.7)	外:灰黄色 内:褐灰色	ナデ	ナデ	口縁	1/12	
106	—	B区 12・13層	土師器 甕	(18.7)	—	(4.5)	外:浅黄橙色 内:灰白～灰黄色	不明	ナデ	口縁	1/8	
107	9	B区 12・13層	土師器 甕	(20.8)	—	(6.2)	淡黄色	口:ナデ 体:ケズリ	ナデ	口縁～体部	1/8	

中期のものである。113は単純口縁の壺である。口縁は直線的に広がり、端部は丸くおさめられている。114・115は複合口縁の壺である。114は口縁小片であるが、端部は外方へ折り曲げられて、内面にもゆるい稜をなし、平坦面はやや内傾している。115は頸部のみであるが、羽状文が施されている116は壺の体部と思われる破片である。最大径になるであろう付近に羽状文と、斜行刺突文が施されている。113～115は古墳時代前期のものである。116も同様な時期のものであると考えられる。

117～127は鼓形器台である。全体的に筒部の縮約が進んだものである。117～119は受部口縁で、117は端部を丸くおさめ、118は端部に平坦面をつくっている。119は口縁端部が外反する大型のものである。120・121は受部下半部分の破片である。120は受部の開きが小さいので、やや器高のあ



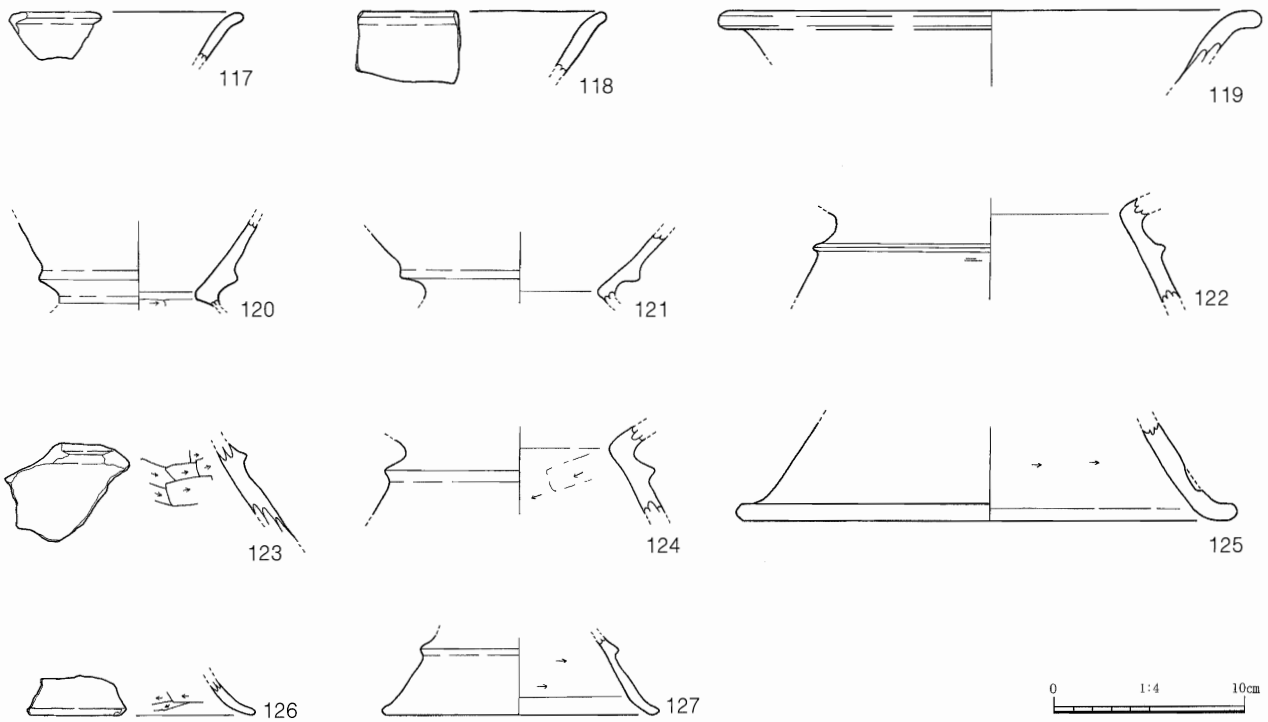
第24図　12・13層出土遺物（3）

No	図版	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		残存部位	残存率	備考
				口径	底径	器高		内面	外面			
108	9	B区 12・13層	土師器 甕	—	—	(3.9)	外:灰黄褐色 内:にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	口縁	小片	
109	9	B区 12・13層	土師器 甕	—	—	(4.0)	浅黄色	口:ナデ 体:ケズリ	ナデ	口縁～体部	小片	
110	9	B区 12・13層	土師器 甕	(16.8)	—	(3.0)	外:浅黄～褐色 内:浅黄～黄褐色	ナデ	ナデ	口縁	1/8	
111	9	B区 12・13層	土師器 甕	(16.0)	—	(5.4)	にぶい黄橙～灰黄褐色	口:ナデ 体:ケズリ	ナデ	口縁～体部	1/5	
112	9	B区 12・13層	土師器 甕	(17.2)	—	(4.8)	外:浅黄橙～灰白色 内:灰白色	口:ナデ 体:ケズリ	口:ナデ 体:ハケ	口縁～体部	1/12	外面煤付着
113	9	B区 12・13層	土師器 壺	(16.0)	—	(9.5)	外:明褐灰色 内:浅黄橙～ にぶい黄橙色	口:ナデ 体:ケズリ	ナデ	口縁～体部	1/10	
114	9	B区 12・13層	土師器 壺	—	—	(5.0)	灰黄褐色	ハケ、ナデ	ナデ	口縁	小片	内面煤付着
115	9	B区 12・13層	土師器 壺	—	—	(5.3)	外:橙色 内:浅黄橙色	ナデ	ナデ ヘラ状工具による斜線文	頸部	1/5	
116	9	B区 12・13層	土師器 壺？	—	—	(8.5)	外:灰白色 内:褐色	ケズリ	斜行刺突文、羽状文	体部	小片	

るものであろう。121は筒部の縮約が進み、内面が稜線となっている。受部の開きも大きい。

122～124は脚部上半の破片である。122は大型のもので、123・124は器壁がやや厚いものである。125・126は脚部下半、126は脚部全体が残るものである。125も大型のもので、端部は外方へ曲がっている。119・122・125は胎土が似ている事から、同一個体の可能性がある。127はやや器高が高いものであろう。これらはおおむね弥生時代終末期～古墳時代前期のものである。

128～131は高坏である。128は円盤充填するもので、接合時の刺突痕が、坏底面に残っている。129は受部で口縁は直線的に広がる。130は脚筒部から屈曲し、開く裾部をもつ脚部である。131も脚部で、裾部がハの字状に広がっている。128・129・131は古墳時代前期のものである。132～135は低



第25図　12・13層出土遺物（4）

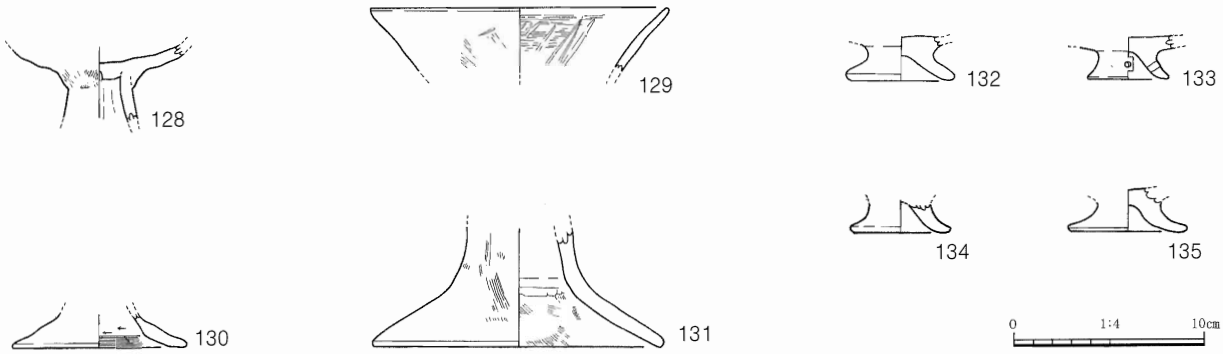
No	図版	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		残存部位	残存率	備考
				口径	底径	器高		内面	外面			
117	—	B区 12・13層	土師器 鼓形器台?	—	—	(2.5)	外:浅黄色 内:にぶい黄褐色	不明	ナデ	口縁	小片	
118	9	B区 12・13層	土師器 鼓形器台	—	—	(3.2)	淡黄色	不明	不明	口縁	小片	
119	9	B区 12・13層	土師器 鼓形器台?	(27.6)	—	(4.0)	外:浅灰黄～褐色 内:浅灰黄色	不明	不明	口縁	1/8	
120	—	B区 12・13層	土師器 鼓形器台	—	—	(4.5)	外:浅黄橙色 内:灰白色	受:不明 脚:ケズリ	不明	受下～脚上	1/8	
121	9	地区不明 12・13層	土師器 鼓形器台	—	—	(3.6)	外:淡褐色 内:淡灰褐色	不明	ナデ	受下～脚上	1/4	
122	9	B区 12・13層	土師器 鼓形器台	—	—	(5.4)	浅黄～黄褐色	ナデ	ナデ	受下～脚上	1/8	
123	—	B区 12・13層	土師器 鼓形器台	—	—	(5.2)	外:灰黄色 内:浅黄橙色	ケズリ	ナデ	脚上半	小片	
124	9	B区 12・13層	土師器 鼓形器台	—	—	(4.6)	外:灰褐色 内:黄褐色	受:ナデ 脚:ケズリ→ナデ	ナデ	受下～脚上	1/6	
125	9	B区 12・13層	土師器 鼓形器台	—	(26.0)	(5.2)	にぶい黄橙色	ケズリ→ナデ	ナデ	脚部	1/8	
126	—	B区 12・13層	土師器 鼓形器台	—	—	(1.9)	にぶい黄橙色	ケズリ、ナデ	ナデ	脚端部	小片	
127	9	B区 12・13層	土師器 鼓形器台	—	(14.4)	(4.2)	外:にぶい黄橙色 内:にぶい橙色	ケズリ、ナデ	ナデ	脚部	1/10	

脚坏の脚部である。132は全体的に厚みがあり、脚端部は丸くおさめられている。133は脚端部が薄く引き出され、脚柱部には１円孔が穿孔されている。134・135は脚端部がハの字状に広がっているものである。これらの低脚坏は古墳時代前期のものであろう。

Ｓ11は太型蛤刃石斧の破片である。表面は丹念に磨かれ、刃部がつくり出されている様子が伺える。Ｓ12は小型の砥石である。軟質の凝灰岩でつくられており、砥面はよく使われている。Ｓ13は用途不明品である。硬質の頁岩で、上面には擦痕が残り、一部打剥を受けている。１側面は剥離しているが、２側面には敲き痕がみられる。前後関係はわからないが、敲き石・磨り石の転用品であろう。Ｓ14は花崗岩の凹石で、風化が激しい。

Ｓ15～Ｓ17は石鏃である。Ｓ15は平基式で長く、主要剥離面が大きく残る。Ｓ16は平面形が正三角形に近く、短い。先端・基端は鋭い。Ｓ17は上半が欠損しており、片面は大きく剥離している。平基式のやや鏃身の長いものだと考えられる。Ｓ18・Ｓ19は小型の楔形石器である。Ｓ18は両極に打撃痕が見られる。Ｓ20～Ｓ22は石核である。Ｓ20は安山岩、Ｓ21・Ｓ22は黒曜石である。Ｓ21は多方向からの打痕がみられる。Ｓ22は、ほぼ原礫のまま剥片剥離を始めたものと思われる。原礫面が多く残り、打撃痕が上面からのみであるから、多くの剥片は採られなかったものと思われる。

12・13層出土石器で図化しなかったものの総数は、黒曜石のものがスクレイパー1点、使用痕のある剥片３点、石核５点、剥片43点である。その他の石材は安山岩剥片１点、瑪瑙剥片１点、石種不明の原石１点である。



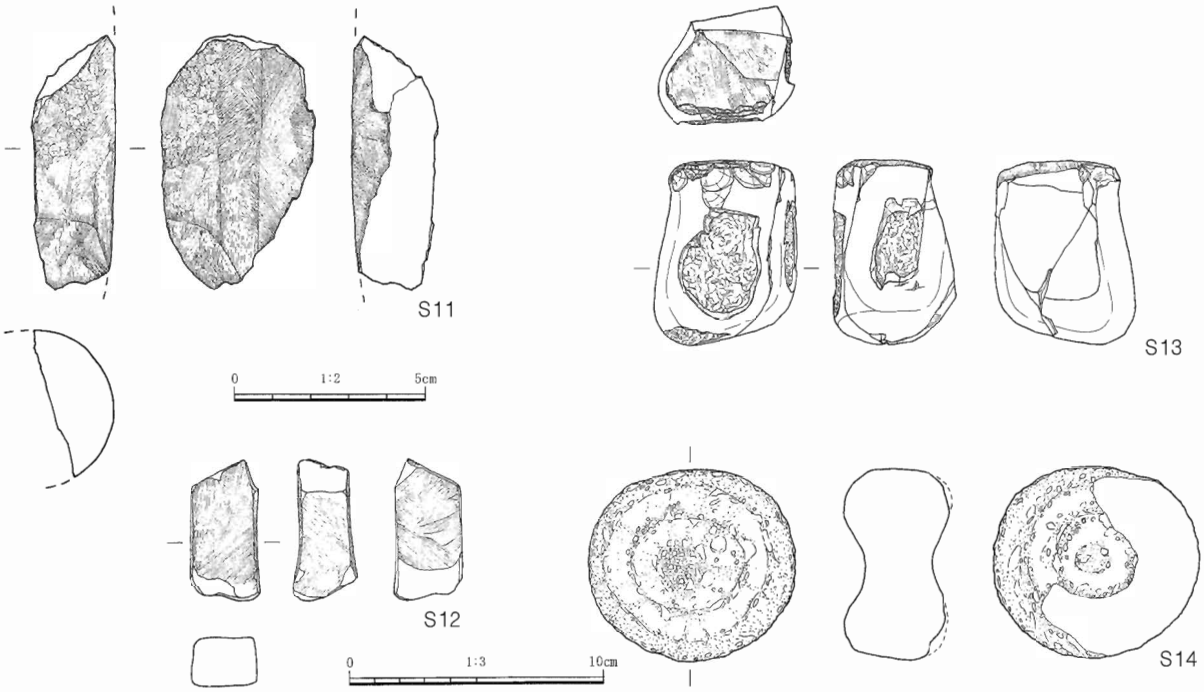
第26図　12・13層出土遺物（5）

No	図版	層位・地区	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	色調	調整 内面	外面	残存部位	残存率	備考
128	9	Ｂ区 12・13層	土師器 高坏	－	－	(4.0)	外:淡黄灰色 内:淡灰色	坏:不明 脚:ナデ	ハケ	受下～脚筒部	1/2	坏底面に脚接合時の刺突痕あり
129	－	Ｂ区 12・13層	土師器 高坏	－	(15.6)	(3.4)	外:にぶい橙色 内:橙色	ハケ→ミガキ	ハケ→ナデ、ミガキ	受部	1/8	
130	9	Ｂ区 12・13層	土師器 高坏	－	(9.1)	(1.8)	外:暗褐色 内:にぶい黄褐色	ケズリ、ハケ	ミガキ	脚部	1/4	
131	9	Ｂ区 12・13層	土師器 高坏	－	(15.0)	(6.2)	外:浅黄橙色 内:橙色	ハケ、ナデ	ハケ、指頭圧痕	脚部	1/8	
132	－	Ｂ区 12・13層	土師器 低脚坏	－	(5.8)	(2.3)	外:浅黄色 内:黄灰～浅黄橙色	ナデ	ナデ	脚部	1/2	
133	－	Ｂ区 12・13層	土師器 低脚坏	－	(4.3)	(2.2)	外:浅黄橙色 内:にぶい橙色	ナデ	ナデ	脚部	1/2	脚部に１円孔
134	9	Ｂ区 12・13層	土師器 低脚坏？	－	(5.2)	(1.5)	橙色	ナデ	不明	脚部	図示の1/1	
135	9	Ｂ区 12・13層	土師器 低脚坏	－	(6.2)	(2.3)	浅黄灰色	ナデ	ナデ	脚部	3/4	

その他の層位の出土遺物（第29図、図版10）

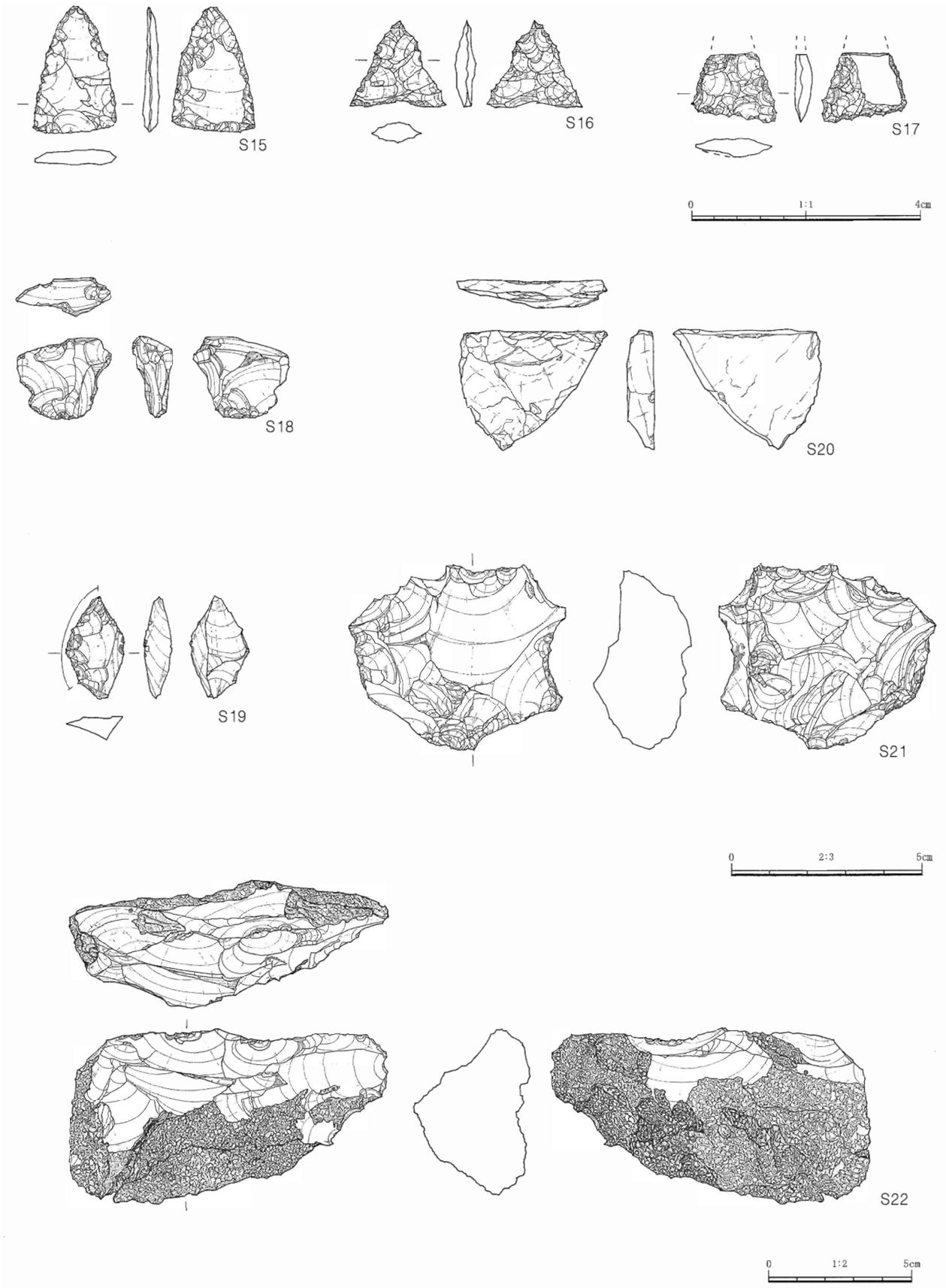
調査地内の撹乱内や、排土中、壁面精査中に出土したもので、出土層位がわからないものである。出土地がわからないものの石器の総数は、黒曜石のものが、使用痕のある剥片２点、石核１点、剥片１点である。その他の石材のものは瑪瑙剥片が１点ある。

136は大型の須恵器甕の口縁部で、端部は内面の稜から屈曲して立ち上がっている。口端部下に断面三角形の凸帯をめぐらし、その下に櫛描きの波状文を施す。５世紀末頃のものと思われ、調査地内では当該期の他の遺物がないため、混入である可能性が高い。137は坏と思われる底部で回転糸切り痕が残る。138～140は土師器の皿である。138・139は同一撹乱土内からの出土で、口縁や内



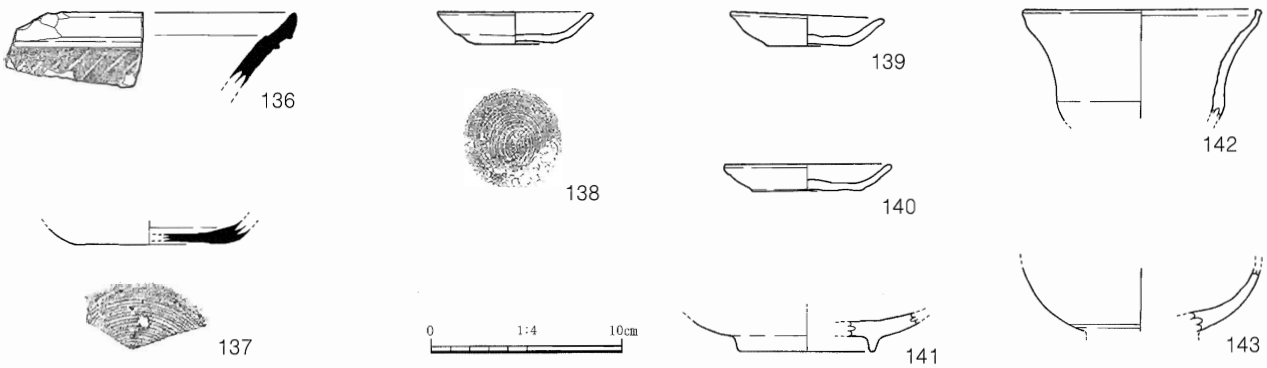
第27図　12・13層出土遺物（6）

No	図版	層位・地区	種別	法量（cm）				材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)		
S11	10	B区 12・13層	磨製石斧	(6.7)	(2.2)	(3.7)	66.52	塩基性片岩	蛤刃石斧破片
S12	10	C区 12・13層	砥石	(5.5)	2.5	2.4	34.63	凝灰岩	破片
S13	10	B区 12・13層	不明石製品	7.3	5.5	(4.8)	288.37	頁岩	上面擦痕・剥離有
S14	10	地区不明 12・13層	凹石	7.5	8.1	4.2	370.09	花崗岩	
S15	10	C区 12・13層	石鏃	2.2	1.4	0.3	0.92	黒曜石	
S16	10	C区 12・13層	石鏃	1.5	1.6	0.4	0.54	黒曜石	
S17	10	C区 12・13層	石鏃	(1.2)	1.9	0.3	0.49	黒曜石	先端部欠損
S18	10	C区 12・13層	楔形石器	2.1	2.4	1.0	3.28	黒曜石	
S19	10	B区 12・13層	楔形石器	2.7	1.5	0.7	1.63	黒曜石	
S20	10	B区 12・13層	石核	3.2	3.9	0.7	8.99	安山岩	
S21	10	B区 12・13層	石核	4.8	5.4	2.3	60.26	黒曜石	
S22	10	C区 12・13層	石核	6.0	10.8	3.7	221.42	黒曜石	



第28図　12・13層出土遺物（7）

面に油煙痕が顕著に付着しており、回転ナデと糸切り痕も明瞭にみられる。埋土中の不純物と思われる付着物が全体を覆うように付いている。近世のものであろう。140は内底面にわずかに油煙痕が付着している。摩滅が激しいが底面にはかすかに回転糸切り痕が認められる。141は磁器碗底部で、見込みには蛇の目釉剥ぎがみられる。釉はやや青緑がかった白色で、高台畳付には釉が施されていない。肥前系のものと思われる。142は陶器の鉢と思われるものである。口縁はやや湾曲しており、外面は褐色、内面は明るめの黄褐色の釉が施されている。143は陶器の碗で、外面の高台部直上に、釉を施す前に2本の細い沈線をめぐらしている。141～143は近世の所産であろう。



第29図　遺構外出土遺物

No.	図版	層位・地区	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	色調	調整 内面	外面	残存部位	残存率	備考
136	10	層位不明	須恵器 甕	—	—	(4.0)	灰色	ナデ	ナデ 口頸:波状文	口縁	小片	
137	10	層位不明	須恵器 坏	—	(8.0)	(1.2)	灰色	ナデ	ナデ 底:糸切	底部	1/4	
138	10	D区 撹乱内	土師器 皿	8.2	4.5	1.7	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ 底:糸切		完存	灯明皿 内外面付着物有
139	10	D区 撹乱内	土師器 皿	8.0	4.3	1.8	にぶい黄褐～淡橙色	ナデ	ナデ 底:糸切		完存	灯明皿 内外面付着物有
140	10	層位不明	土師器 皿	(8.7)	(5.7)	1.4	外:浅黄橙色 内:浅黄橙～褐色	ナデ	ナデ 底:糸切	口縁～底部	1/4	灯明皿
141	10	D区 撹乱内	磁器 染付碗	—	(7.2)	(2.0)	白色	見込:蛇の目釉ハギ		底部	1/6	肥前系？
142	10	D区 撹乱内	陶器 鉢？	(12.0)	—	(5.8)	外:褐色 内:黄褐色			口縁～体部	1/4	施釉
143	10	排土中	陶器 碗	—	—	(3.4)	灰オリーブ色			体部	1/6	施釉

A～E区出土石器集計表

石材＼器種	石鏃	石鏃未製品	スクレイパー	楔形石器	加工痕のある剥片	使用痕のある剥片	剥片	石核	原石	打製石斧	磨製石斧	凹石	砥石	不明品	計
黒曜石	7	1	3	3	1	17	221	16							269
安山岩							6	1		1					8
瑪瑙							7	1							8
頁岩													1	1	2
凝灰岩													1		1
塩基性片岩											1				1
花崗岩												1			1
不明									1						1
計	7	1	3	3	1	17	234	18	1	1	1	1	2	1	291

第５節　小　　結

今回の調査の結果、溝・土壙・ピットの各遺構と３層の包含層が確認された。溝はすべて自然流路であり、土壙・ピットはその性格等は明らかにすることができなかった。包含層は、出土遺物から、12・13層がＳＤ０１埋没後～古墳時代中期の時期のものと考えられるのみで、７層・10層は包含されている遺物が広い時期にまたがる事から、時期を決定するまでには至らなかった。しかし、10層、12・13層に含まれる遺物の多くが摩滅している事から、これらの遺物は土砂と共に調査区外から流入してきたものと考えられる。よって、10層、12・13層は調査区外から流入してきた土砂の堆積層と考えられる。

また、調査地周辺の地形と、検出した溝の流水を合わせて考えてみると、本調査地は本来、北～東の方向に少し微高し、ＳＤ０１がその一番谷部に位置していたと考えられる。そのため、10層、12・13層は調査地の北～東方向から流入してきたと推測できる。

しかし現在の地形ではＡ～Ｅ区はほぼ平坦で、調査区北端から立ち上がる緩やかな丘陵がみられる。そのため、Ａ～Ｅ区は平坦面を作り出すために削平・造成をされた可能性が考えられる。Ｃ・Ｄ区壁面の土層観察からは、その可能性が考えられるのは10層以上で、10層が本来は北に向かい堆積が厚かったが、一部削平され、８・７層土で造成を行ったのではないかと考えることができる。また、平坦面が作り出された理由は調査の過程で明確にできなかったものの、７層上面から遺構が検出できなかったことから、耕作地としての利用を考えることができるであろう。

以上のことから、調査地内に堆積する土層の流入過程を推測してみると、まず調査地内遺構最古であるＳＤ０１がほぼ埋没した後、くぼみ状に残った箇所に、ＳＤ０１を覆うように12・13層土が流入する。その後10層土が調査地全体に流入する。10層土に含まれる遺物の年代観には開きがみられる事から、数度に亘り流入した可能性も考えられる。その後、10層以上から削平・造成を受け、７層土が形成され、耕作地としての機能を持ったと考えられる。

10層、12・13層の出土遺物、自然流路に含まれる遺物が、流れの上流になるであろう東側から流入してきていると考えられることから、当調査地の北～東方に、縄文時代後期～中世までの集落等の人間の活動痕跡が残る遺跡が埋没していることが考えられ、今後の調査に期待をしたい。

参考文献

松本岩雄1992「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社

赤澤秀則1992『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5　南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会

島根県教育委員会1984『高広遺跡発掘調査報告書－和田団地造成工事に伴う発掘調査－』

松山智弘1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討－」『島根考古学会誌　第８集』島根考古学会

松山智弘2000「小谷式再検討－出雲平野における新資料から－」『島根考古学会誌　第17集』島根考古学会

松山智弘2002「土器から見た出雲における前期古墳」『第30回山陰考古学研究会資料集　山陰の前期古墳』山陰考古学研究集会

大谷晃二1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌　第11集』島根考古学会

中村　浩1990『研究入門　須恵器』柏書房

廣濱貴子編2005『菅田横穴墓群・薦沢砦跡』松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団

九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』九州近世陶磁学会

江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究事典』柏書房

第４章　Ｆ区の調査

第１節　調査の方法

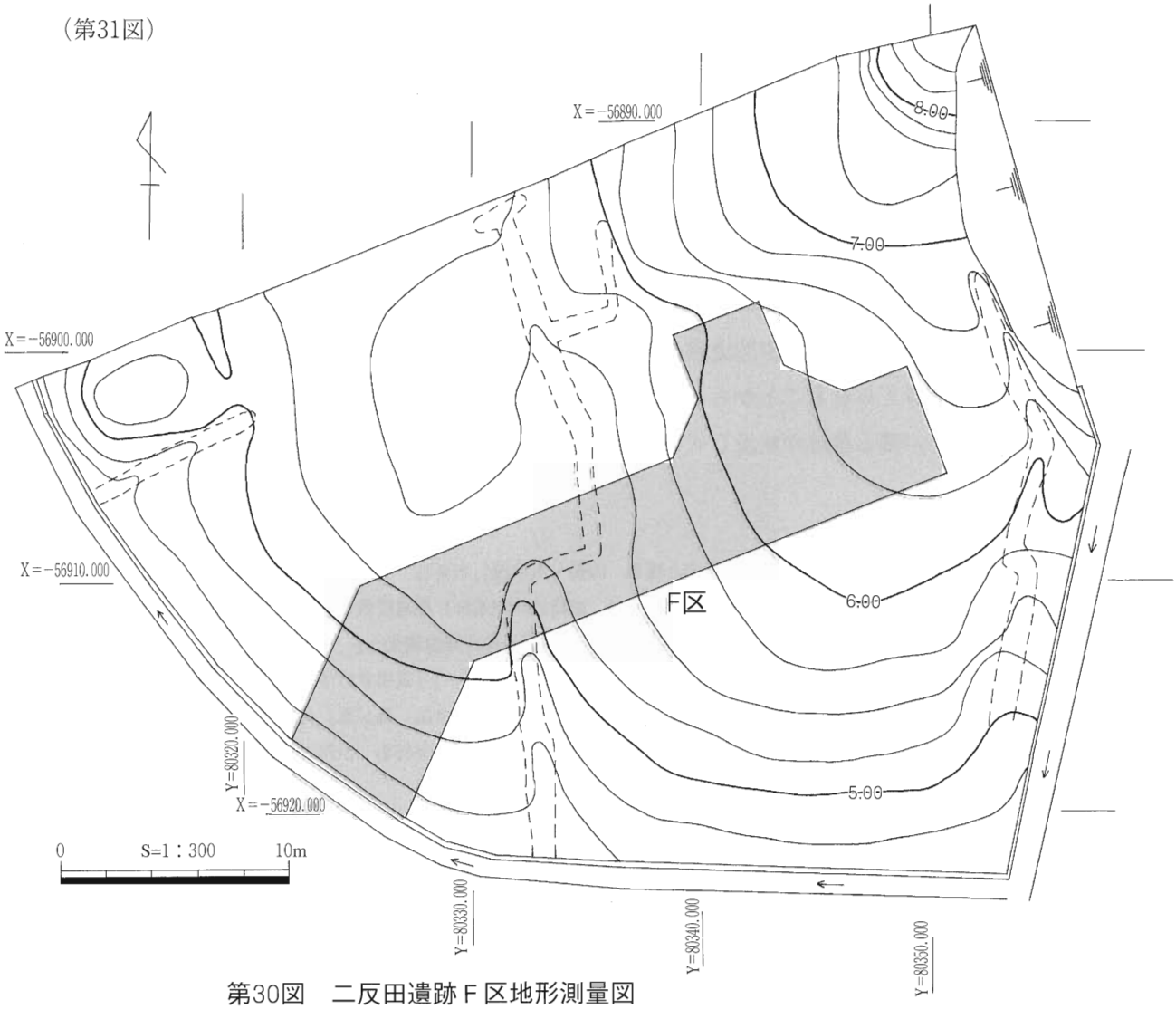
宅地造成地（第30図）の道路部分180m²について発掘調査を実施した。

試掘調査の結果で遺構面の深さがわかっていたため、まずは重機を利用して遺物包含層上面、場所によってはほぼ地山面まで掘り下げた。その後、人力による丁寧な遺物取り上げおよび遺構検出を行った。（江川「二反田遺跡Ｆ区概要報告書」より転載）

第２節　調査の概要

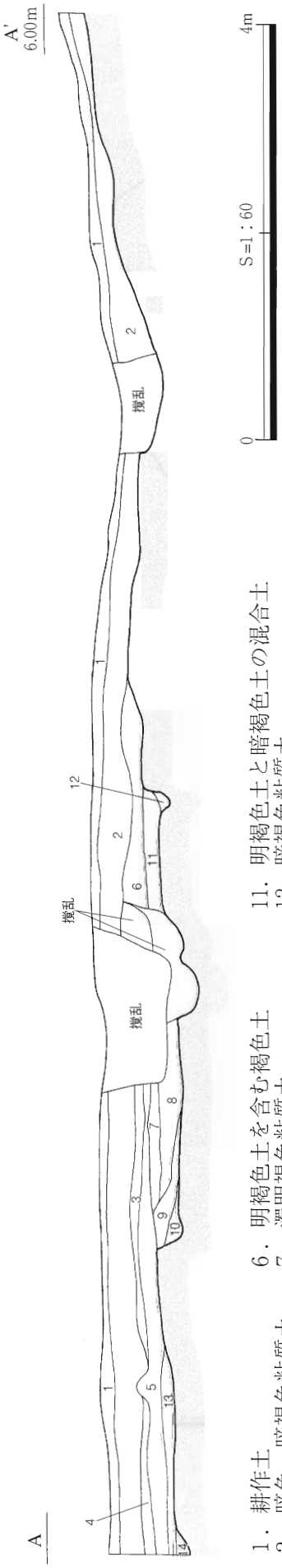
調査対象地の東側約三分の二については地山が浅く、現在果樹園として利用されている場所なので、植付け穴や肥料穴のような土壙の散在が見られた。いずれも遺物は出土しなかったが、地山を攪拌したようなやわらかい埋土が大半を占めていたので、比較的新しい時代のものと考えてよいであろう。

調査地の西寄りでは地山面までが深く、遺物包含層、弥生時代の遺構面が検出された。遺構の種類としては、円形の竪穴建物跡１棟、隅丸方形の竪穴建物跡２棟、溝２条、多数のピットがあった。（第31図）



第30図　二反田遺跡Ｆ区地形測量図

第31図　F区遺構配置図



第32図　Ｆ区北壁土層断面図

基本層序（第32図）

表土（畑の耕作土）の下には第２層褐色～暗褐色粘質土が10～30cmの厚みで堆積していた。第２層中には弥生土器片、奈良～平安頃の須恵器片、土師質土器片等を含んでいた。ＳＩ０２近辺から東側ではこの土層の直下が明褐色粘質土の地山であった。ＳＩ０２付近より西側では第２層の下に褐色系の土層が３層見られ、30cmの厚みを持ち、表土からは60cmの深さで地山に達する。これらの土層には土師器小片を含んでいた。建物跡や溝などの遺構はすべて地山面から検出した。ＳＩ０２、０３付近では遺構埋没後に上部が削平され、その後第６層、第７層が堆積した状況が見て取れる。

ＳＩ01（第33図）

調査区最西端で、全体の約半分弱が検出された円形の竪穴建物跡である。

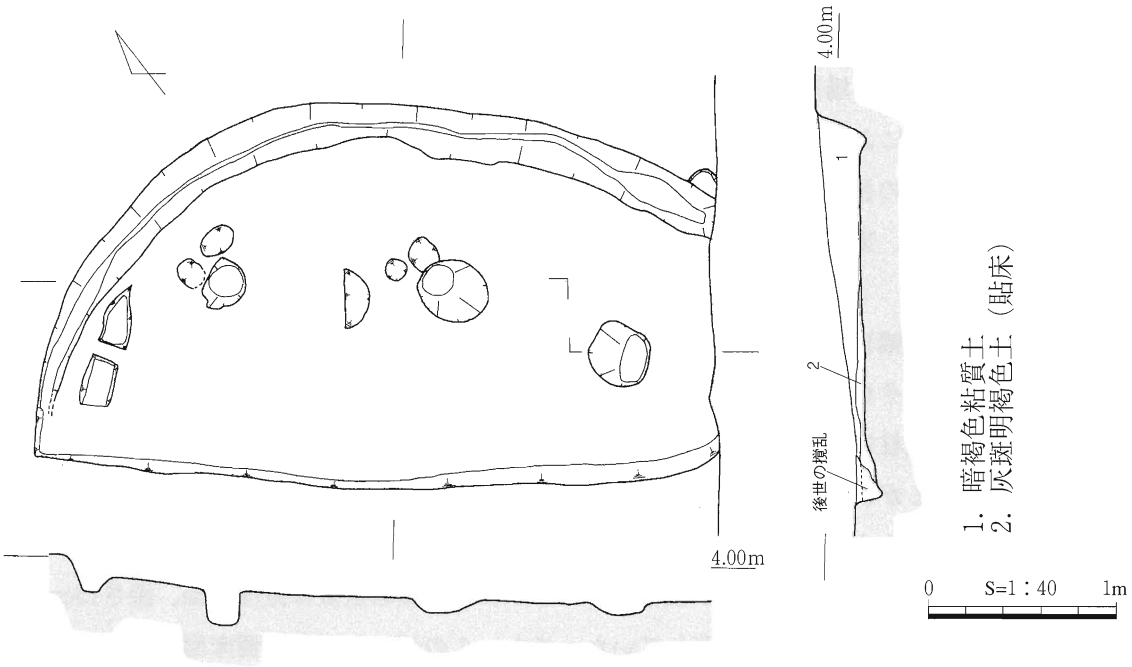
地形的には北東方向が高くなった場所に位置しており、遺構の南西側は水路工事により撹乱を受けていた。規模は上端直径を復原して径約４ｍ前後と推定される。建物跡床面の標高は3.8～3.9mである。

竪穴の周壁は最大20cmの高さで残存しており、壁面に沿って幅18cm、深さ10cm程度の溝が掘られている。

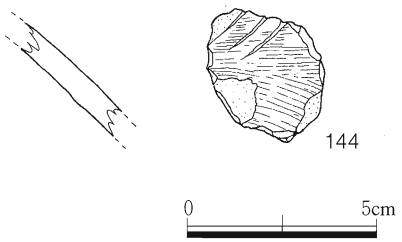
ピットは平面プランでは何ヶ所か確認したが、実際に掘り下げてみると断面が浅い鉢状を呈しており、柱穴らしいものは見当たらなかった。どのような上屋が造作されていたのかは不明である。

遺構内の埋土は暗褐色土１層である。２層の灰斑明褐色土は床面の南西側に見られる地山土を含む土層で、貼床をしていたことがうかがえた。

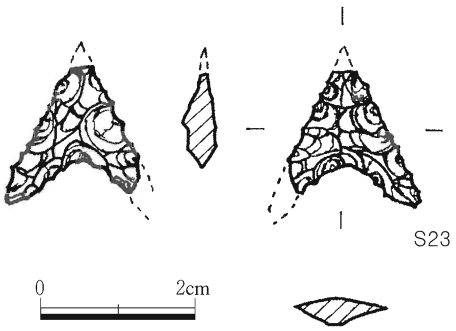
遺物は床面直上から黒曜石製の鏃１点（Ｓ44）が出土した。１は抉りの深い凹基式のもので、先端部と翼の一部を欠損している。やや浮いたレベルの埋土中からは炭や土器の細片も出土したが、土器は風化が著しくて器形を復原できるようなも



第33図　SI01実測図



第34図　SI01出土遺物実測図(1)



第35図　SI01出土遺物実測図(2)

のはほとんど無かった。唯一壺甕類の肩部と思われる小さな破片（144）があり、横方向のハケ目の上に板目による斜め方向の施文がくりかえされるもので、弥生時代後期～古墳時代前期頃の遺物と推定される。

この建物跡の時期については、平面プランが円形であること、床面に密着して石鏃が出ていることからこれまでの調査例により判断すれば弥生時代後期前葉以前のものと考えるのが妥当ではなかろうか。

No.	図版	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		残存率	備考
				口径	底径	器高		内面	外面		
144	18	SI01 暗褐色粘質土	弥生土器 壺甕類	—	—	(3.6)	外：淡褐色 内：淡褐色	風化 調整不明	横方向のハケ目	小片	板目による斜め方向の施文

No.	図版	層位・地区	種別	法量（cm）				材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)		
S44	18	SI01　床面直上	凹基式石鏃	1.8	1.7	0.35	0.8	黒曜石	尖端と翼の一方を欠損

ＳＩ02（第36図）

ＳＩ０１の北東約７ｍ場所に位置する、隅丸方形の竪穴建物跡である。

後世の削平や撹乱によって遺構の残存状況は悪かったが、その形状は何とか現在に残されていた。

規模は、南北方向の長さは北辺が調査区外になるため不明であるが、主柱穴の位置関係から推定４ｍはあると思われ、東西方向の長さは約４ｍである。残存する周壁の最大高は20cmあり、床面の標高は4.8mである。

東側の壁沿いには幅15cm前後、最深８cmの溝が掘られていた。溝は他の辺にも掘られていた可能性が高いが、調査でそれを明確にすることはできなかった。

上屋を構成する主柱は４本で、そのうち３本分の柱穴を検出した。柱穴は直径23cm程度とやや小さめに掘られているが、深さは30cm前後と深くしっかりしたものであった。

中央ピットは床面中央から若干南東寄りで検出した。竪穴建物跡ＳＩ０３と新しい時期の撹乱土壙によって切られており、一部分しか残存していなかった。復原法量は直径40cm、深さ13cm、断面鉢状を呈し、壙内部には炭が厚く遺存していた。また、このピットの南西側床面にも厚い炭の広がりが見られた。

建物跡の埋土は第12層と13層である。12層には弥生土器甕片（148）、土師器片、黒曜石などを含む。13層は壁体溝の埋土である。遺物は出土していない。

遺物は床面直上から鼓形器台（152）が据わったままで出土したほか、甕（145～147）・小形高坏（150）の破片が散乱した状況で出土した。また、床面中央の炭の上から壷（149）の口頸部と高坏の坏部（151）が出土した。

145～147は甕の口頸部片である。いずれも複合口縁のもので、口縁部はやや反りながら長く伸び、端部はうすく引き出されるか丸く終わる。複合部の稜は水平に突出する。149は複合口縁を持つ壺の口頸部である。口縁部はやや反り気味に伸び、複合部は水平に突出する。150は小ぶりの坏部に大きく開く脚部が付く高坏である。脚部には円孔を穿つ。151は高坏の坏部で、体部は丸みを持ちながら口縁部につながり、端部近くでわずかに外反する。坏底部には円盤が充填され、円盤外面中央には刺突痕が見られる。152の鼓形器台は完形に復元できたもので、上台径23.4cm、筒部径12cm、底径19cm、器高11.6cmを測る。縮約した筒部を持ち、筒部内面は稜をなす。稜線以下にはヘラケズリが施される。器壁は薄く、上台端部は外反する。

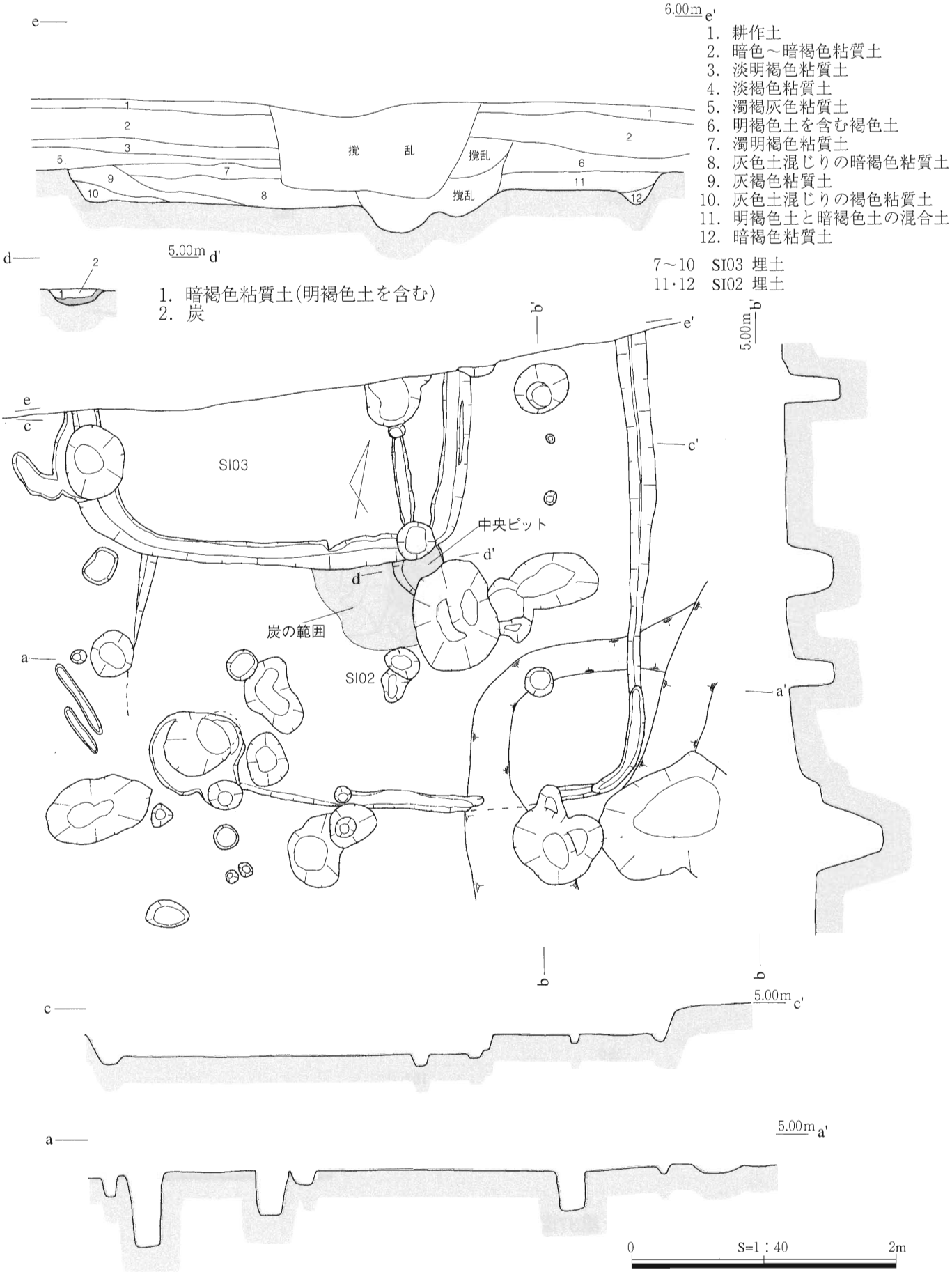
この建物跡の時期は、床面出土遺物の特徴から草田５期に併行し、弥生時代後期後葉と考えられる。

ＳＩ03（第36図）

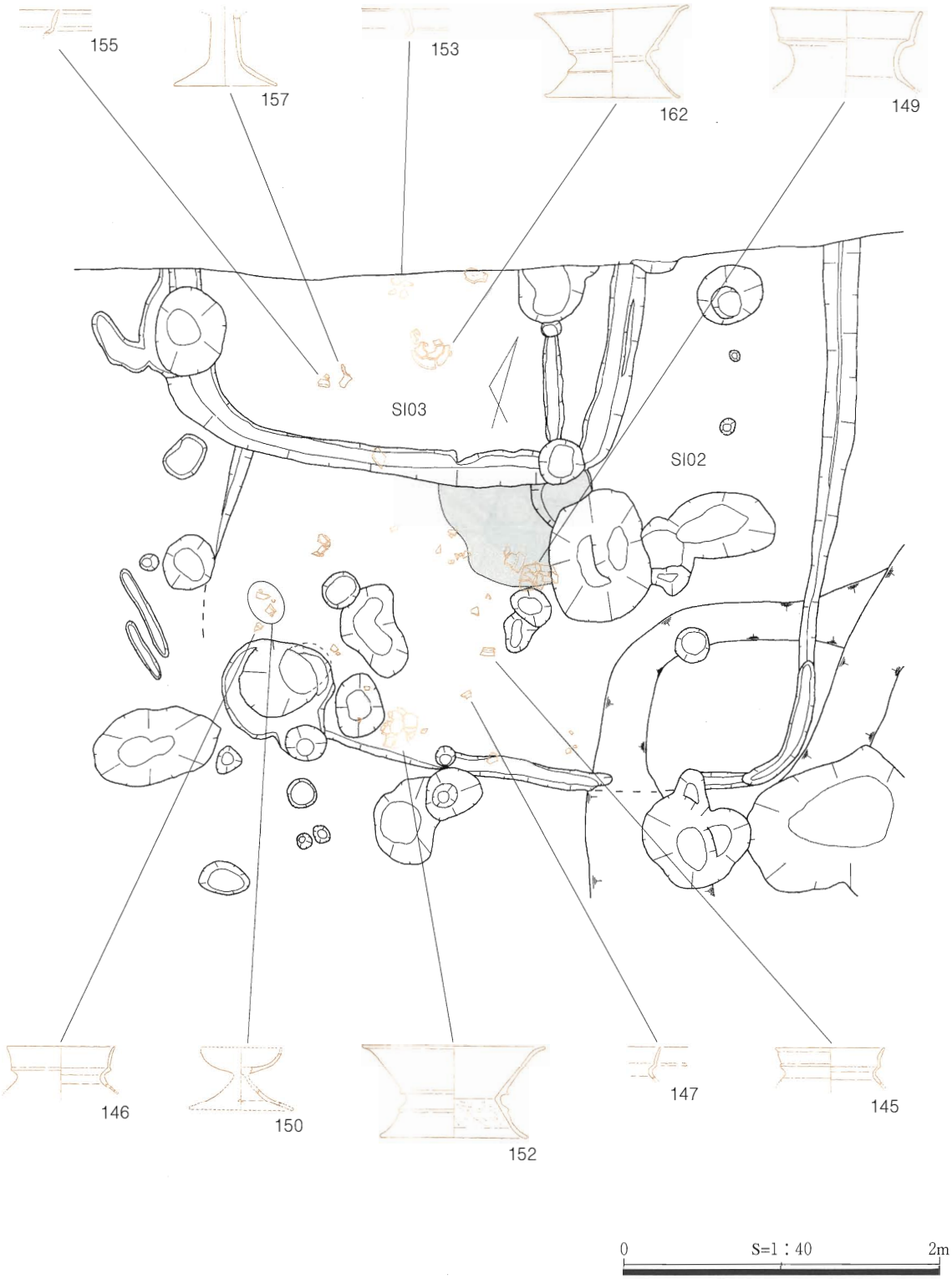
ＳＩ０２の北西の床面を約15cm掘り下げて造られた、隅丸方形の竪穴建物跡と思われる。

規模は、東西の上端辺が３ｍと短いものであるが大半が調査区外にあるため全体の形状は定かではない。床面には壁に沿って幅16cm前後、深さ４cm前後の溝が掘られている。また東壁近くにも幅10cm、深さ２～３cmの浅い溝が見られた。柱穴は検出できず、どのような上屋があったのかは不明である。

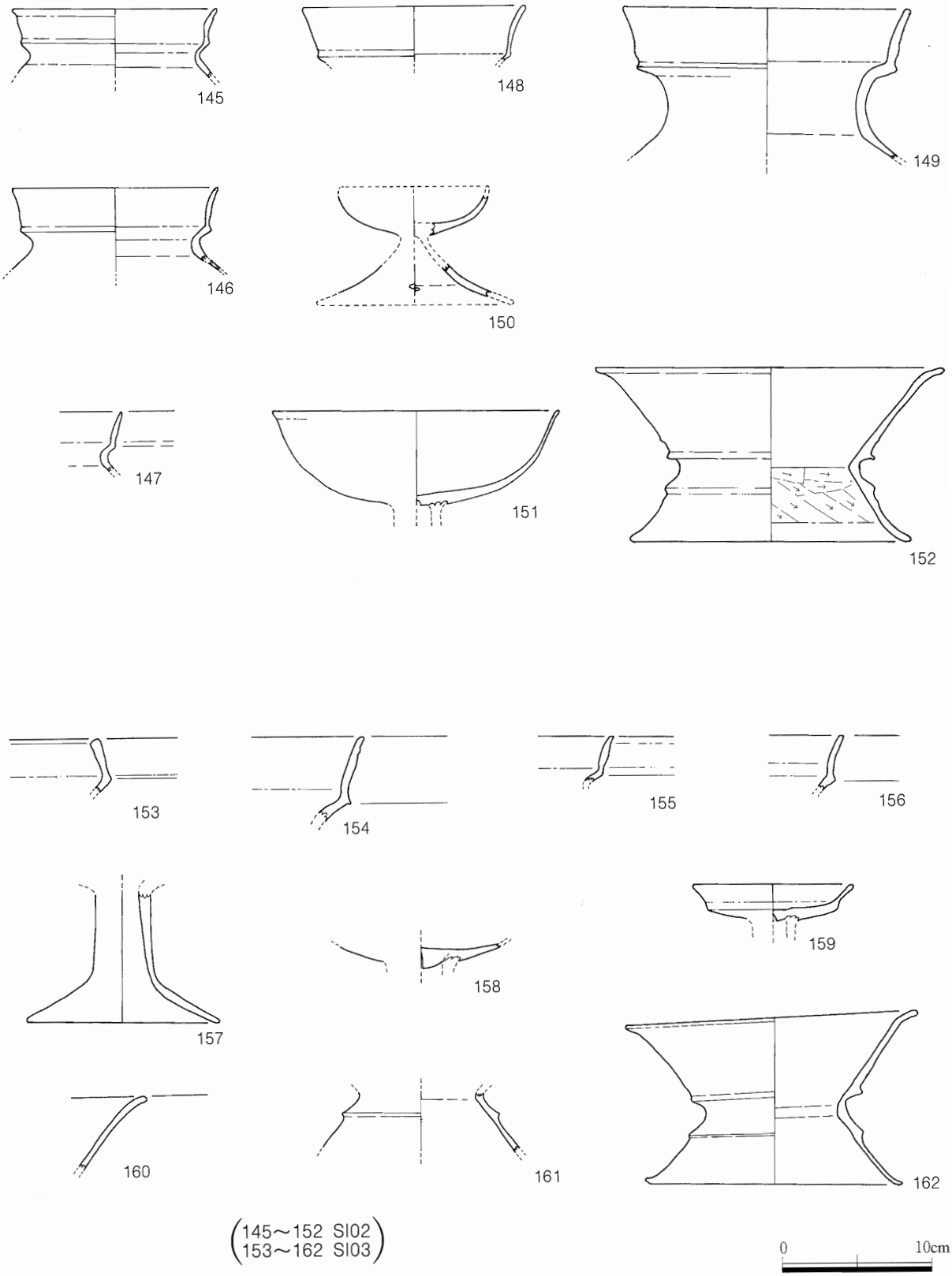
建物跡の埋土は第７層～10層である。調査区北壁際における建物跡東壁の立ちあがりは後世の撹



第36図　SI02・03実測図



第37図　SI02・03遺物出土状況



第38図　SI02・03出土遺物実測図（S＝1：4）

乱により失われ、堆積土を明示できなかった。

遺物は床面直上から鼓形器台（162）が上下逆転して据わった状況で出土したほか、壺や甕の口縁部片（153、155）、高坏の脚部（157）も出土した。建物跡埋土中からは壺口縁部片（154）、甕口縁部片（156）、高坏坏部片（16）、鼓形器台片（160、161）などが出土した。また、調査区内に水が流入するのを防ぐため調査区外に排水溝を掘った際、ＳＩ０３のエリア内と思われる所から小形器台（159）が出土したが出土層位は不明である。

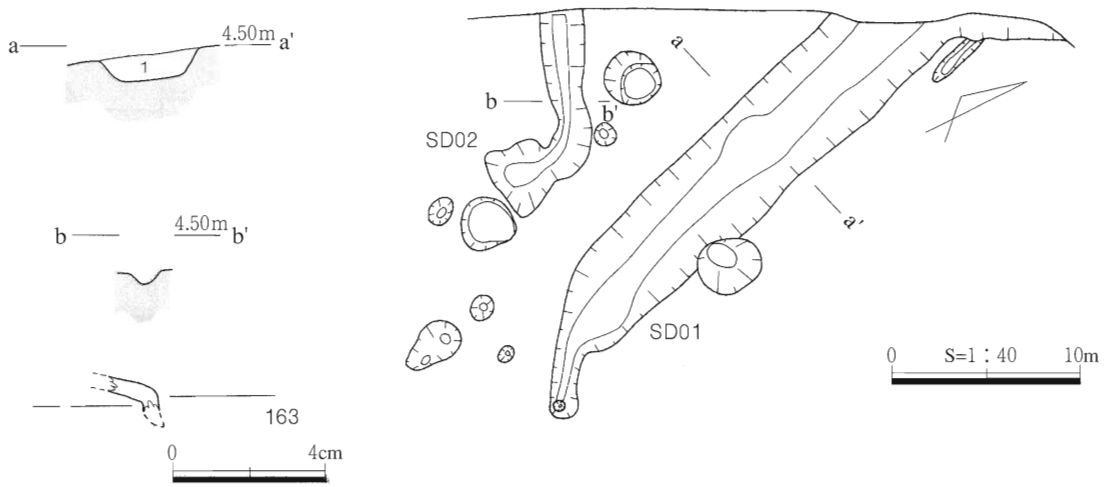
153は口縁部が内傾する複合口縁の壺で、複合部は水平に突出し、口縁端部は内傾する面を持つ。154も複合口縁の壺口縁部であるが、口縁部は外傾して長く伸び、端部は薄く引き出され、複合部は水平に突出する。155、156は複合口縁の甕で、口縁部は反り気味に伸び、端部が尖って終わるものと丸く終わるものがある。157は円筒状の筒部から「ハ」の字状に広がる高坏脚部である。158は高坏坏部の破片で、外面に刺突痕をもつ円盤が充填されている。159は小形器台の坏部で、体部と口縁部の境は稜をなし、口縁部は外反して伸びる。底部には刺突痕を持つ円盤が充填されている。160～162は鼓形器台である。160は上台部、161は筒部から下台部の破片、162は完形に復元できたもので、上台径19.5cm、筒部径9.4cm、底径17.1cm、器高11.6cmを測る。筒部は縮約し、内面に幅7mmほどの面を持つ。風化により調整は観察できない。

この建物跡の時期は、床面の出土遺物の特徴から草田５期併行期の弥生時代後期後葉と考えられる。

ＳＤ01（第39図）

ＳＩ０３から西へ３ｍの地点で検出した幅50cm強、深さ10cm前後の浅い溝で、やや曲がって調査区外に続いている。底面のレベルは北が高く南が低い。炭を多く含む埋土中には須恵器小片１片（21）を含む細かい土器破片が多数混入していた。21は口縁端部の下垂する坏蓋片と考えられるものである。

この溝の時期は、上記の須恵器１片を重視すれば奈良時代以降に機能していたと考えられるが、上層の第５層や13層に須恵器が全く出土していないことから、根や小動物の撹乱による混入物の可



第39図　SD01・02実測図・出土遺物実測図（S＝1：4）

能性も考えられ、時期不明の遺構としておく。

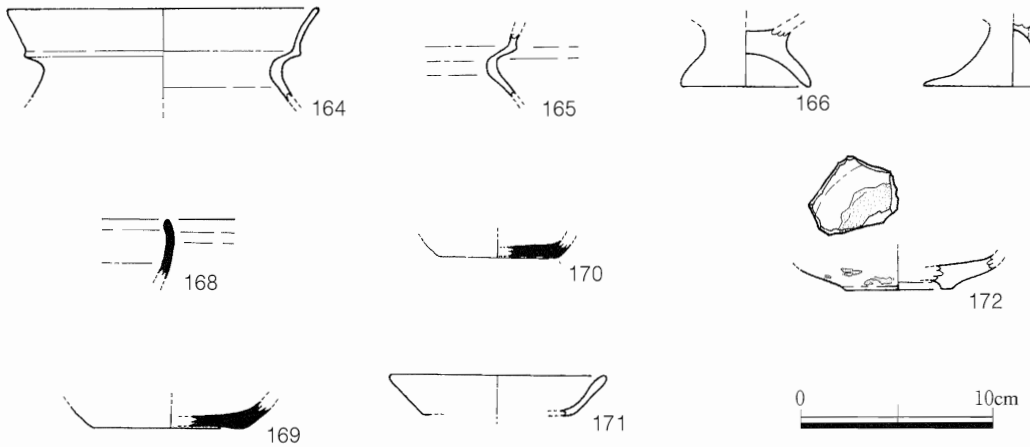
ＳＤ02（第39図）

ＳＤ０１西側で検出した幅25cm前後、深さ10cmの溝で、調査区外に続いている。遺物は出土しなかった。

No.	図版	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		残存率	備考
				口径	底径	器高		内面	外面		
145	18	SI02 床面	弥生土器 甕	(13.6)	－	(4.3)	外:白褐色 内:白褐色	胴部：ケズリ	風化 調整不明	1/4	
146	18	SI02 床面	弥生土器 甕	(13.6)	－	(4.9)	外:淡褐色 内:淡褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	1/6	
147	18	SI02 床面	弥生土器 甕	－	－	(4.0)	外:淡褐色 内:淡褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	小片	
148	18	SI02 埋土	弥生土器 甕	(14.5)	－	(4.0)	外:明褐色 内:淡褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	1/8	
149	18	SI02 床面	弥生土器 壷	19.1	－	(10.0)	外:灰白色 内:灰白色	口縁:横ナデ	口縁:ヨコナデ	口縁部 1/2残存	
150	18	SI02 床面	弥生土器 高不	(10.0)	－	－	外:白褐色 内:白褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	受部1/4 脚部2/3	脚部に円孔
151	18	SI02 床面	弥生土器 高不	(19.0)	－	(6.3)	外:淡明褐色 内:淡明褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	2/3	
152	18	SI02 床面	弥生土器 鼓形器台	23.4	19.0	11.6	外:淡褐色 内:灰褐色	下台部ヘラケズリ、ヨコナデ	風化 調整不明	2/3	
153	19	SI03 床面	弥生土器 壷	－	－	(3.6)	外:黒色、淡橙褐色 内:淡灰色	風化 調整不明	風化 調整不明	小片	
154	19	SI03 埋土	弥生土器 壷	－	－	(5.6)	外:白褐色 内:白褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	小片	
155	19	SI03 床面	弥生土器 甕	－	－	(3.0)	外:淡褐色 内:淡褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	小片	
156	19	SI03 床面	弥生土器 甕	－	－	(3.6)	外:淡褐色 内:淡褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	小片	
157	19	SI03 床面	弥生土器 高不	－	(12.9)	8.8	外:白褐色 内:白褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	1/3	
158	19	SI03 埋土	弥生土器 高不	－	－	(1.5)	外:白褐色 内:淡灰色	風化 調整不明	風化 調整不明	1/6	充填部外面に刺突痕
159	19	SI03内 層位不明	弥生土器 小型器台	10.8	－	(2.3)	外:白褐色 内:白褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	4/5	充填部外面に刺突痕
160	19	SI03 埋土	弥生土器 鼓形器台	－	－	(4.8)	外:淡褐色 内:白褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	小片	
161	19	SI03 埋土	弥生土器 鼓形器台	－	－	－	外:淡褐色 内:灰白色	風化 調整不明	風化 調整不明	小片	
162	19	SI03 床面	弥生土器 鼓形器台	19.5	17.1	11.6	外:淡褐色 内:淡褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	1/2	
163	－	SD01 埋土	須恵器 蓋	－	－	(1.4)	外:灰色 内:淡灰色	風化 調整不明	風化 調整不明	細片	

遺構外の出土遺物（第40図）

164は調査区外の排水溝掘削時に出土した複合口縁の甕で、口縁部は外反して伸び、端部は薄く引き出される。165も同様のものと思われるが、口縁端部を欠損している。166は低脚坏の脚部と思われるもので、坏底部の器壁は厚く、「ハ」の字状にふんばる。165、166は撹乱土壙ＷＰ73（第31図）から出土した。167は土師器の高坏脚部で、脚高は低いが脚端に向かって大きく開く。168は須恵器の坏口縁部片で、内湾して端部に至り、内面の端部近くが肥厚する。169は回転糸切り痕のある須恵器底部片である。これら167～169は第2層褐色粘質土から出土した。170は撹乱土壙ＳＫ０１（第31図）から出土した須恵器坏底部片、171はＳＩ０２東側の撹乱土壙から出土した土師質土器皿で、底部には回転糸切り痕が見られる。172は表採した肥前陶器の底部片で、砂目積みの痕跡がある。高台は削り出され、露胎である。畳付には糸切り痕が残る。施柚部分は乳白色を呈する。以上の遺物の時期は、164～166は弥生後期後葉、167は古墳時代、168～170は奈良・平安時代、171は中世、172は近世初め頃のものと思われる。



第40図　遺構外出土遺物実測図（S＝1：4）

No.	図版	層位・地区	器種	法量（cm）			色調	調整		残存率	備考
				口径	底径	器高		内面	外面		
164	20	遺構外 排水溝掘削時	弥生土器 甕	(16.4)	－	(4.7)	外:灰白色 内:灰白色	風化 調整不明	風化 調整不明	1/8	
165	－	遺構外 撹乱土壙	弥生土器 甕	－	－	(3.4)	外:淡褐色 内:淡褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	小片	
166	20	遺構外 撹乱土壙	弥生土器 底脚坏	－	(6.7)	(2.9)	外:淡褐色 内:淡褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	3/4	
167	20	遺構外 褐色粘質土	土師器 高坏	－	(9.2)	(4.1)	外:灰褐色 内:橙褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	1/2	
168	20	遺構外 褐色粘質土	須恵器 坏	－	-	(3.2)	外:灰色 内:灰色	風化 調整不明	風化 調整不明	小片	
169	20	遺構外 褐色粘質土	須恵器 坏	－	(8.0)	(1.4)	外:灰色 内:灰色	回転ナデ ナデ	底部回転糸切り	1/4	
170	20	遺構外 撹乱土壙	須恵器 坏	－	(6.2)	(1.0)	外:灰色 内:灰色	回転ナデ	底部回転糸切り	1/5	
171	20	遺構外 撹乱土壙	土師質土器 皿	(11.3)	－	(2.2)	外:淡褐色 内:淡灰褐色	回転ナデ	回転ナデ、底部回転糸切り	1/8	
172	20	遺構外 表採	肥前陶器 底部	－	(5.6)	(1.8)	外:乳白色 内:褐色	砂目積痕 施釉	回転ナデ、畳付に糸切り痕	1/5	釉は乳白色

第３節　小　　結

二反田遺跡Ｆ区では、弥生時代の竪穴建物跡３棟分を検出した。２棟は弥生時代後期後葉のもの、１棟はそれらよりも遡る後期前葉以前のものと考えられる。

円形の竪穴建物跡ＳＩ０１は、床面から土器が出土していないため確実な時期は不明であるが、平面プランが円形であること、床面直上から石鏃が出土していることからみて、弥生時代後期後半まで下る可能性は低いであろう。

隅丸方形の竪穴建物跡ＳＩ０２は、４本柱と中央ピットを備える典型的な竪穴建物跡であった。広い炭の広がりを確認し、床面直上からは草田編年５期併行の土器が出土したことにより、弥生時代後期後葉の住居であったと考えられる。竪穴建物ＳＩ０３は、ＳＩ０２の床面から掘り込まれた、規模の小さな竪穴建物である。２棟の建物跡の関係を遺物面から観察するため、床面から出土した土器、特に両者から完形で出土した鼓形器台を観察したところ、双方にはほとんど形状的な違いを見出すことができなかった。したがって、ＳＩ０２がうち捨てられた後、ＳＩ０３はあまり時を経ずして、ほぼ同じ場所に建替えがおこなわれたことが明確となった。

二反田遺跡Ａ～Ｅ区では、非常に幅広い時期の大量の遺物が出土していることから、Ｆ区でも幅広い時期の遺物・遺構が検出できるのではないかと期待されたが、上記の建物遺構以外に時期の確定できる遺構はなく、包含層の出土遺物も少量にとどまった。Ｆ区の東側では浅い堆積土の下から地山が一度削平されたような状況で出土したことから、もしそこに幅広い時代の遺構が存在していたとしてもそれは既に失われてしまっているであろう。（瀬古）

＜参考文献＞

島根県鹿島町教育委員会『南講武草田遺跡』1992年

第５章　総　　括

調査地は春日町田原谷池の西側に隣接する水田と北側に続く畑の中に位置する。

現況が水田であったＡ～Ｅ区の調査では、遺構として円形土壙２基とピット群、自然流路９条を検出し、縄文後期を初源として、中世に至るまでの土器類を中心とした広範な遺物が多量に出土した。堆積層からは少なくとも中世以降に水田を造成した状況が見られ、おそらくこの時に上部を削平された円形土壙やピット群などの遺構は、機能していた時期の判断が困難であった。また、調査区南寄りを東西に走る自然流水路埋没後、付近一帯に形成された弥生終末期～古墳時代中期の遺物包含層からは、摩滅の進んだ土器類が多量に出土し、周辺に多くの遺構が埋まっていることが推測された。

このことは、開発範囲の拡大により追加調査したＦ区で証明されることになった。Ｆ区はＡ～Ｅ区の北側にある緩傾斜の畑の一部に設けられた調査区で、弥生時代終末期の竪穴建物跡２棟とそれよりも遡る時期の円形竪穴建物跡１棟が検出されたのである。弥生終末期の竪穴建物の床面では鼓形器台が据えられた状態で出土した。鼓形器台は弥生後期～古墳前期の埋葬に関わる遺構で出土することが広く知られているが、住居跡の中で出土する例も安来市の塩津丘陵遺跡群では多くあるようである。他に、包含層の出土遺物としては古墳時代～中世の土器類が若干見られた。

田原谷池については、明治10年の出雲国島根郡春日邨誌に「東西壱町二十四間南北壱町七間」（内田映『法吉村誌』より）とあり、現在の東西長（約137m）から見ると現在よりも若干大きな用水池であったらしい。原始・古代の状況は記録もなく窺い知ることはできないが、今回の調査区で出土した遺物の量や遺存状況から見て、上流側にある田原谷池周辺で生活の痕跡が発見される可能性は高く、今後の調査が期待される。（瀬古）

＜参考文献＞

島根県教育委員会『塩津丘陵遺跡群』1998年
内田　映『法吉村誌』昭和63年

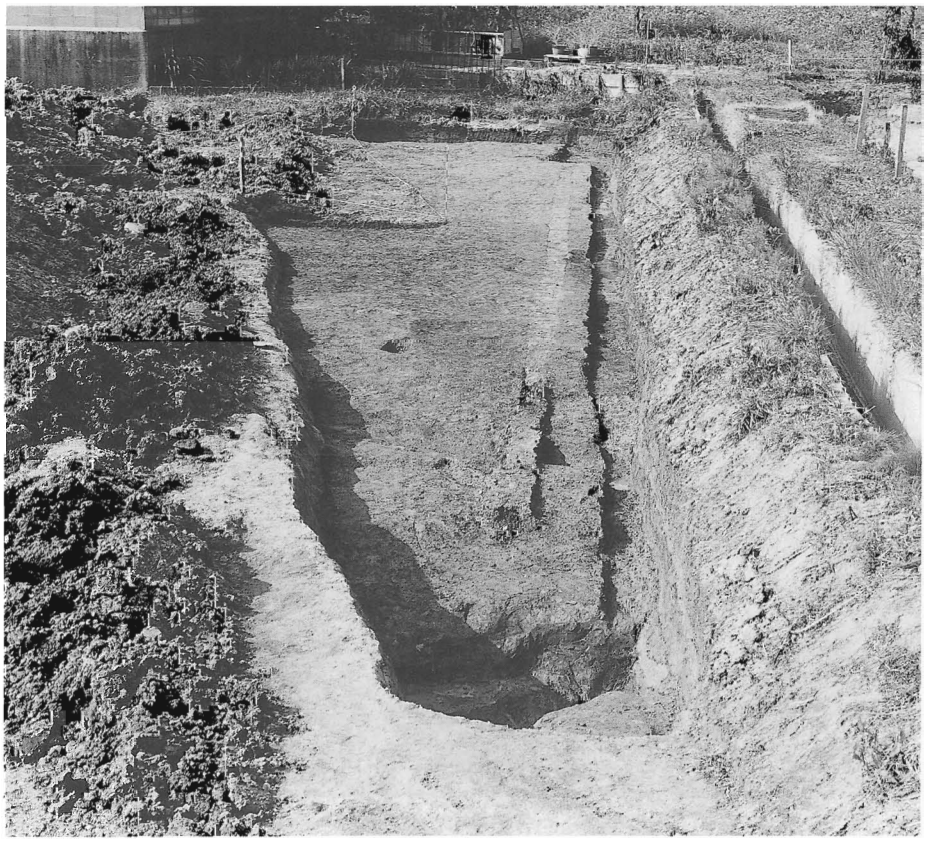
図　　版

1．A～D区調査前全景（南東から）

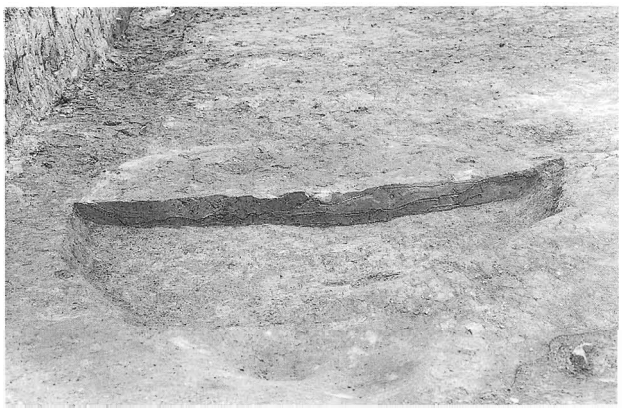
2．A～D区完掘全景（南東から）

図版２　Ａ～Ｅ区

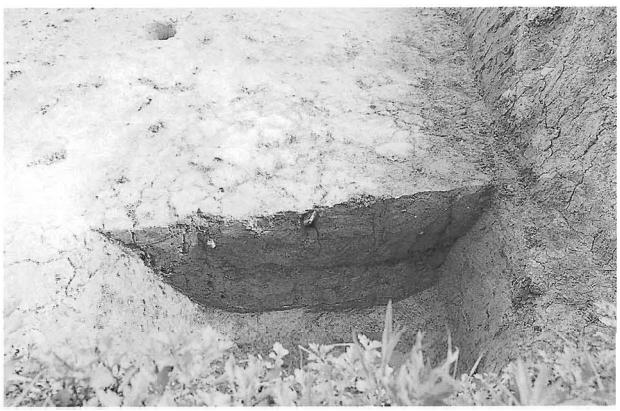
１．Ａ～Ｄ区完掘全景（南から）



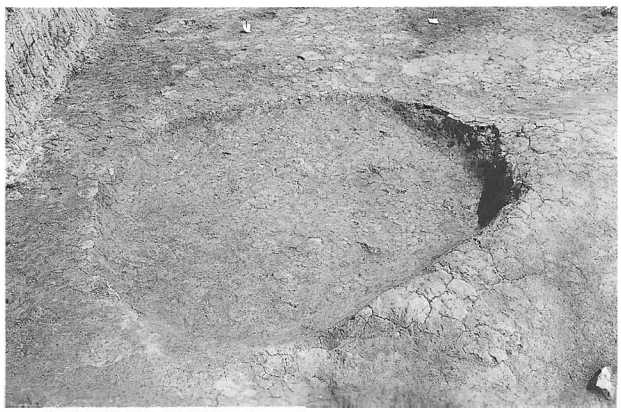
２．Ｅ区完掘全景
（南から）



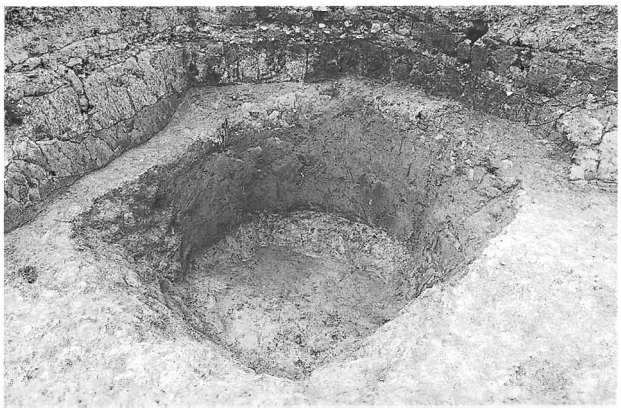
1．ＳＫ０１土層断面（南から）



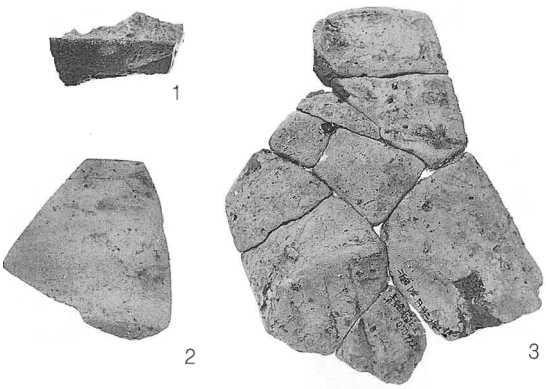
4．ＳＫ０２土層断面（北から）



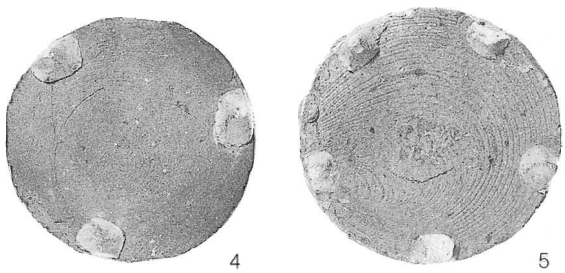
2．ＳＫ０１完掘状況（南から）



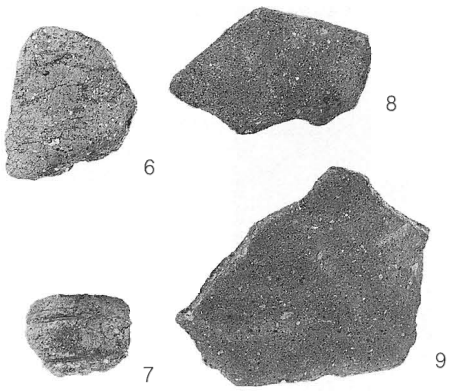
5．ＳＫ０２完掘状況（南東から）



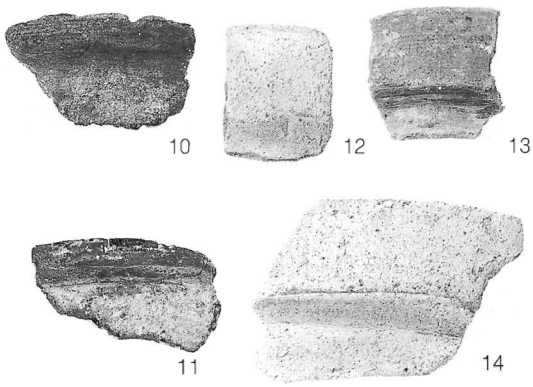
3．ＳＫ０１出土遺物



6．ＳＫ０２出土遺物



7．ＳＤ０１出土遺物



8．ＳＤ０２・０４出土遺物

図版４　Ａ～Ｅ区

１．ＳＤ０１～ＳＤ０８
完掘状況（東から）

２．ＳＤ０１～ＳＤ０８
完掘状況（西から）

３．ＳＤ０１　Ａ－Ａ'
土層断面
（西から）

1．SD01　D区西壁面
土層断面
（北東から）

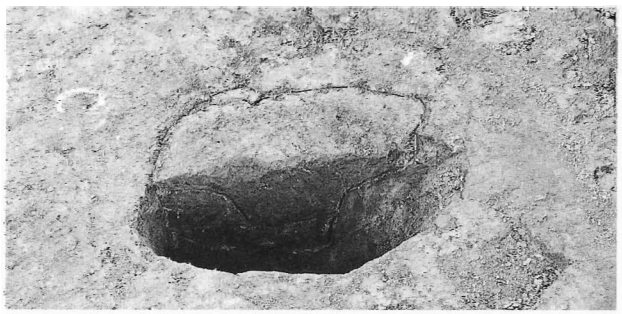
2．SD02完掘状況
（南東から）

3．SD02土層断面（南西から）

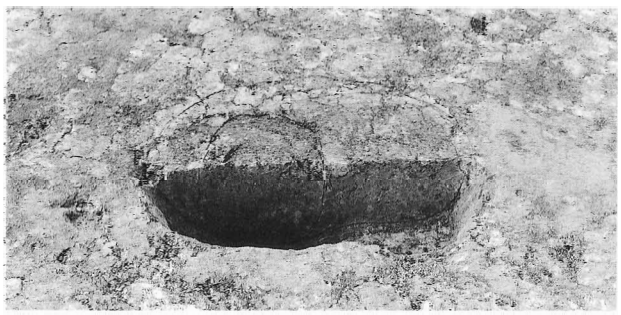
4．SD03・04完掘状況（西から）

図版６　Ａ～Ｅ区

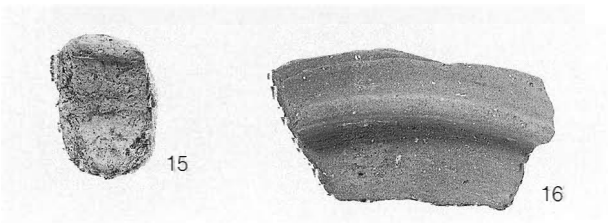
１．Ｄ区ピット完掘状況（北西から）



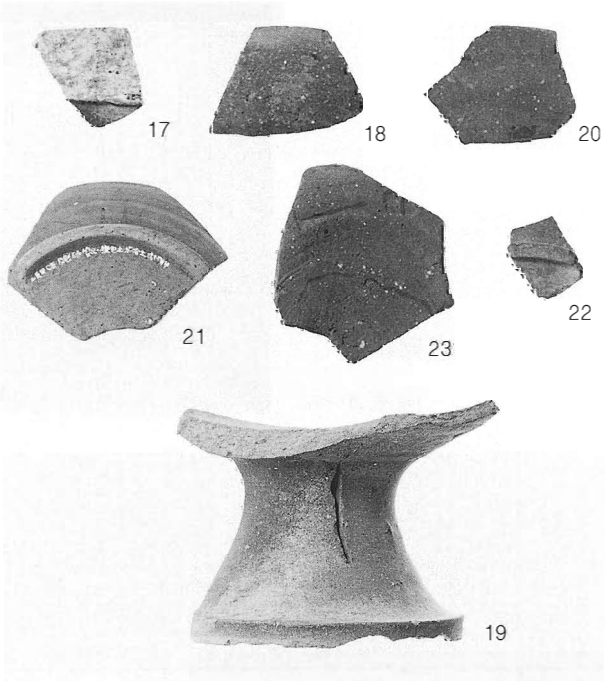
２．Ｐ10土層断面（南から）



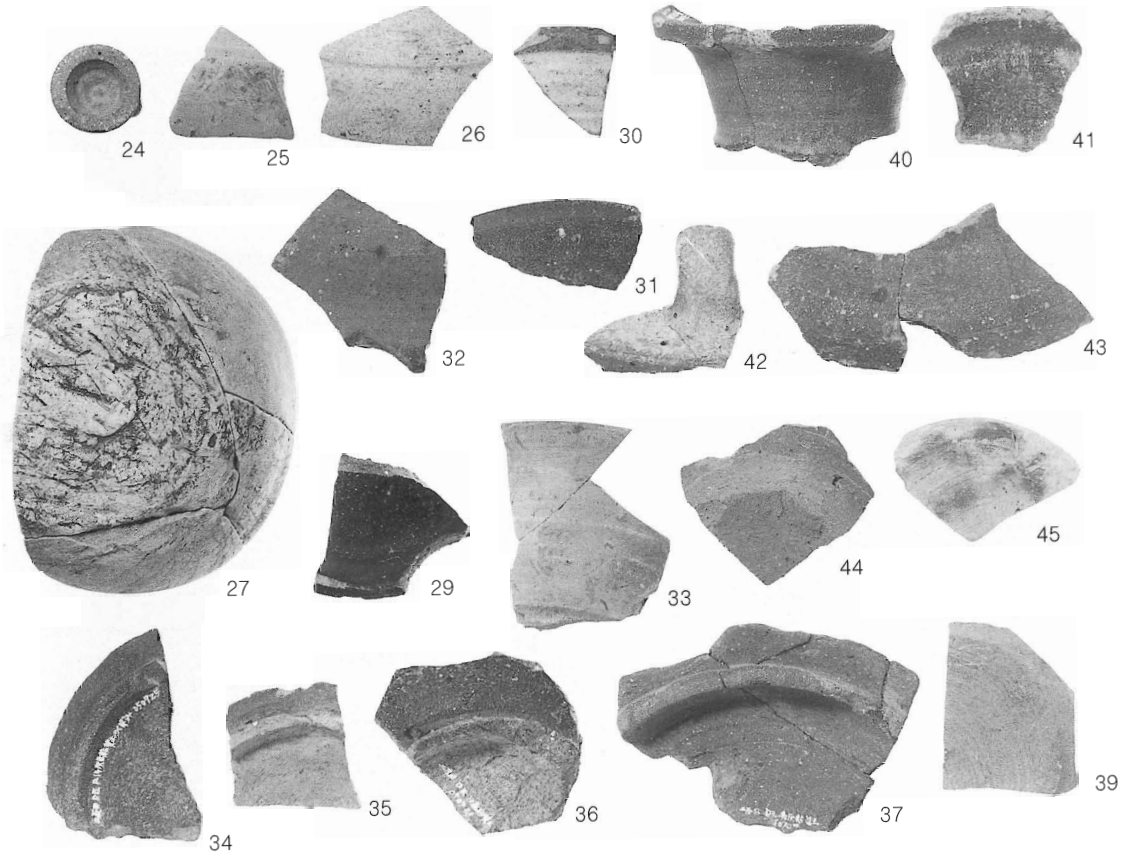
３．Ｐ13土層断面（南から）



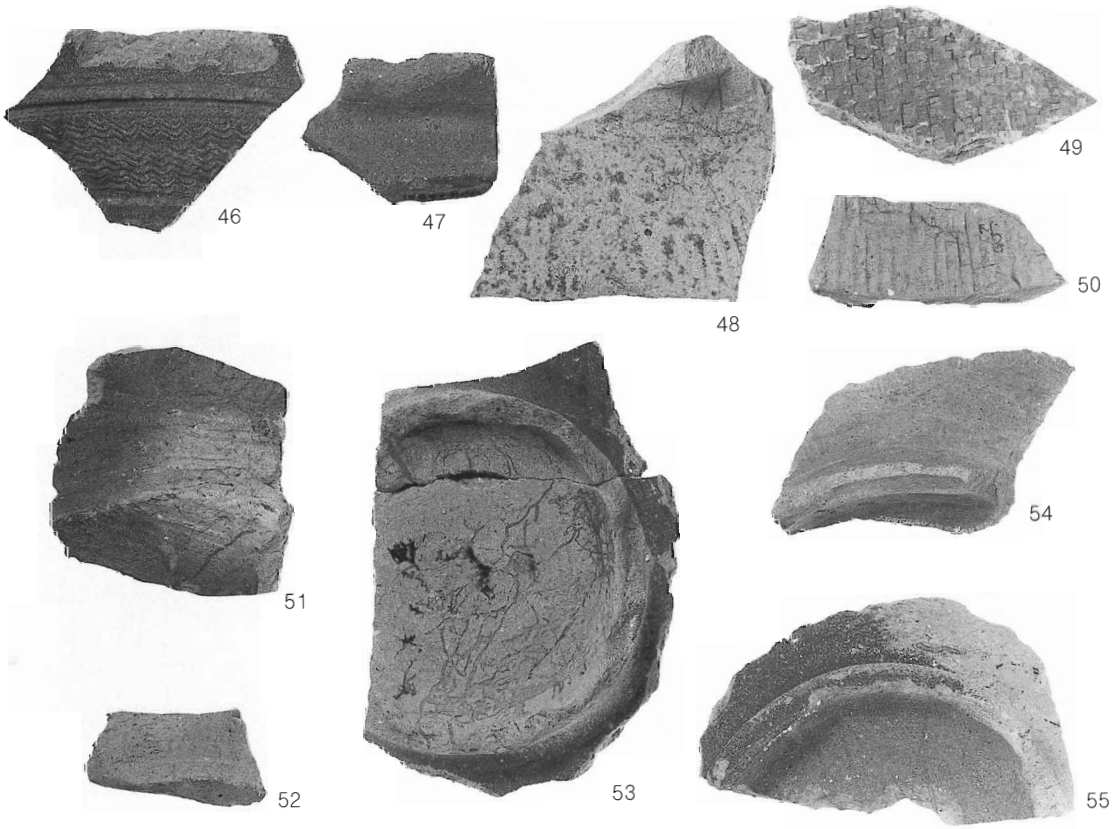
４．ピット出土遺物



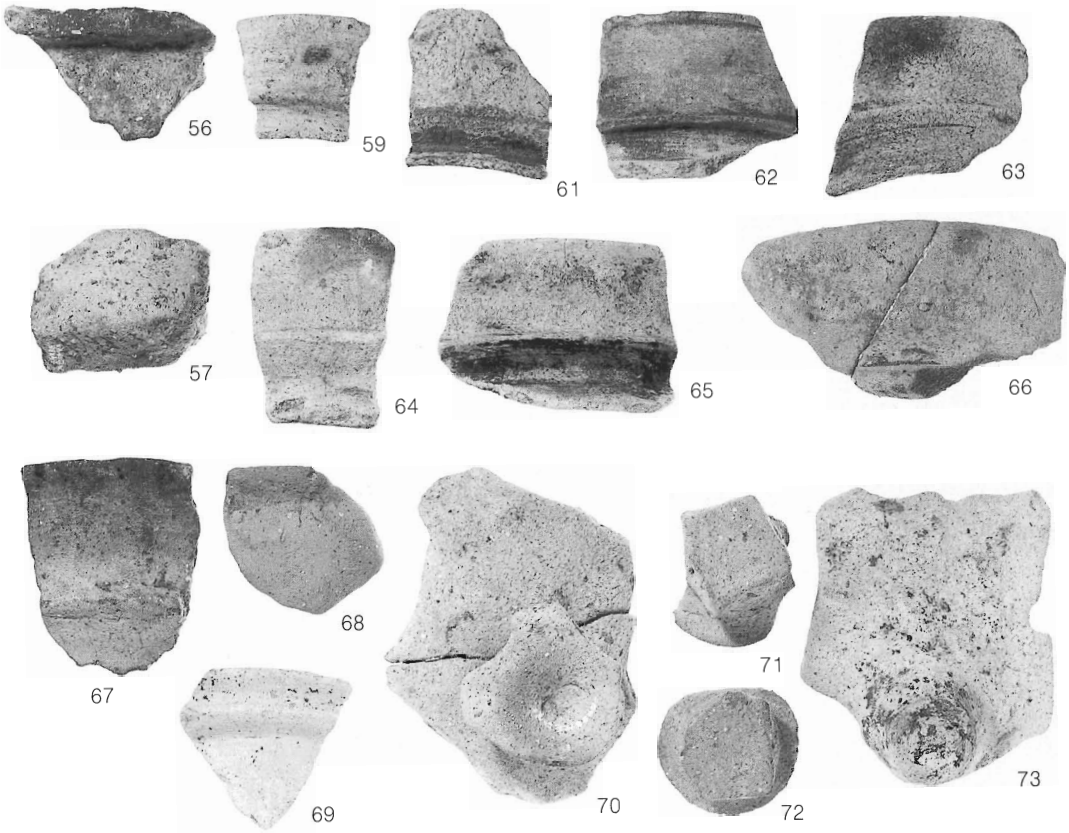
５．７層出土遺物



1．10層出土遺物（1）

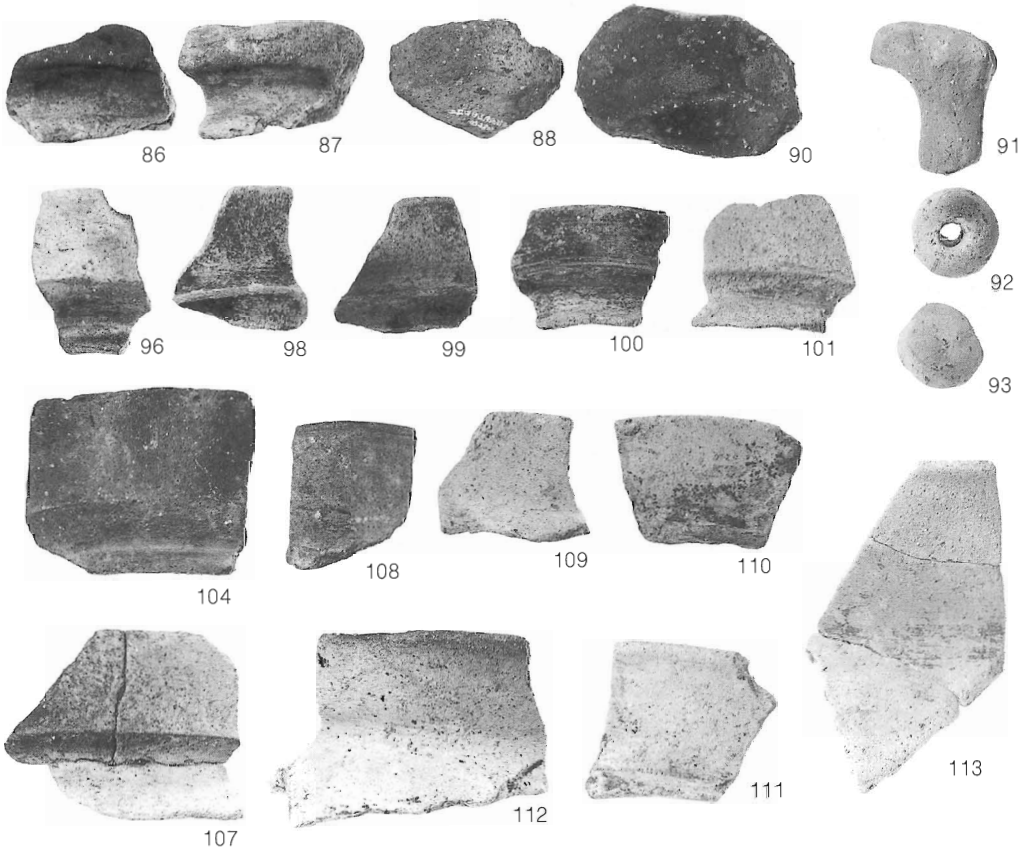


2．10層出土遺物（2）

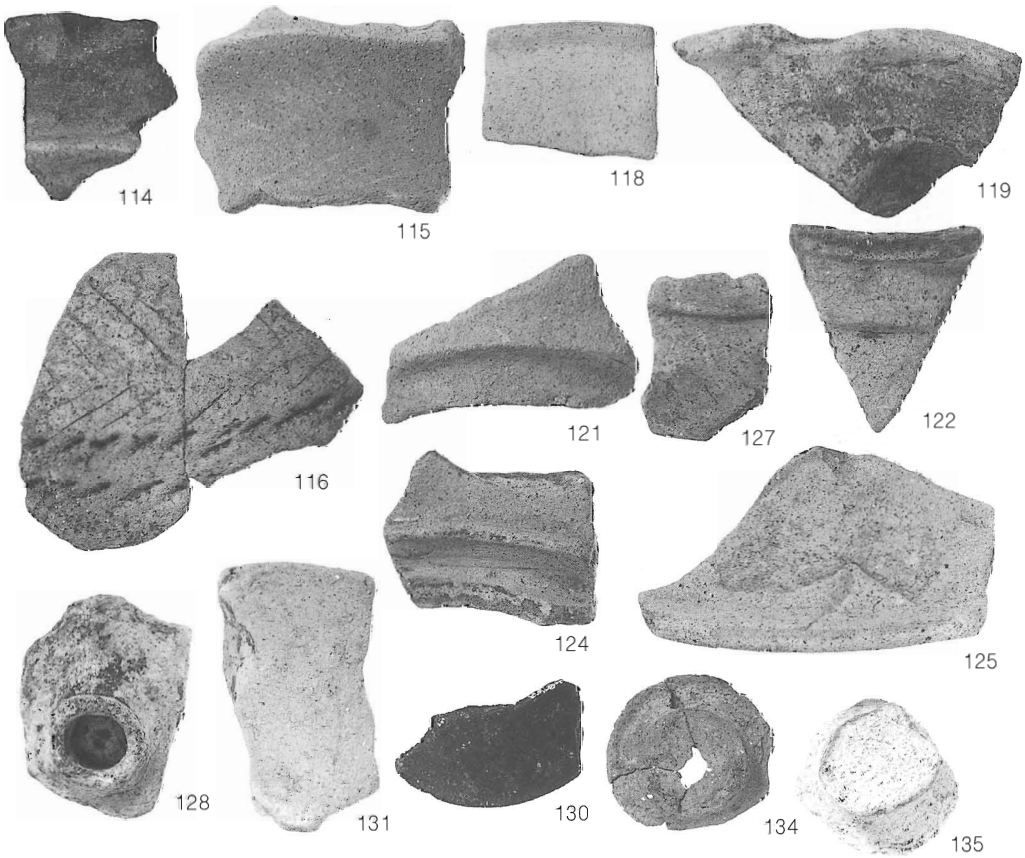


１．10層出土遺物（3）

２．10層出土遺物（4）

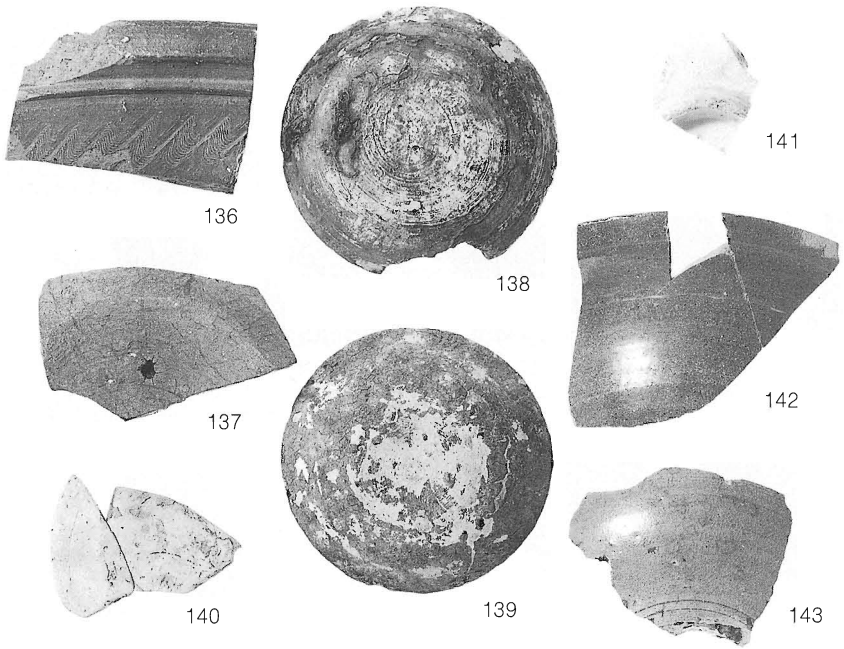


1．12・13層出土遺物（1）

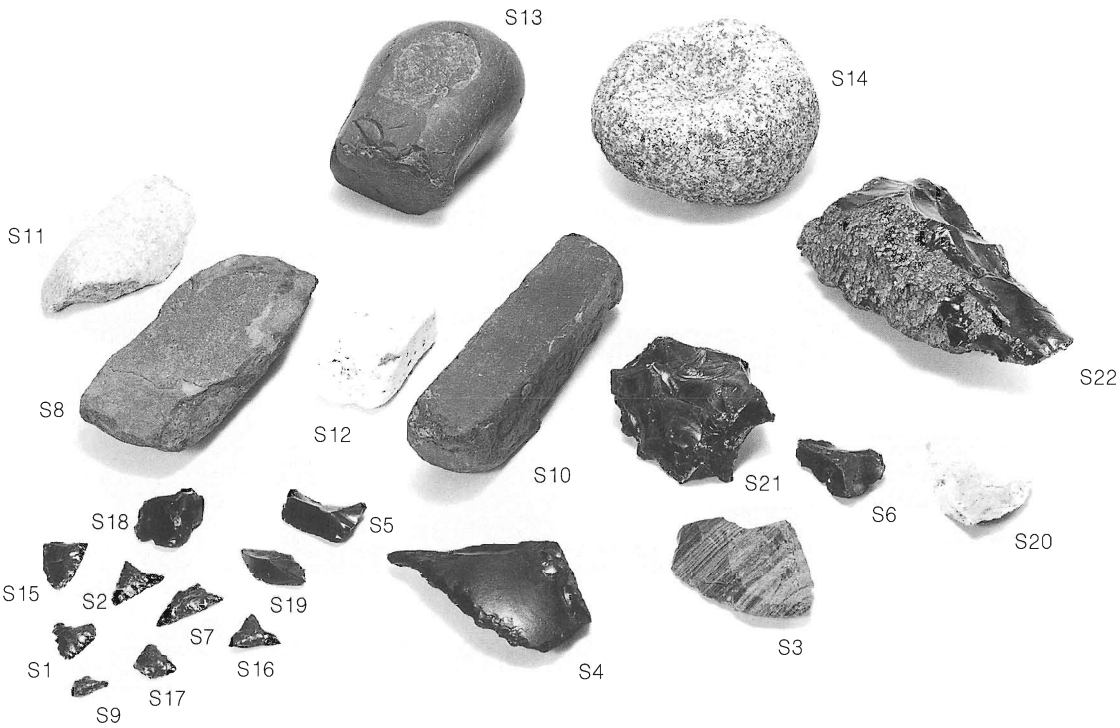


2．12・13層出土遺物（2）

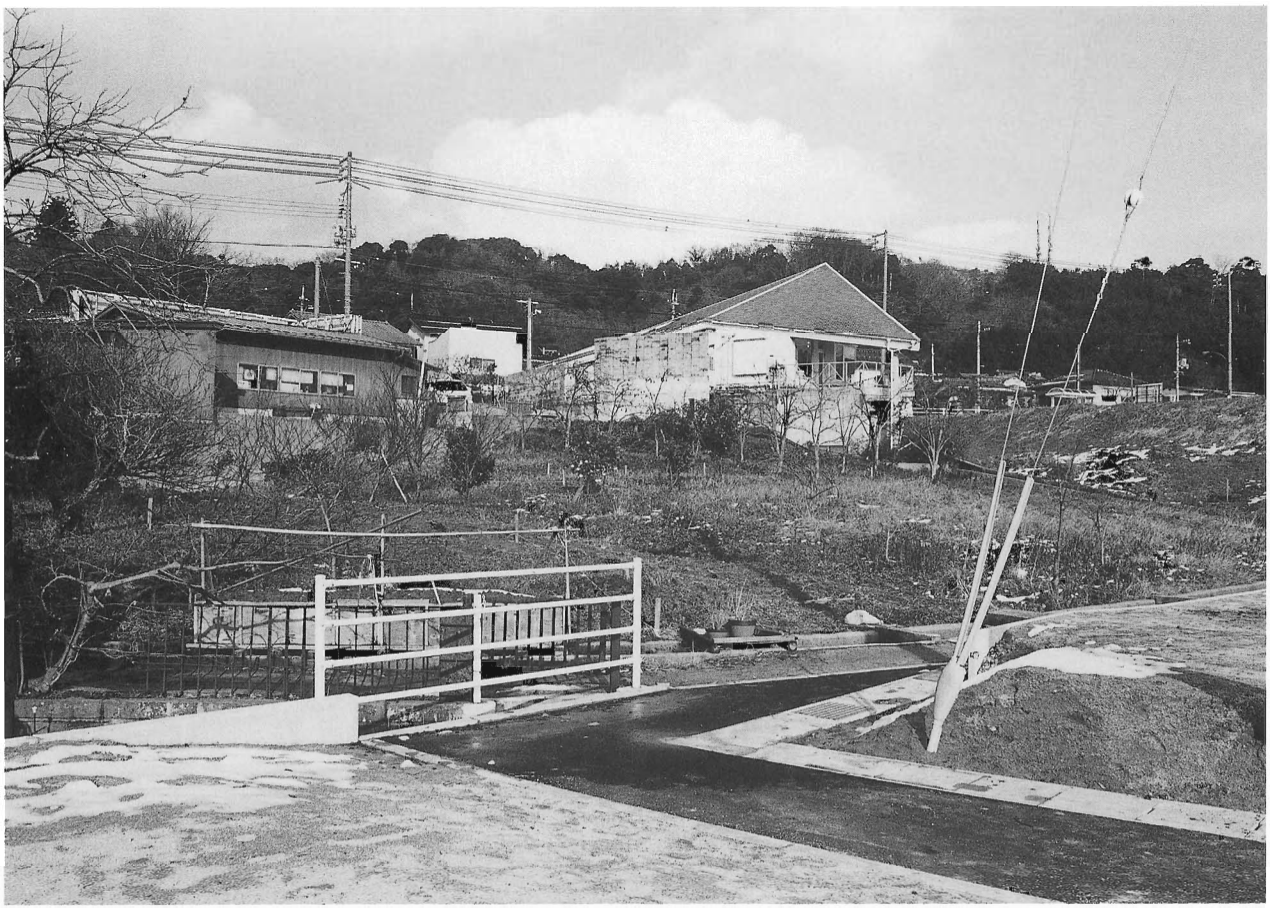
図版10 A～E区



1．遺構外出土遺物



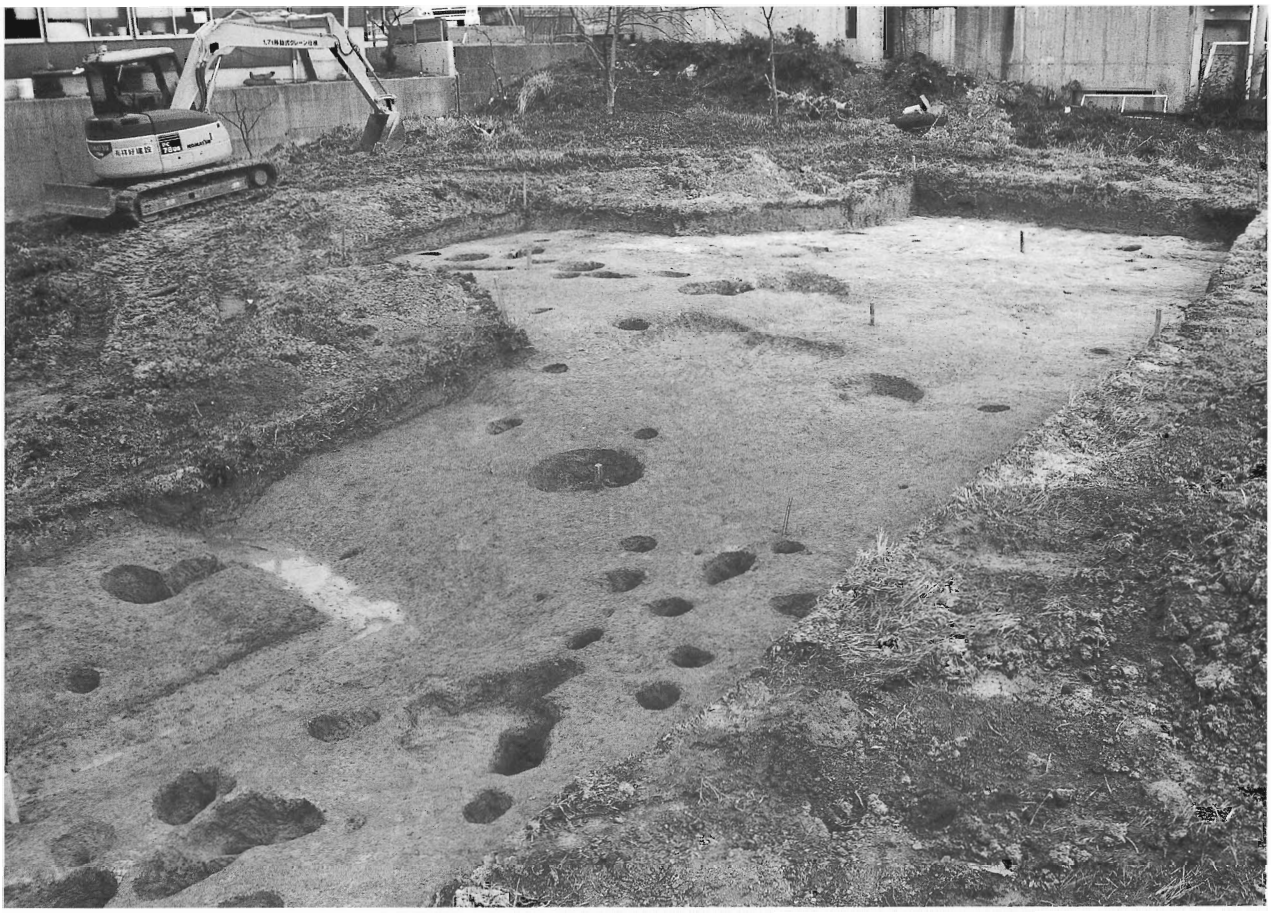
2．A～E区出土石器



１．Ｆ区調査前近景（南西から）

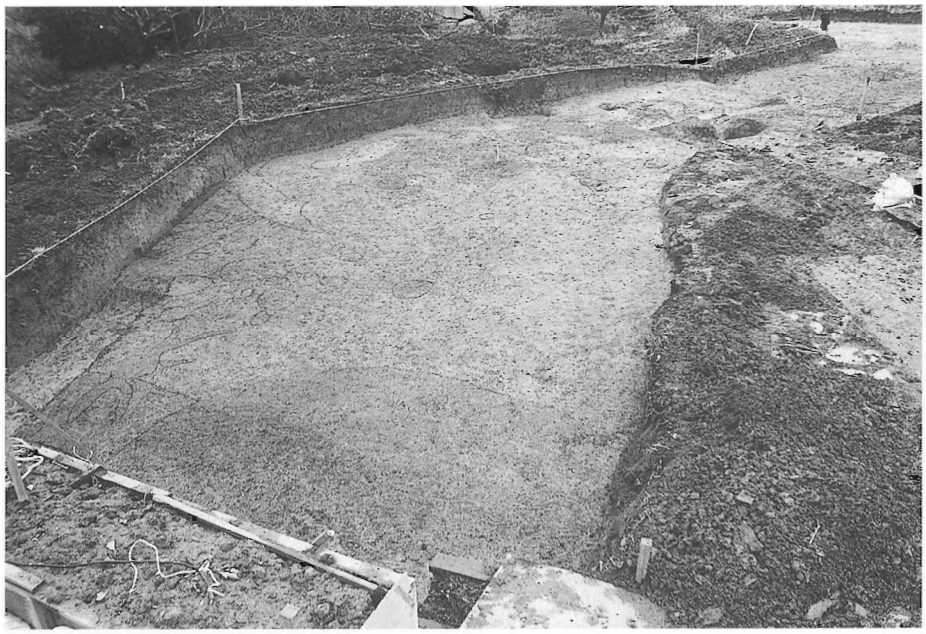
２．Ｆ区南西側調査後（南西から）

図版12 Ｆ区

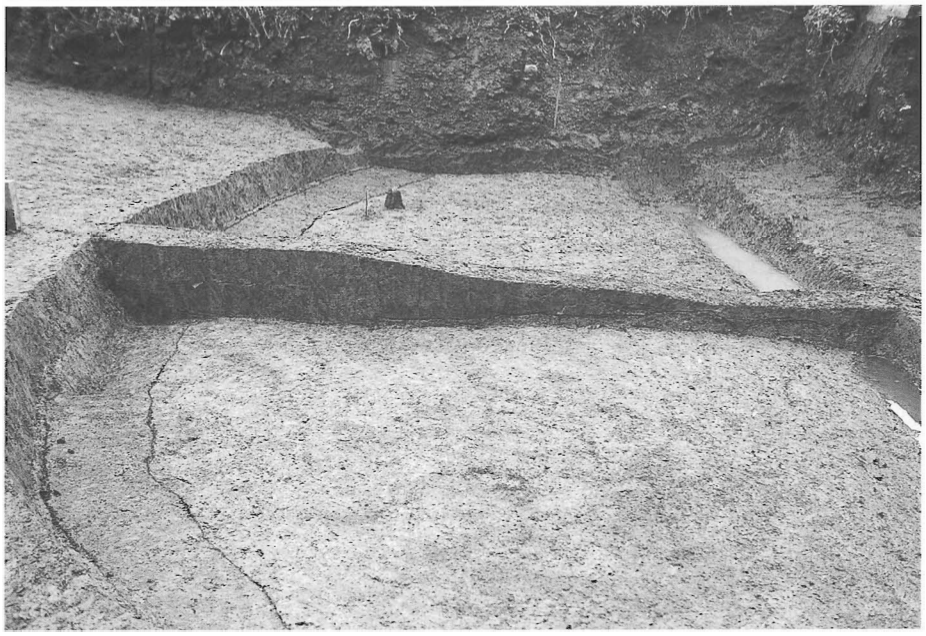


１．Ｆ区東側調査後（南西から）

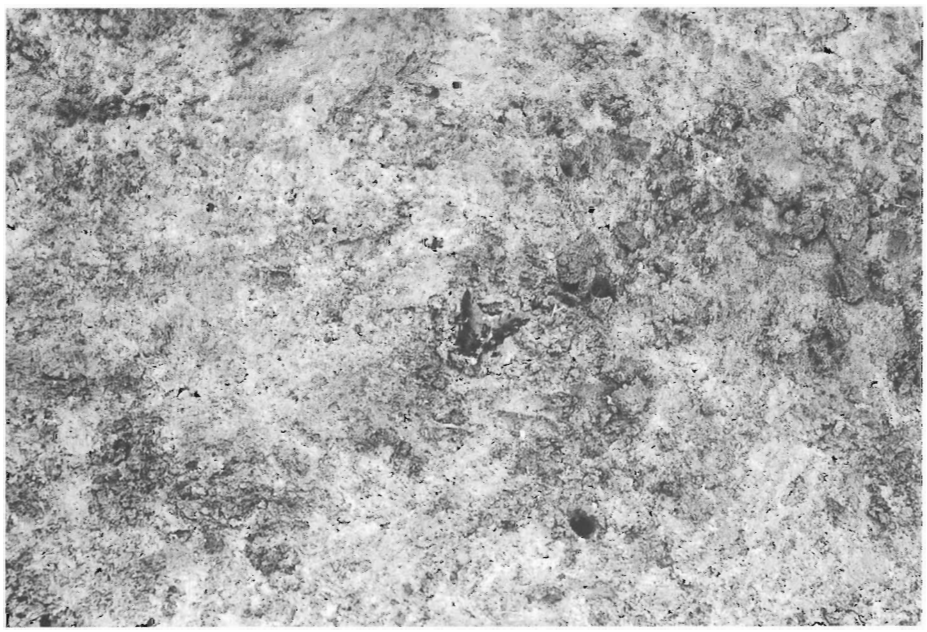
２．Ｆ区ＳＩ02・03完掘状況



1．Ｆ区ＳＩ01検出状況



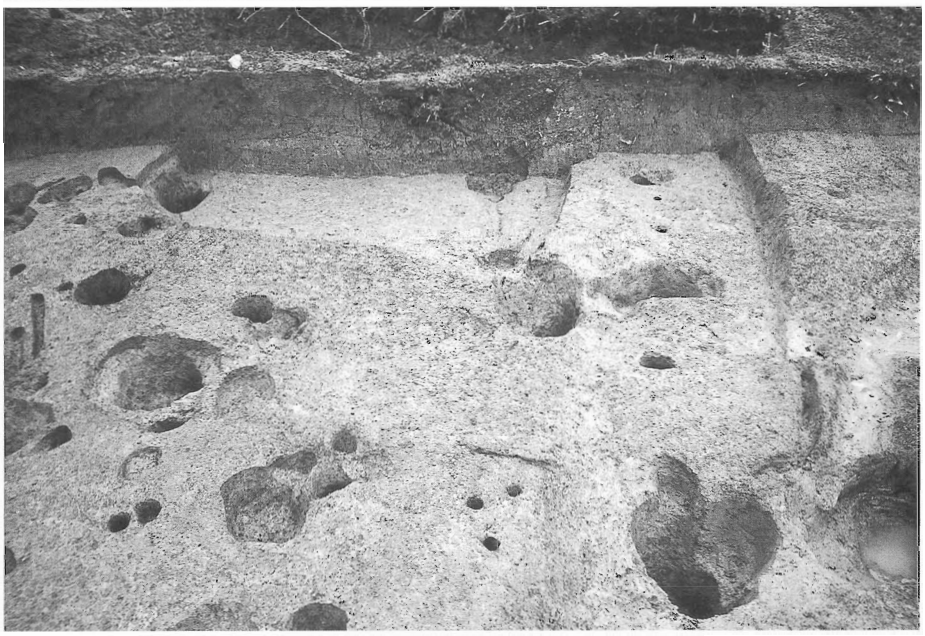
2．Ｆ区ＳＩ01土層
堆積状況



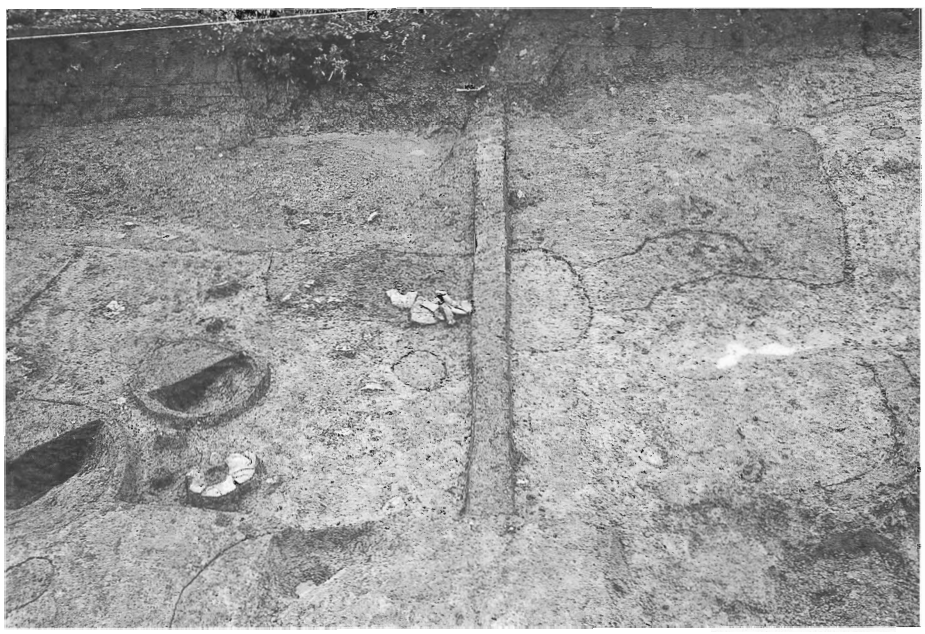
3．Ｆ区ＳＩ01
遺物出土状況（石鏃）

図版14　Ｆ区

1．Ｆ区ＳＩ01完掘状況
（南西から）



2．Ｆ区ＳＩ02完掘状況
（南から）



3．Ｆ区ＳＩ02遺構・
遺物検出状況

1．Ｆ区ＳＩ02中央ピット
土層断面

2．Ｆ区ＳＩ02壺・高杯
出土状況

3．Ｆ区ＳＩ02鼓形器台
出土状況

図版16 Ｆ区

1．Ｆ区ＳＩ03完掘状況
（西から）

2．Ｆ区ＳＩ03遺構･遺物
出土状況

3．Ｆ区ＳＩ03鼓形器台
出土状況

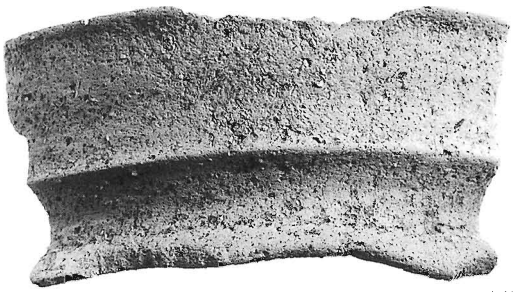
1．Ｆ区ＳＩ03高杯(脚部)
出土状況

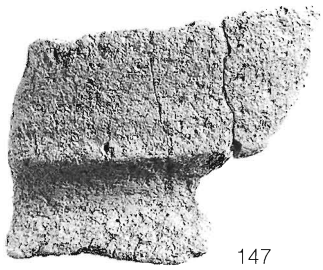
2．Ｆ区SD01・02
完掘状況（南から）

3．Ｆ区発掘作業風景

図版18 F区

144


145


147

S23

146

148

150

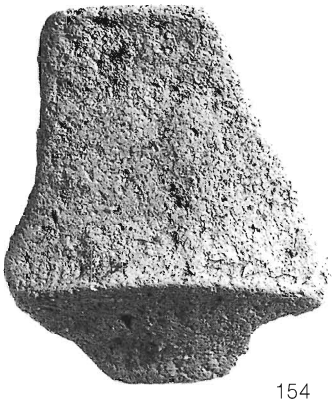
151

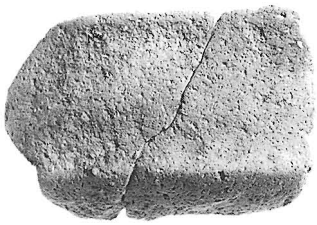
149

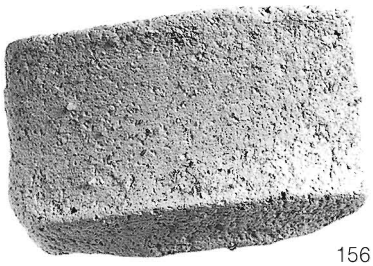
152

144，S23；SI01出土
145～152；SI02出土

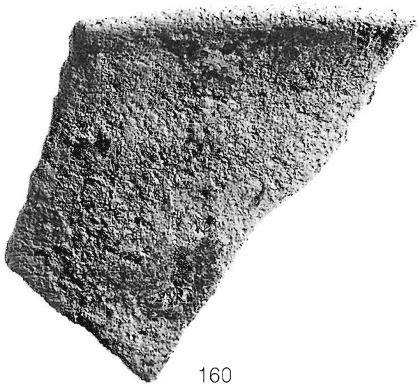
153


154


155


156

158


160

157

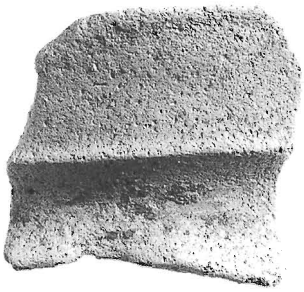
161

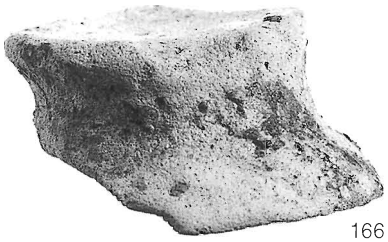
159

162

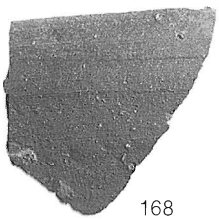
153～162；SI03出土

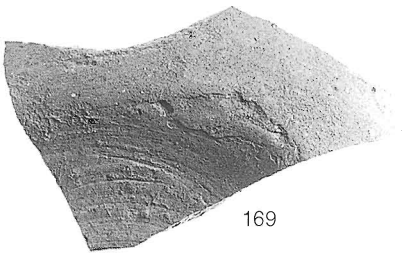
図版20　Ｆ区


164


166

167


168


169

170

171

172

164～172；遺構外出土

報　告　書　抄　録

ふりがな	にたんだいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	二反田遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松江市文化財調査報告書
シリーズ番号	第１０７集
編著者名	飯塚康行、廣濱貴子、三木雅子、瀬古諒子
編集機関	松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団
所在地	〒690-8540　島根県松江市末次町86番地　TEL：0852－55－5294 〒690-0886　島根県松江市母衣町180-21　TEL：0852－28－2065
発行年月日	2006年（平成18年）８月31日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
二反田遺跡（にたんだいせき）	島根県（しまねけん） 松江市（まつえし） 春日町（かすがちょう） 59ほか	32201	K63			20050701 ～20050831 20060112 ～20060201		民間宅地造成

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二反田遺跡	集落 散布地	弥生終末期 古墳前～中期 奈良～中世	竪穴住居跡 円形土壙 ピット	弥生土器 土師器 須恵器 石器	

松江市文化財調査報告書　第107集

二反田遺跡発掘調査報告書

2006年8月

発　行　　松　江　市　教　育　委　員　会

財団法人松江市教育文化振興事業団

印　刷　　松　栄　印　刷　有　限　会　社

松江市西川津町667－1